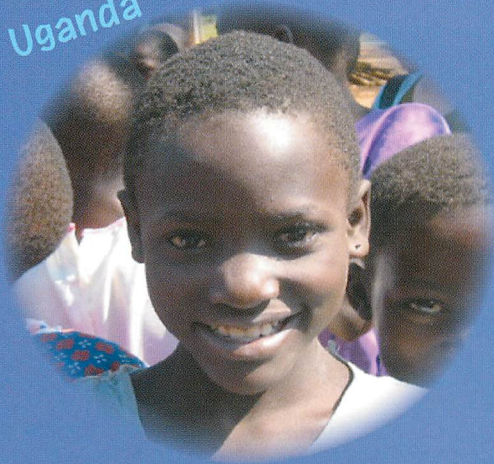


Uganda



Croatia



New York



Kosovo



Bosnia&Herzegovina



Philippines



Bunkyo Volunteers 2006

クロアチア難民キャンプ



たくさんの人たちが提供してくれた支援物資と一緒に出発



難民キャンプの様子。街灯が少ないので、夜になるとほぼ真っ暗



元 UNHCR 官房長官として難民センターを設立した松元さん（左端）と現地管理スタッフのカティツァさん（左から2番目）



キャンプでは自炊
天気に恵まれ、外で食事



部屋のようす

トイレ、シャワー、キッチン、冷蔵庫などが備え付けられていた。部屋によってお湯がでないこともあった

ボスニア・ヘルツェゴビナ リエドール



NGO・Bread Of Life へコンピューターを寄贈



ハンバリネのユースセンターの子どもたちに
歌を披露



子どもたちと一緒に
阿波踊りを楽しんだ
(ハンバリネ)

ユースセンターで
リエドール市議会
議長と共に記念撮影
(ハンバリネ)

現地の子どもたちとサッカー
で対決！





ユースセンターの子どもたちに文具や遊具などの物資を届けた（ハンバリネ）



ユースセンター近くにあるムスリム共同墓地、最も戦争の激しかった1992年に亡くなった人のお墓が多かった



ホワイトハウス内部
拷問の体験を語る
ラザック氏（左）と
ミルサッド氏（右）

オマルシュカ強制収容所内にある
ホワイトハウスと呼ばれたこの建物の中で
紛争中に多くの人々が拷問をうけ、死亡した



ユースセンター外観
（ルビア）

ユースセンターの子ど
もと共に、現地の遊び
を楽しんだ（ルビア）



ユースセンターを運営しているサネラさんに募金を手渡した（ルビア）



日本から持ってきたうちわに名前を書いてプレゼント（ルビア）

スレブレニツァ



UNDP（国連開発計画）経済開発専門家によるブリーフィング
スレブレニツァ修復計画について

UNDP により提供された羊



紛争により夫をなくした女性を支援する
UNDP のプロジェクトを視察

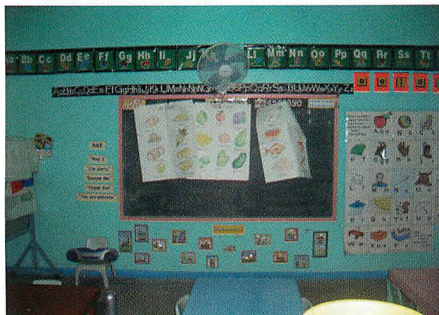


メモリアルパーク内にある中央慰霊堂



現在も増え続けているメモリアルパークの墓地

フィリピン



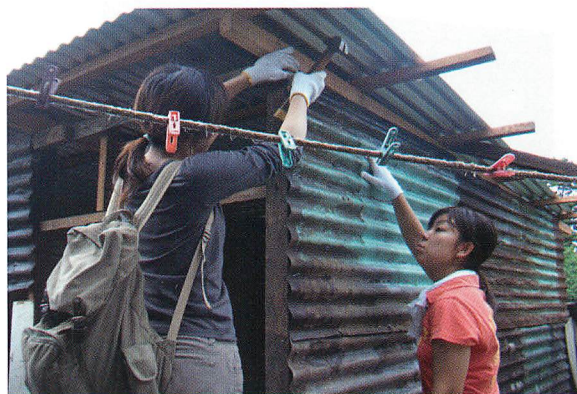
幼稚園の教室風景



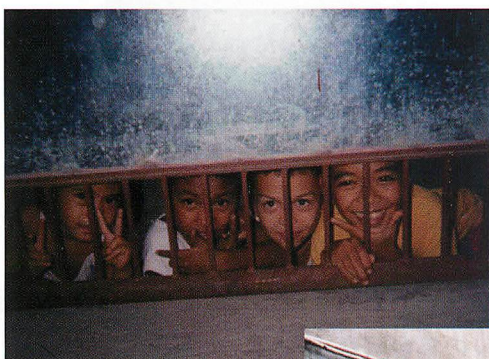
カメラに集まる子どもたち



橋の下に住む子ども
私たちに何を訴えているのか



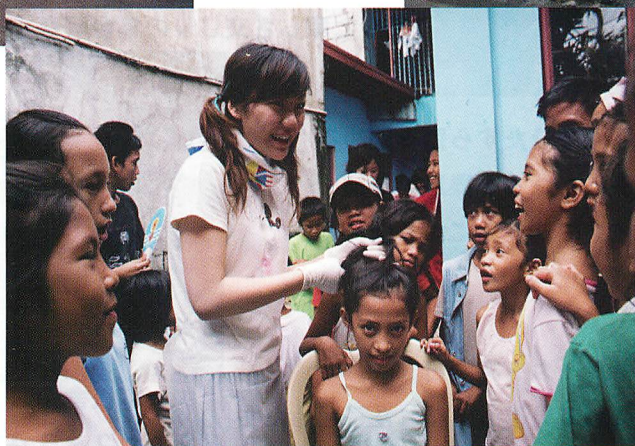
壊れた家の修理をお手伝い



のぞき窓から見える
子どもたちの笑顔



コミュニティ訪問



ヘアカット・
ヘアーアレンジ

ウガンダ



到着初日、FHI/Uカンパラオフィスにて
オリエンテーション



Line up! 手前ラインでセメントを教室へ
運び入れ、奥のラインで空になった容器を
元の場所へ

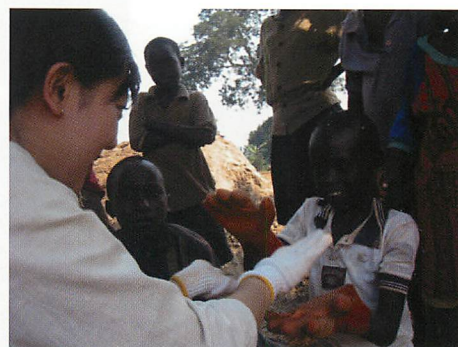


地面をひたすら踏み固める
子どもたちも裸足で参加
校舎のテラスになる部分
(ワーク中)

キョーガを発つ日
笑顔で見送ってくれた子どもたち



キョーガ学校初訪問。笑顔で出迎えてくれた
子どもたち



休憩時間でも子どもたちは元気いっぱい
楽しく手遊び(ワーク中)



教室の地面にコンクリートを敷き終えて今回のワークが終了
喜びと寂しさ交じりの集合写真



ついに校舎完成! 私たちが帰国してから
たった2ヶ月でこの変貌

目次

I. *	“Acknowledgement”	International Volunteer Advisory Committee (国際学部国際ボランティア委員会)	
*	「ボスニア戦争の証言者として生きる人々」	国際学部助教授 生田祐子	
II.	ボスニア・ヘルツェゴビナ、クロアチア活動報告 (2006 年夏)		1
*	活動スケジュール		2
*	クロアチアの概要		5
*	クロアチア難民センター		7
*	ボスニア・ヘルツェゴビナの概要		11
*	リエドールでの活動		14
*	スレブレニツァでの活動		22
*	ボスニア・サンスキーモスト遺体安置所 身元確認センター		25
*	サラエボ		26
*	クロアチア難民キャンプ、ボスニア・ヘルツェゴビナ会計報告		29
*	支援物資収集報告		31
*	広報活動		33
*	後方支援として		34
III.	アメリカ・ニューヨーク活動報告 (2006 年春)		35
*	活動スケジュール		36
*	World Trade Center の跡地を訪れて		37
*	Norman Thomas High School		38
*	コロンビア大学		39
*	NY 国連本部視察		39
*	ボランティア体験-NY de Volunteer		43
*	多民族国家・アメリカの原点-エリス島移民博物館を訪れて-		44
IV.	コソボ活動報告		45
*	活動スケジュール		46
*	コソボの概要		47
*	水力発電所訪問、デチャニのセルビア正教会		48
*	プリズレン視察、ラチャック村訪問、ベシアナちゃんのお宅訪問		49
*	アルバニア系住民地区の小学校訪問		50
	ミトロビッチャ橋“民族の架け橋”視察、セルビア人地区にて		
*	アルバニア系地区		51
*	アデミ・ヤシャーリー記念館		52

目次

V. フィリピン活動報告・ウガンダ活動報告	53
* フィリピン活動スケジュール	54
* ウガンダ活動スケジュール	55
* 日本国際飢餓対策機構について	57

フィリピン

* フィリピン概要	58
* バスケットコート建設、コミュニティー訪問	59
* ホームステイ、学校訪問、ヘアカットアレンジ	60
* ワークキャンプに参加して	61

ウガンダ

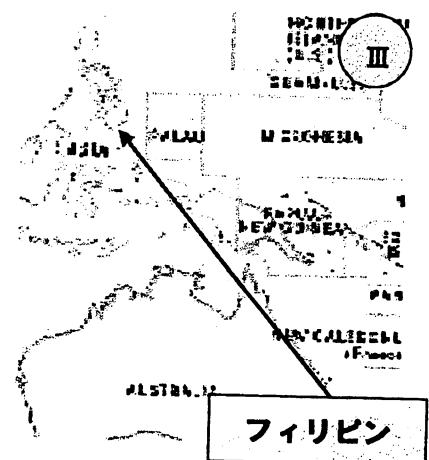
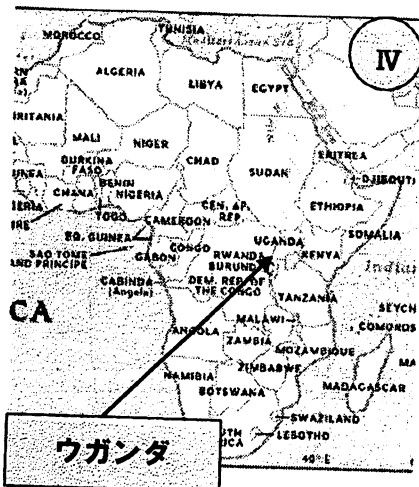
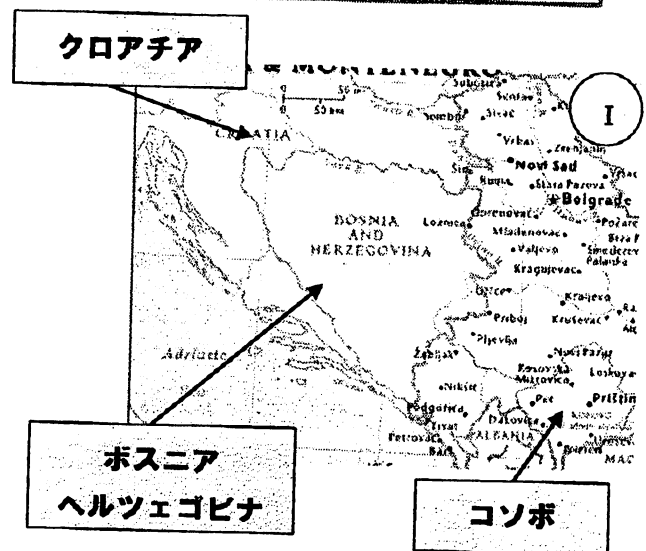
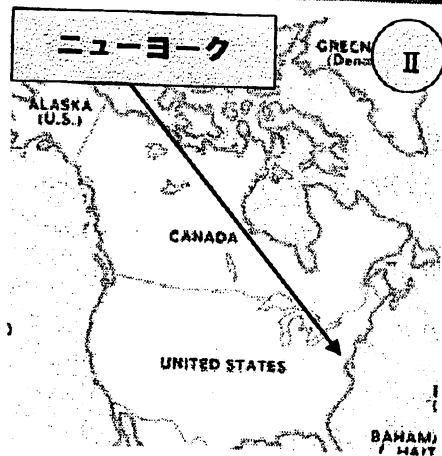
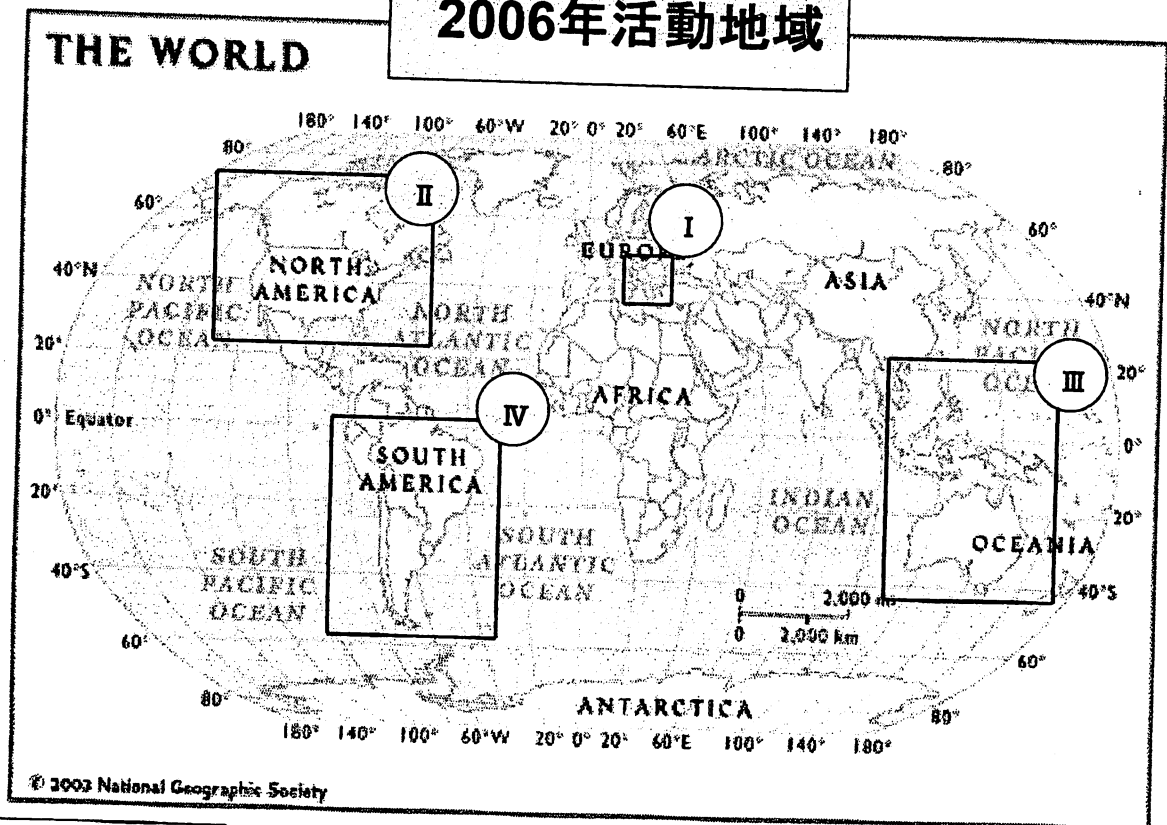
* ウガンダ概要、KYOGA（キョーガ）学校建設	62
* MUCONO 地区の学校・家庭訪問	64
* ミソンバコミュニティ家庭訪問	65

VII. お世話になった方々	66
----------------	----

VIII. 編集後記	69
------------	----



2006年活動地域



< 地図出展 >

<http://www.nationalgeographic.com/xpeditions/atlas/index.html?Parent=europe&Rootmap=croati>

Acknowledgement

On behalf of the Bunkyo University student volunteers (Bunkyo Volunteers) and Faculty of International Studies we wish to extend our heartfelt gratitude to all who have rendered warm and salient support for the volunteers to make their 2006 activities another success.

The volunteers visited a refugee camp in Croatia where people who had fled from the fighting in Croatia and Bosnia in early 1990s found their shelters. The volunteers listened to their ordeal during and after the war while they shared a time with them, dancing, singing and preparing firewoods for the coming winter.

At the peak period in late 1990s more than one thousand refugees were struggling to overcome their past anguish at the camp. In August 2006 when the volunteers visited about two hundred people were still living there. For them it was a far cry to return to their old hometowns as their former life had been torn apart completely.

For the young Japanese who have not known of a real war the visit to the camp was an encounter with a real war tragedy. The narration by the refugees was far beyond what they could imagine as a reality. After a few days of work at the refugee camp, the students were guided to Prijedor, in northeastern Bosnia, another epicenter of the war tragedy. The students witnessed firsthand there the genuine scar of so-called ethnic cleansing or genocide as they visited the ill-famed defunct concentration camp at Omarsca where massacres were carried out and the Identification Center at Sanskimost where the bodies of the war victims were collected and undergoing forensic identification.

Visit to Srebrenica, another eastern Bosnian town, added to their agonizing memory another choking moment as they strolled at the sprawling graveyards now called Memorial Park. "Never Again Srebrenica," reads an epitaph standing at the park which is still growing year by year as identified bodies are returned to bereaved families.

In this report, the students describe their experiences in their words in Croatia and Bosnia and Herzegovina, as well as those in New York, Kosovo, the Philippines and Uganda which were visited for volunteering during 2006.

These activities became possible thanks to the support and help of many people in Zagreb, Prijedor, Srebrenica, Sarajevo, Kosovo, New York, and towns of the Philippines and Uganda as well as many other individuals and organizations in Japan.

You will find all these people and organizations in the list of the last pages. Our appreciation goes to each and every one of them evenly.

If allowed, however, our special mention goes to a few, in particular, without whose support and kind assistance the activities of the Bunkyo Volunteers in 2006 could not be materialized. They are Mr. Hiroshi Matsumoto and Ms. Akemi Tanimoto in Zagreb, Mr. Igor Sovilg in Prijedor, Mr. Alex Prieto and Mr. Guy Dionne in Srebrenica, Dr. Neshad Asllani and Mr. Ali Asllani in Kosovo, Ms. Mayumi Watabe and her colleagues at the United Nations in New York, Dr. Eisuke Kanda and Ms. Izumi Okumura of the Japan International Food for the Hungry in Tokyo. They are our long-time friends whom we regard as passionate patrons of the Bunkyo volunteering.

We hope this report on the Bunkyo Volunteering 2006 will help young people in Japan open their eyes to the plight of people across the world. We also hope it will be known through this report that there are ambitious students at a corner in Japan who are striving to find a way to extend their helping hands to those away from Japan.

Advisers to the Bunkyo Volunteers:

Kyoichi NAKAMURA, Professor

Yuko IKUTA, Associate Professor

Faculty of International Studies

Bunkyo University

—文教大学国際ボランティア活動—
「ボスニア戦争の証言者として生きる人々」

国際学部国際ボランティア委員会
助教授 生田 祐子

サラエボのバスチャルシアと呼ばれる旧市街に、私のお気に入りの小さなレストランがある。その店の名前は、**"To Be or Not To Be"**。Not の文字に横線が入っているユニークな看板は、通りすぎるひとの視線を引く。シェークスピアのハムレットからのパロディであるが、ボスニア戦争の戦渦をくぐりぬけて生存したサラエボの人々の思いには、生きるか死ぬかの自らの選択など無かったのではないだろうか。何があっても生き抜く事、それが究極の選択だった人々に会える貴重な体験が、今回のボスニアでの活動のハイライトであった。

ボスニア戦争の最中、プリエドール郊外のオマルシュカにある鉄鉱山が強制収容所として利用され、多くのボスニアックまたはムスリム人と呼ばれるイスラム教徒のボスニアの人たちが虐殺されたことは、日本のメディアでは、必ずしも詳しくは紹介されていない。ボスニア戦争の戦争犯罪については、現在もおハーグの国際法廷において、証拠とともに事実確認が進行中のため、オマルシュカは、公式には戦争の記念館でもなく、私たちが訪問した日も、鉄鋼山の労働者たちが平常どおり勤務していた。しかし、その鉱山の敷地の真ん中に、白い建物が取り残されて、2人の収容経験のある男性が、私たちをその中へ案内をしてくれた。そのひとり、現在、プリエドールで放送局を運営するジャーナリストのラザック・フカノビッチ氏で、戦後難民として滞在したノルウェーで *"The Tenth Circle of Hell"*¹ と題した回想録を執筆、世界にオマルシュカでの虐殺の真相を知らせた張本人であった。収容所に関する証言記録の中で、親子(父親と息子)を連れ出し、自らの手で親または子に銃殺することを命令し、従わなければ両者とも銃殺するという最も非人道的な犯罪行為があったことを知る。フカノビッチ氏は、この難を逃れるため最後まで息子との接触を断ったという。どのような報道番組を見るよりも、本人から現場で証言を聞いたインパクトは強烈で、学生たちも通訳のイゴールの英語を一言も聞き逃すまいと全神経を集中していた。フカノビッチ氏は、戦後10年を経てこのような証言活動を始めたが、それまでは証言を望

¹ Hukanovic, Rezak(1993)*The Tenth Circle of Hell: A Memoir of Life in the Death Camps of Bosnia*, London:Abacus, A Division of Little, Brown and Company

まない人たちによる家族への嫌がらせを含め、プリエドールにもどることすら身に危険が及ぶこともあったと言う。最後に握手を求めた手は、拷問を受けた傷と変形した骨が痛々しかった。しかし、彼の手に命がけの尊いメッセージがこめられていた。「オマルシュカでの事実を世界に伝える使命がある。愚かな悲劇を繰り返さないために」。

今回のオマルシュカ訪問を実現させてくれ、フカノビッチ氏に出会えたのは、昨年から文教大学の活動のために通訳として支援してくれている、ボスニア人青年イゴールの力に尽きる。鉄鉱山施設への入館許可をとるために、アムステルダム国際機関に掛け合い、何度もファックスをやりとりし、話が進まない中を交渉し、特別の許可をとってくれた。セルビア人とボスニアックの両親の間に生まれた彼もまた歴史を証言する人として、使命感に溢れ、自ら危険を顧みず動いてくれた。

今回、クロアチア訪問の機会を提供くださった、元 UNHCR の官房長として、緒方貞子さんの支援で難民キャンプを開設した松元洋氏との出会いも忘れがたい。早朝、キャンプの森を回るジョギングにお伴させてもらいながら、外務省引退後、70歳台後半の今日まで、マケドニアを基点に難民救援活動を行う NGO を自ら展開しておられる様子をうかがった。ご自分のやりたいこと＝ミッション(使命)に忠実に生きておられる松元氏の姿から、人生の終盤をどのような形で過ごすのかが、個人のミッションが結実する瞬間だと考えさせられることがあった。

今年度で、国際学部の海外ボランティア活動も6年を迎え、少なくとも100名の学生が、紛争、平和構築、人間の安全保障をキーワードに世界の諸地域で「異なる境遇にある人」と関わりをもった。今年度は、途上国だけではなく、ニューヨーク国連本部での研修とボランティア先進国のアメリカの現状を視察、地域のボランティアにも挑戦した。文教大学卒業生の日野紀子氏²が立ち上げた NPO を通じ、地域ボランティアとして、ホームレスの人々の支援を行う現場を視察、実際にスープキッチンと呼ばれる支援活動に参加した。教育ボランティアは、9.11 の現場に近いマンハッタンのミッドタウンに位置する公立高校 **Norman Thomas High School** で日本を紹介する英語でのプレゼンテーションを行った。多民族で構成されるアメリカを象徴する学生たちの顔が印象的であった。

NY へ学生たちを連れて行こうと決した理由がある。国連本部の壁に、アメリカ人の

² 2002年に非営利団体 NY de Volunteer を設立。2005年 NY 社会に貢献する日本人として選ばれ、メディアで紹介される。

生活を描いた画家として有名なノーマン・ロックウェルの有名なモザイク画がある。世界の宗教、民族、人種が1枚の絵に描かれ、その真ん中にノーマン・ロックウェル自身が、手を合わせて祈っている。この絵は、ナンシー・レーガン夫人が国連40周年を記念して寄贈したものであるが、「おのれの欲するところを人に施せ」という聖書の黄金律が刻まれ、地球社会の目指すべき理想の姿がここに描かれている。私は、1989年の7月、コロンビア大学大学院に留学のため渡米した直後、世界中から集まった留学生仲間と国連に出かけ、この絵に釘付けになった。

当時の私は、ユダヤ教やイスラム教を背景とする国の親しい友人は皆無で、宗教観が異なる者同士が共に祈りの手を合わすことはないと考えていた。ところが、NYに4年近く滞在する間に、多宗教どころか、多様な価値観を含む多文化、様々なライフスタイルを生きる人々に否応なく関わることになり、自分自身の世界観を揺すぶられた経験がある。その結果、自分が何を選択し、何に価値を見いだして生きて行こうかを再認識する人生の助走期間でもあった。

この様に、多文化に接触することは、自らの生きていく方向性を問い直す機会になる。若い時代に異なる社会を見ることは、自分の未来への投資である。特に学生時代はパッケージ化された旅行に頼らず、自律的な旅をし、異なる光(=異文化)に触れてほしい。すると人生はずっと意義深くなる。なぜなら、すべての人間には、「ミッション」、すなわち、他者のために生きる大切な使命／役割が必ずあり、それを見いだす可能性が大きいからである。

ボランティア活動を通じて、自らの殻を打ち破り、新しい世界観を手に入れた文教生たちの声がキャンパス周辺にこだまし、新たな活動を生み出す後輩たちが続くことをここから願っている。活動を支援くださった国際学部を初め、様々な形で援助くださった教職員の皆様、学生の保護者の皆様にここから感謝の意を表し、この報告書をお届けしたい。

2006年11月24日



Golden Rule by N.Rockwell

クロアチア ボスニア・ヘルツェゴビナ 活動報告

2006年8月21日～9月1日

現地参加者

大学院国際協力学研究科	1年	瀬頭	輝実
国際学部国際関係学科	3年	江連	佑太郎
国際学部国際関係学科	3年	栗田	裕紀子
国際学部国際関係学科	3年	田渕	大輔
国際学部国際関係学科	3年	星	健作
国際学部国際関係学科	3年	山田	裕理
国際学部国際関係学科	3年	山本	和花奈
国際学部国際関係学科	2年	尾立	万記
国際学部国際コミュニケーション学科	3年	加藤	律子
国際学部国際コミュニケーション学科	3年	河野	茜
国際学部国際コミュニケーション学科	3年	佐藤	有希
国際学部国際コミュニケーション学科	3年	宮下	喜子
国際学部国際コミュニケーション学科	3年	山田	友紀乃
国際学部国際コミュニケーション学科	3年	吉川	彩

国内活動参加者

国際学部国際関係学科	3年	徳留	裕巳
国際学部国際コミュニケーション学科	3年	小原	香澄

アドバイザー

国際学部国際ボランティア委員会委員長	(国際学部教授・現地指導)	中村	恭一
国際学部国際ボランティア委員会委員長代行	(国際学部助教授・現地指導)	生田	祐子

＜活動スケジュール＞

8月21日(月)	<ul style="list-style-type: none"> ・成田第1ターミナル集合 ・宅配便で送った支援物資の受け取り ・成田発＜オーストリア航空52便＞ オーストリア・ウィーン国際空港着 ウィーン発＜オーストリア航空(チロリアン航空との共同運航便)677便＞ ・クロアチア・ザグレブ着 ・松元洋氏（クロアチア難民キャンプ支援活動家）と大使館・谷本明美氏の出迎え ・夕食、食料調達後、首都ザグレブの南の難民キャンプへ
8月22日(火)	<p>＜午前＞</p> <ul style="list-style-type: none"> ・在ザグレブ日本国大使館表敬訪問 参事官の三好功一氏、専門調査員の斎藤厚氏、谷本氏からブリーフィング ・Andrej Manovic氏（通訳）のおじの案内で、ザグレブ市街の視察 <p>＜午後＞</p> <ul style="list-style-type: none"> ・スーパーマーケットで食料の買出し
8月23日(水)	<p>＜午前＞</p> <ul style="list-style-type: none"> ・越冬用薪割り、草むしり <p>＜午後＞</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教会で交流会（歌、阿波踊りのパフォーマンス） ・松元氏から国際協力、国連活動、難民キャンプについてのブリーフィング
8月24日(木)	<p>＜午前＞</p> <ul style="list-style-type: none"> ・越冬用薪割り、草むしり <p>＜午後＞</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教会で子どもたちに日本からのリコーダー、ピアノのプレゼント、演奏指導 ・子どもたちと交流会 （サッカー、バレーボールなど） ・キャンプ管理人 Katica Sotinac 氏、アンドレさんから戦争体験の話や現地の話を聞く ・難民キャンプの有志による焼きとうもろこしのもてなしでお別れ会
8月25日(金)	<p>＜午前＞</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ボスニア・ヘルツェゴビナ・プリエドールへ出発 ・Igor Sovilg氏（通訳）と合流 ・ホームステイ先に到着 <p>＜午後＞</p> <ul style="list-style-type: none"> ・LDA（イタリアのNGO）を訪問 LDAの活動について、現地代表 Dragana Radanovic 氏からブリーフィング ・Info Point（地域市民への案内所、キャリアセンター）を訪問 ・帰還難民支援 NGO、Bread of Life 訪問 Bread of Life の活動についてのブリーフィング／日本からの支援物資のパソコン5台を贈呈
8月26日(土)	<p>＜午前＞</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ハンバリネのユースセンターを訪問 ディレクターの Azra Novkinic 氏からセンターについて説明 ・ボスニア戦争犠牲者（ムスリム）の墓地を訪問、慰霊 <p>＜午後＞</p> <ul style="list-style-type: none"> ・アズラさんの家で昼食（ボスニア料理を提供するプロジェクト） ・子どもたちと交流会 （サッカー、ダンス／歌、阿波踊りのパフォーマンス） ・プリエドール市議会議長の Azura Pasalic 氏から話を聞く ・子どもたちとバーベキュー

8月27日(日)	<p><午前></p> <ul style="list-style-type: none"> ・戦争中のセルビア人側強制収容所だったオマルシュカの鉱山精錬所を訪問 拷問虐殺現場となったホワイトハウスで生存者ラザック・フカノビッチ氏、ミルサッド氏から話を聞く <p><午後></p> <ul style="list-style-type: none"> ・トルコ調の建物で有名なレストラン「スターラ」で昼食 ・ルビアのユースセンターを訪問 ・子どもたちと交流会 (習字、歌、阿波踊りのパフォーマンス) ・ユースセンターが移動する予定の幼稚園を視察 ・Refika Aliskovic 氏の家で夕食 (ボスニア料理を提供するプロジェクト)
8月28日(月)	<p><午前></p> <ul style="list-style-type: none"> ・スレブレニツァへ出発 ・サンスキモーストの虐殺犠牲者の遺体身元確認センターを訪問 管理者のシバッチ氏から話を聞く <p><午後></p> <ul style="list-style-type: none"> ・スレブレニツァ郊外・ポトチャリのメモリアルパーク (戦争記念公園墓地) を視察
8月29日(火)	<p><午前></p> <ul style="list-style-type: none"> ・国連開発計画 (UNDP) スレブレニツァ事務所を訪問 スレブレニツァでの UNDP の活動について所長 Alexandre Prieto(プリエト)氏のブリーフィング ・メモリアルパーク (戦争記念公園墓地) を視察 <p><午後></p> <ul style="list-style-type: none"> ・プリエト氏と昼食 ・経済復興担当官 Guy Dionne 氏の案内で UNDP が支援する農家を訪問 ・セルビア教会やモスクを見学
8月30日(水)	<p><午前></p> <ul style="list-style-type: none"> ・サラエボへ出発 <p><午後></p> <ul style="list-style-type: none"> ・サラエボ市街を視察 ・自由行動
8月31日(木)	<p><午前></p> <ul style="list-style-type: none"> ・オリンピックスタジアムにある墓地を見学 ・戦争中に救援物資調達用に作られたトンネルの視察 <p><午後></p> <ul style="list-style-type: none"> ・自由行動 ・在サラエボ日本国大使館表敬訪問 壘二夫大使から話を聞く ・ボスニア政府経済顧問泉谷晃氏と夕食 ・すべてのボランティア活動予定を終了
9月1日(金)	<p><午前></p> <ul style="list-style-type: none"> ・サラエボにて解散

クロアチア共和国

(Republic of Croatia)

＜基礎データ＞

面積 5万6542km²

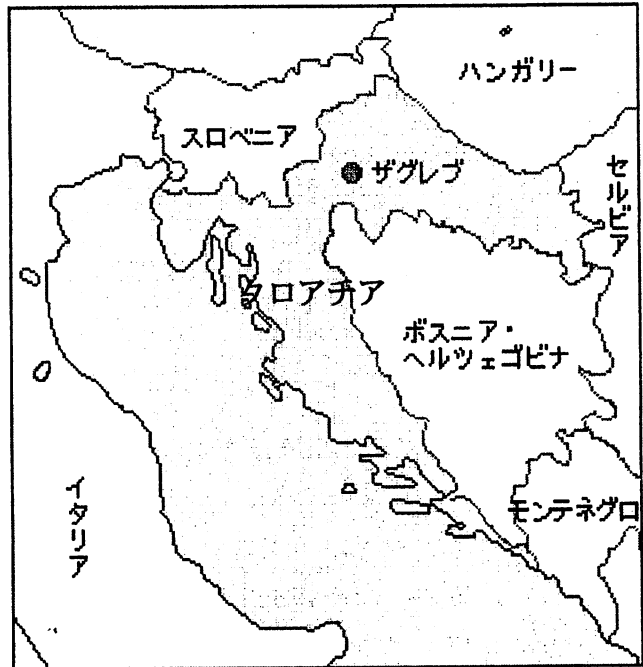
人口 444万人（2001年国勢調査）

首都 ザグレブ

言語 公用語はクロアチア語

宗教 カトリック、セルビア正教等

民族 クロアチア人（89.6%）
セルビア人（4.5%）等



出典：外務省ホームページ

<http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/croatia/>

＜クロアチアの歴史＞

クロアチアの形成

旧ユーゴスラビアを構成していた地域では、6世紀から7世紀にかけて、後にブルガリア・セルビア・クロアチア・スロベニアの4民族に分かれる南スラブ人が定住した。クロアチア人は東ローマ帝国の影響を受けてカトリックの地域となり、セルビア人は東方正教会の影響を受けた。クロアチアは10世紀初頭にはクロアチア王国として独立するが、11世紀にはハンガリーの支配下に置かれる。その後も政治的な自治権を認められてはいたが、オーストリア・ハンガリー帝国の支配下に置かれることになった。

ユーゴスラビアの形成と崩壊

第一次世界大戦でオーストリア・ハンガリー帝国が滅びると、1918年にセルビア人・クロアチア人・スロベニア人王国（1929年にユーゴスラビア王国と改称）を建国した。しかし、この王国はセルビア人が主導しており、このことがクロアチア内での不満を高めた。そして1941年にナチス・ドイツがユーゴスラビアに侵攻した後、アンテ・パベリッチが率いる民族主義集団ウスタシャを中心としたナチス・ドイツの傀儡政権クロアチア独立国を設立し、ウスタシャを中心とするクロアチア人は、国内のセルビア人を大虐殺した。

第二次世界大戦以降は、チトーを中心としてユーゴスラビア連邦人民共和国を設立した。しかし、チトーという強力な指導者が死去した後、各地で民族問題が表面化していった。そして、クロアチアは国内に住むセルビア人問題を抱えながらも1991年6月に独立を宣言した。

クロアチア紛争

チトー死去後、クロアチアではセルビア人主導のユーゴスラビアへの不満とセルビア民族主義を掲げて台頭してきたソロボダン・ミロシェビッチの影響により、再び民族主義が高まった。クロアチアの大統領に就任したフラニョ・トゥジマンは、国民投票の支持を得て独立を宣言した。このためクロアチア国内のセルビア人は自身がクロアチア国内で少数派になることを恐れて、ユーゴスラビア国家連合軍の支援を受けて独立に反対した。このクロアチア人とセルビア人の争いは、後にボスニア・ヘルツェゴビナの独立にも影響を与える結果となった。

紛争はスラボニア地方等からセルビア人が手を引くことで終結した。1995 年まで続いたこの紛争により、クロアチア国内のスラボニア地方からは多くのセルビア人が難民としてセルビアに流出した。

現在のクロアチア

クロアチア紛争時のセルビア人掃討やボスニア・ヘルツェゴビナ紛争の介入など、民族主義的で非民主的政策を行ってきたトゥジマン政権以降は、メシッチ大統領の下、民主的連立政権が発足した。2003 年 11 月の議会選挙では、トゥジマン時代の与党であったクロアチア民主同盟が最大議席数を獲得し、現在のサナデル内閣が発足した。再び民族主義的な路線を歩むのではないかという国際社会の懸念の中、旧ユーゴ国際刑事裁判所（ICTY）と協力する姿勢を見せるなど、国際社会に協調的な路線を歩んでいる。

参考文献

「外務省ホームページ」 <http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/croatia/>

『ユーゴスラビア現代史』 柴 宣弘 岩波新書 1996 年

＜在クロアチア日本国大使館＞

クロアチアの首都ザグレブにある日本大使館では、参事官である三好功一氏、専門調査員の谷本明美氏、齋藤厚氏に話を伺うことができた。

クロアチアのボスニア紛争の被害は、ボスニア・ヘルツェゴビナに比べると少なく、実際にザグレブでは第二次世界大戦以降の紛争による被害は少ない。しかし、ブコバルやオシエク等の地域は激戦地となり、紛争により多くの被害がでたという。失業率なども、被害が少なかった北部は低いなど、紛争の被害による差が現在にも影響を与えていると感じさせられた。

日本は草の根無償資金援助等の経済援助を行っており、今年も草の根無償資金援助で金額としては 7000 万円～8000 万円の援助を予定しているという。この援助金はインフラや小学校の整備や水道管等の設備、地雷の除去等に使われるという。

クロアチアでは紛争時に埋められた地雷の除去も問題となっていて、年間約 100 件の地雷による



大使館にてクロアチア現状についてのブリーフィングを受ける

被害があり、6人～10人の人が亡くなっているという。クロアチアの地雷は、国連によれば7割から8割は除去したといわれているが、紛争中は自分の住居を守るために地雷を埋めている時期があったため、その数は未知数と考えられる。

谷本氏によると、クロアチアの支援は、物品共有から次の援助へ移行する時期であり、国の援助なれの問題や援助される側の主導性が求められる。また EU 加盟を目指すクロアチアは、いかにして観光業や農業を生かしていくかが重要な課題と思われる。

<首都 ザグレブ>

今回の活動で私たちがクロアチアで直接足を踏み入れたのは、首都であるザグレブと難民キャンプだけだった。通訳であるアンドレア・マノヴィッチ氏の叔父が観光関係の仕事をしていることもあり、現在修理中の聖母被昇天大聖堂や、屋根に敷き詰められたタイルが美しい聖マルコ教会、多くの人々が行き来し活気あふれる青果市場等、ザグレブの町並みを一通り案内してもらうことができた。

ザグレブはクロアチア紛争等の被害が少なかったためか、ボスニア・ヘルツェゴビナのように銃弾の跡が生々しく残っていたりすることはなく、大きな建物が並び、その町並みはヨーロッパの文明を感じさせるとても魅力的な場所であった。

クロアチア難民センター

<薪割り>

朝食後、1軒の老婦人の家へ行った。家の前には大量の丸太があった。これらは冬に使う暖炉にくべる薪として支給されているもの。1人暮らしをしている体の不自由なお年寄りには薪割りが出来ないためにそのまま放置されていたのであった。そして今回私たちがその方たちのために薪割りをすることになったのだ。しかしほぼ全員薪割りをし



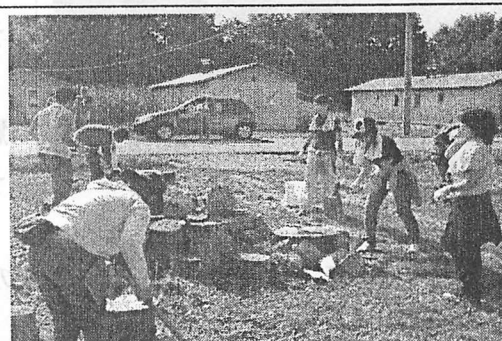
カティツァさんのパブリカ料理

た経験がなかったため、斧を待つことでさえた

めらってしまった。その様子を見ていた1人のお年寄りが薪割りの手本を見せてくれ、それにならって私たちも戸惑いながらも薪割りを始めた。

斧には大きいものと小さいものがあり、大きな斧では丸太を切り、小さな斧では薪を小さく切る作業をした。数人が薪割りをし、他の人達は傍らで草刈や草むしりをした。

目の見えない老婦人にとって薪割りは不可能で私たちが薪割り



クロアチア難民キャンプでの薪割りの様子

をする前は、薪の備蓄はほとんどなくなっていた。

最初は全く割ることが出来なかったが、コツを掴み、最終的には全員が薪を割ることが出来た。日本では出来ない経験をし、そのことが難民キャンプに住むお年寄りの役にたてたということを非常に嬉しく思った。薪割りのお礼としてお茶菓子を出してくれ、感謝の気持ちを実感していた。また、言葉は通じないのだが、薪割りを通して少しずつではあるがコミュニケーションをとり、笑顔でたくさんの人と接することが出来た。

お昼にはキャンプの管理人であるカティツァ・ソティナク氏がクロアチア料理のパプリカとパンケーキをご馳走してくれた。日本とは全く違う料理に驚いたが、パプリカ料理のおいしさに夢中になってしまった。また、天気の良い外で食べるご飯のおいしさに全員が満足していた。昼ごはんにはカティツァさんが作ってくれた揚げパンとサラダもご馳走になった。現地の方の私たちに対する感謝と暖かい気持ちが伝わってくる。

＜物資を贈る・子ども達と交流＞

難民キャンプに日本から持ってきた支援物資の楽器やボールを渡した。すると予想もしていなかった事に楽器の使い方をたずねられた。私たちが持っていたのはアルト・ソプラノリコーダー、ピアノカの3種類の楽器で、集会所に集まった子どもたちにそれらの楽器を配り、楽器の使い方を教えた。私たちもこれらの楽器に触れるのは久しぶりで、音の確認をお互いにしながら行った。

私たちは円状になって各楽器を教えることにした。まずは全体でドレミを練習した。リコーダー



リコーダーの使い方を子供たちに教える

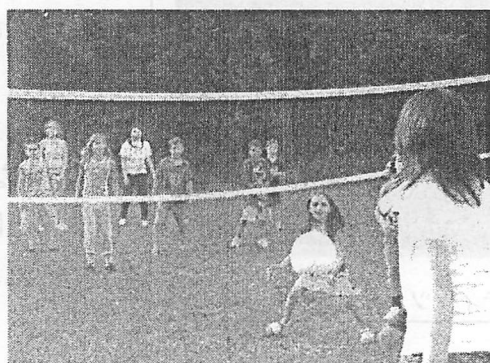
を練習していた子どもたちは指がとどかなかったり、どの指をふさがなくてはいけないか混乱したりして、ドレミを最後まで完成させるのだけでも時間がかかった。しかし、子どもの指を上から一緒におさえ、何度も何度も音を出すことによって徐々にちゃんとした音が出るようになった。

ピアノカを練習していた子供は最初、楽器のつくりに驚いていた。リコーダーにくらべて比較的簡単だったようだ。

何か曲を演奏できるようになってもらおうと彼らに教えたのが、「かえるの歌」である。数人の子どもは上手に音が出るのを披露してくれたりする場面もあった。

リコーダーを練習していた子どもたちは穴を上手くふさぐことが出来ず、苦戦していたが、熱心に練習していた。中にはピアノカを上手に弾きこなす少年もあり、曲を披露してくれた。

その日の夕方はサッカーやバレーボールをして子どもたちと遊んだ。サッカーをしていたのは主に男子であった。日本勢に人数が足りないこともあってクロアチアの子どもが日本のチームにはいたりしていた。ゲームをしていたのは10代の青少年たちで、外国から来た私たちとの試合を十分に楽しんでいるようであった。



子供たちとバレーボールをしている様子

バレーボールに夢中だったのは 10 歳くらいの少女やサッカーの試合に参加できない小さな子どもたちであった。我々の掛け声や行動を真似してうれしそうに笑う場面が多々あった。時には敵陣のコートに入り、トラブルを起こす子どももいたが、元気いっぱいの彼らはいつまでも走り回っていた。

＜カティツツァさんの話＞

夕食後に難民キャンプでいろいろお世話をしてくれたカティツツァさんの苦労や家族の話、難民キャンプでの生活などについて話を聞いた。

紛争で混乱していたころ、多くの人がヨーロッパ各地に移り住んだそうだ。カティツツァさんもこの難民キャンプに避難した。紛争時のトラウマが残る子供も多く、彼女から聞く話は紛争のつらさを私たちに教えてくれた。紛争のクロアチアには難民キャンプが数多くあったそうだが、今は3つしか残っていないという。

私たちの訪れた難民キャンプの近くでは仕事に就くことが難しいらしく、仕事がある人はラッキーだそうだ。しかし、この難民キャンプの大半の住民は老人で、仕事をしていない人がほとんどだという。

私たちが難民キャンプの人のことを知りたいという気持ちが強いように、カティツツァさんからもいろいろ日本について質問をされた。日本の学校システムや就職状況、地震などについて話をした。また、カティツツァさんだけでなく、通訳をしてくれたクロアチア大学の学生アンドレア君からも家族についてや学校、紛争当時の記憶についてもいろいろな話を聞いた。

＜阿波踊り・歌の披露＞

この日のために練習に練習を重ねてきたので、全員が浴衣に身を包み気合いを入れて望んだ。今回私たちが披露したのは歌「となりのトトロ」、「BELIEVE」、「故郷」、「上を向いて歩こう」、「I have a dream」の5曲と阿波踊りである。キャンプ内の教会にはお年寄りから赤ちゃんまでが集合し、私たちのパフォーマンスを見に来てくれた。たくさんの拍手に迎えられ、感謝の気持ちをこめて5曲を歌った。歌のパフォーマンス後、日本からの支援物資を提供した。そのお返しとして難民キャンプの支援活動家である松元洋氏がトランペットを、現地の子どもたちが歌を披露してくれた。歌の内容は通じていないだろう。しかし音楽を通して心が通じ合った瞬間だと感じた。その後、教会の外で阿波踊りを披露した。最初は驚いた顔で見ていた人たちもいたが、大いに楽しんで見てくれた。最後には集まってくれた人全員で大きな掛け声とともに大きな輪になって踊った。たくさんの笑顔と笑い声が聞けたことに満足し、私たちの最初のパフォーマンスは成功を収めたのである。

パフォーマンス後はキャンプの人たちとの交流をした。ハグとキスをくれるおばあさんやフレンドリーに話しかけてくれる子どもたちなどたくさんの人とコミュニケーションをとること



パフォーマンス後の記念写真

ができた。共通の言葉が使えないので言葉によるコミュニケーションは出来ないが、歌と踊りを通して私たちは体でコミュニケーションをとれるようになっていた。言葉はコミュニケーションする上で大事なツールであるが、言葉を使う前にコミュニケーションをしようとする意思と態度が最も大切だと実感した時間であった。

＜松元洋氏について＞

松元洋氏は 1955 年より外務省に勤務、ベトナムおよびジュネーブ在勤の後、東京外大講師、米国フルブライト客員講師を勤めていた。1973 年より国連本部事務局勤務を開始し、81 年より UNHCR の在ソマリア代表、本部の官房長に任命される。1991 年より国連イラク人道支援計画副調整官として 3 年間の勤務を行った後、1994 年より在クロアチア日本難民センター所長を経て、現在 NPO・日本救援行動センター専務理事として、難民キャンプの支援活動を展開している。

松元洋氏が難民キャンプとクロアチア情勢についてお話してくださった。

難民キャンプは日本の ODA で可能になった。最初はクロアチアの国内避難民 500 人がこの難民キャンプに住んでいた。難民キャンプに人が集まるにつれ、大きな問題が発生していた。武器を持ち込む人や他の人をよく思わない人など、人間関係が良好でなかったためだ。しかし少しずつ難民が帰郷してしまい、一時は 1000 人いた難民も今では 200 人ほどになっている。そのため住居施設と広大な土地が残った。現在はその土地を利用して人を集めることがキャンプの課題となっているのである。

また、日本、クロアチア共に現在の協力関係を見直すことも大切だということもお話してくださった。日本は資金の援助はするが、人的支援は行わない。アメリカとの国交を重要視しているが、そんなにアメリカとの関係が重要なのか。それは日本がいかに小さい中にいるかを示していると言える。一方で、クロアチアとの協力は盛んではない。以上のような話であった。



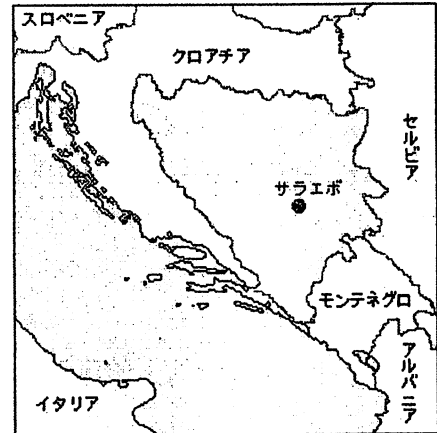
ボスニア・ヘルツェゴビナ

(Bosnia and Herzegovina)

～つい 10 年程前まで内戦が続いていた国～

<基礎データ>

面積 5.1 万 km²
人口 402 万人 (2005 年 7 月)
首都 サラエボ
言語 ボスニア語、セルビア語、クロアチア語
宗教 イスラム教、セルビア正教、カトリック



出典：外務省ホームページ

<http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/croatia/>

<ボスニア・ヘルツェゴビナの歴史>

6 世紀、南スラブ人定住開始。12 世紀にボスニア王国が成立したが、15 世紀後半以後 400 年間、オスマン帝国の支配下に入り、多くのセルビア人、クロアチア人がイスラム教に改宗し、他のバルカン諸国に例がないほど文化のトルコ化が進行した。19 世紀後半、オスマン帝国の衰退に伴い、オーストリアがボスニア・ヘルツェゴビナの統治権を獲得して占領、ついで 1908 年、オーストリアがボスニア・ヘルツェゴビナを併合した。

1914 年のサラエボ事件をきっかけに第一次世界大戦が始まった。オーストリア・ハンガリー帝国が解体すると、セルビアの南スラブ連合構想に基づいてセルビア人・クロアチア人・スロベニア人王国（後にユーゴスラビア王国と改称）が建国される。ボスニア・ヘルツェゴビナもそこに組み込まれた。その後、第二次世界大戦中には、ドイツの傀儡国家であったクロアチア独立国に支配され、その間には、ファシスト集団「ウスタシャ」がイスラム教徒を使って実行したセルビア人大虐殺も起きた。

そして、終戦後、1946 年にユーゴスラビア連邦人民共和国が建国される。ボスニア・ヘルツェゴビナは、スロベニア、クロアチア、セルビア・モンテネグロ、マケドニアと共にこの旧ユーゴスラビアを構成、この国には、6 つの民族、4 つの言語、3 つの宗教が含まれていた。

なかでもボスニアには、イスラム教徒のボスニャック（ムスリム）、セルビア正教徒のセルビア人、カトリック教徒のクロアチア人と、3 つの民族と宗教が共存し、「民族のモザイク」と呼ばれ、旧ユーゴ連邦の中でも、とりわけ複雑な構成であった。

<ボスニア紛争への道>

旧ユーゴでは、宗教は違ったが、3 者は互いの慣習を認め合って生きてきた時代も長かった。と

ところが、チトーが1980年に亡くなると、連邦は次第に求心力を失っていった。1979年の石油ショックで深刻になった経済が、その後ますます悪くなるにつれ、生活に苦しむ人々の不満を吸い上げるように、民族主義が台頭していった。1989年、急進的なセルビア民族主義を掲げるミロシェビッチが、セルビア共和国内のコソボ自治州の自治権を取り上げる動きに出ると、セルビア民族主義の拡大を恐れたスロベニアとクロアチアは、独立を宣言し連邦を離脱した。その結果、両国とも連邦との間で戦争になった。

このように、旧ユーゴ連邦の崩壊が進む中、ボスニアでも独立するかどうかで国内に対立が起こった。人口の4割強を占める多数派のイスラム教徒(ムスリム)とクロアチア人は独立を求めたが、3割ほどのセルビア人は、連邦から離れると少数派に転落するのを恐れて反対し、ボスニア内にセルビア人共和国を作ろうとした。

<ボスニア紛争>

1992年4月、民族間で領土分割を争い、ボスニア紛争が勃発。互いに領土拡大を巡り激しい戦闘が行われた。

ボスニアでもすでに民族主義政党が権力を握っていたため、どの民族の政治家もメディアを使って他の民族に対する恐怖をあおり、「やらなければやられる」という緊迫感を作り出した。そして、犯罪者などを集めた民兵集団を組織し、焼き討ちや略奪、殺人、レイプなどを行わせて、住民が逃げ出すように仕向けた。このように、その地域から自民族以外を排除する「民族浄化」を、各勢力それぞれが進めたのである。セルビアとクロアチアも軍事干渉を強め、紛争は泥沼化していく。

1995年8月、サラエボへの攻撃を止めさせるために、北大西洋条約機構軍(NATO)による空爆が実施されるが、戦争はさらに激化し、クロアチアはセルビア人の住む地域に猛攻撃を仕掛け、また、セルビア軍はスレブレニツァでおよそ7000人の非武装の成人男性や少年を殺害した。これは、第二次大戦以降、ヨーロッパで起こった最悪の虐殺であった。

<終結>

アメリカの強力なイニシアチブによって、1994年にはNATOによる制裁空爆を経て、1995年に国際連合の調停で和平に調印(ディトン和平合意)。1995年12月、3年半にわたった戦争は終結した。戦争経験者は、「自分の家族を殺した人物を知っている。」という、あまりに身近な民族同士で起こったこの紛争は、死者20万、難民・避難民200万を出した戦後欧州で最悪のものであった。

<現在>

つい10年程前まで内戦をしていた国、ボスニア・ヘルツェゴビナ。ボスニア・ヘルツェゴビナは、1つの国家でありながら、警察や軍をもそれぞれ独自に所有する、2つの主体から構成されるという複雑な国家形態をとっている。一つは、イスラム教徒勢力とクロアチア人からなる「ボスニア・ヘルツェゴビナ連邦」、もう一つはセルビア人による「スルプスカ共和国」(セルビア人共和国)である。このため、政権もボスニア連邦側から2人、セルビア人共和国側から1人の計3人によって率いられており、この3人が国家元首を3ヵ月交代で担うという状況にある。

2005年に紛争終結後10年を迎えたボスニア・ヘルツェゴビナでは、和平が定着してきており、紛争で破壊された経済・社会インフラの回復は国際社会の支援によって順調に進んでいる。治安も回復し、危険性は少なくなっている。

政治的にも、欧州の一員としての道を歩もうとしており、EU加盟が国家の最優先課題の一つである。民族対立は完全に解消されたわけではないが、この目標に向かって国際社会の支援を得ながら、民主主義体制確立など諸改革に取り組んでいる。

<地雷>

紛争の際に埋設された地雷の除去作業は進んでいるが、未だ完全には除去されていない。

<経済>

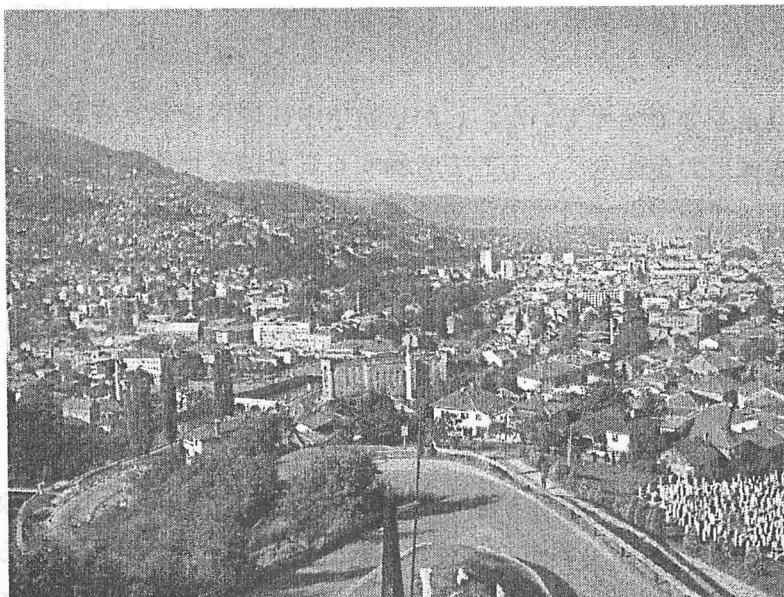
主要産業は、木材業、鉱業、繊維業、電力。公式の失業率は47パーセント（2004年）であるが、出稼ぎ労働者を考えると、実質的には、この数値よりかなり低い。また、経済成長率も5パーセント（2004年）であり、経済は上向いている。

<日本との関係>

日本は、96年1月23日にボスニアを国家と承認し、同年2月9日に外交関係を開設した。内戦においてボスニアの経済が壊滅的打撃を受けたこともあり、経済関係は乏しいが、治安の回復、経済成長ともに、今後拡大していくであろう。

<参考文献>

- ・ 「外務省ホームページ」 <http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/index.html>
- ・ 『国際連合の基礎知識』 国際連合広報局 財団法人世界の動き社 2002年
- ・ 『図説 世界の紛争がよくわかる本』 毎日新聞社外信部 東京書籍 2004年
- ・ 『平和の種をまく ボスニアの少女エミナ』 大塚敦子 岩崎書店 2006年
- ・ 『ボスニアで起きたこと』 伊藤芳明 岩波書店 1996年



Prijedor (プリエドール)

<プリエドール概要>

ボスニアの北西部（スルプスカ共和国）に位置する都市。そのため人口 10 万 8600 人のうち、75 パーセントがセルビア人、23 パーセントがボスニア人、1 パーセント弱がクロアチア人、残りの 1 パーセント強がその他となっている。プリエドール議会は 31 人で構成されており、8 人が SDS (Serbian Democratic Party－セルビア民主党)、6 人が SNSD (Alliance of Independent Social Democrats－独立社会民主党連盟) に属している。政党は全部で 4 党と多様であるため不安定で不安定な状態が続いている。しかし、市議会と NGO が協力して、全ての民族が共存できる市を目指した活動を行っている。



壊されてそのままの家

ボスニア紛争中、プリエドールはセルビア人勢力の活動拠点となり、イスラム教徒（ムスリム）は近隣のコザラ山に逃げた。プリエドールの周辺にはバニヤルカ・オマルシュカ・トルノボリの 3 カ所に強制収容所があり、セルビア人兵士に捕まったムスリムはいずれかの収容所に入れられた。特にひどい拷問が行われたのがオマルシュカの収容所だ。収容者のうち銃で殺されたのはほんの数人で、ほとんどの人が斧や棒などで撲殺されたり、ケーブルなどで絞殺されたりしたという。また、「民族浄化」という名のもと、女性をレイプするという非人道的なことが行われた。

紛争が終結すると、収容所は解放され、クロアチアやドイツに逃げていた難民もプリエドールに戻ってきた。しかし中には「辛い体験を思い出してしまう」と帰って来ることができない人もいるという。

プリエドールは戦前、製紙工業で栄えていた。しかし紛争中に爆弾を落とされ、工場は全てなくなってしまった。現在は機械もお金もなく、そこで労働することは不可能になってしまった。このように、紛争後のひどい経済状態ではすべての帰還難民は仕事を得られないため失業率も高く、大きな問題となっている。

もう 1 つの大きな問題は、紛争中に落とされた爆弾に含まれるウランが土に溶け、水を汚染していることだ。その汚染した水により病気になる人が多発した。しかし医者に診てもらうのにはお金がかかるため、多くの人は病院に行くお金もなく苦しんでいる。

プリエドールの街を歩いていると、街全体が暗い雰囲気包まれていたという印象を受けた。私たちがプリエドールに滞在している間天気が良くなかったせいもあるが、色で例えると、灰色がびったりくるような街だと感じた。まるで私たちに「紛争で起きたことから目をそらさずに、しっかり受け止める」と言うメッセージが込められている街だと思った。

昨年も同じ場所を訪れている同行の中村、生田両先生は、昨年までは破壊されたままだった家の多くが再建されていて、見違えるほどきれいな街になっているとおっしゃっていた。たしかに、建

て直されたばかりと思われる家も多くあったため、その一部分だけを見ると紛争が起きていた場所だとは実感できなかった。しかし、普通に道路を走っていて破壊された家があるのを見ると、言葉にできない思いと恐怖を感じた。

私たちのために辛い過去を思い出し正面から向き合い、話をしてくださったプリエドールの方々にとても感謝している。その人たちがどのような思いであったのか深く考え、紛争という事実を受け止め、決して忘れてはいけないと思った。

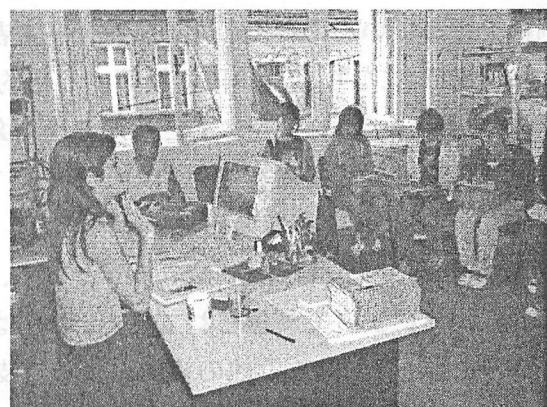
<LDA (Local Democracy Agency)>

イタリアの NGO である LDA は、市民の民主意識を向上させ、ボスニアの EU 加盟に向けて地域密着型の活動を行っている。スタッフは 10 人で、プリエドールのオフィスでは 3 人のイタリア人が働いている。他にもプロジェクトごとに参加者がおり、今回私たちの通訳をしてくれイゴール・ソフィルゴ氏も LDA の一員だ。私たちに話をしてくださったドラガナ・ラドノビッチ氏はプリエドールで働き始めて 3 年のセルビア系現地スタッフだ。

LDA の主な活動は経済援助・教育・農業支援などだ。しかし、LDA は 1 から 10 まで全てを支援するわけではない。最初のきっかけを作り、市民の生活が向上したら独立できるように手を引くような活動をしている。

支援の対象は特に限定されておらず、OEC など他のローカル NGO とも協力して、子ども・大人・女性・男性全ての人のために活動している。例えば、現金収入の少ない家庭をホストファミリーにして外国から来た人を受け入れることによって生計を立てさせていたり、仕事口を見つけてあげたりしている。また、今回私たちが活動した Hambarine (ハンバリネ) と Ljubija (ルビア) のユースセンターも LDA が支援している。

これらの活動資金は、イタリアの町トレントの人を中心に集められ、EU 議会にも申請書を提出して資金を得ている。



LDA でドラガナさんのブリーフィングを受ける

<Bread of Life>

Bread of Life はアメリカの NGO 団体であり、紛争で帰還難民となった人々を助けることを目的に、1996 年に立ち上げられた。この地域ではムスリムの帰還難民が多く、その当初プリエドールでは約 3 万人もの帰還難民が溢れていた。ちなみに、その彼らにパンの配給をし始めたことから Bread of Life という名前になったそうだ。

ここでは今回私たちの目的のひとつでもあったコンピューターの寄贈を行った。彼らはもともとコンピューターを保有していたが、どれも古いものばかりだったので、5 台のノート型パソコンの寄贈はとても喜ばれた。これらは文教大学の先生たちが個人で所有しているものを寄贈してくれたものだ。

その後、アメリカ人の中心スタッフであるネイト・コフマン氏と、Bread of Life のディレクター

であるセルビア人のダンゴ・ムラシュビッチ氏に Bread of Life についてのお話を伺った。

10 年前に始められた最初のプログラムでは、帰還難民の中でも生活することが最も困難な 10 家族が支援対象とされた。農業からスタートし、それぞれの家族にヤギや牛を飼わせて、そのミルクやチーズを売って生計を立てるといったものだった。



パソコンを寄贈する中村先生とネイトさん

また、4 年前から教育支援もはじめ、英語やコンピューターの教室を開いているということだ。私たちはコンピューター教室になっている教室を見学したが、新しいものであるとは言い難いものだった。当初この教室のために古いデスクトップ・コンピューターを先生方から寄贈してもらう計画だったが、輸送経費や輸出許可申請の煩雑さに断念せざるを得なかった。人道的な国際協力にも多くの壁があることを学んだ。善意だけでは決して有効な活動を行うことは出来ないのだ。

失業者対策については、まずは牛を飼わせ、なるべく自力で農業をさせる。その次の段階としてマイクロクレジットと呼ばれる、貧しい人々の経済的自立を支援するために、少額の資金を無担保で融資するというシステムを利用させ、その後、教育支援としてコンピューターの使い方指導や、職業訓練を行っているのだそうだ。また、失業者対策としての年間予算は現地通貨で 100 万マルカ（50 万ユーロ）になり、日本円に換算すると約 7500 万円にも上るという。

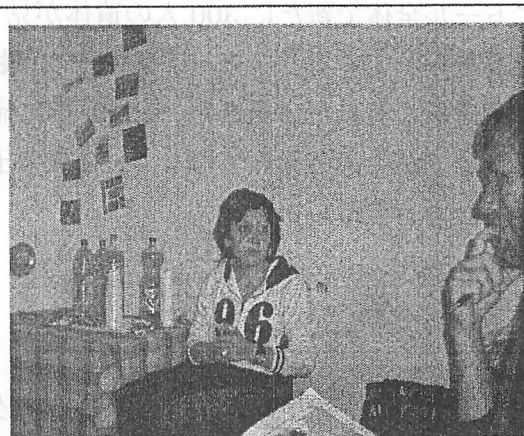
12 月になると、1～12 歳の子どもたちを対象にクリスマスプレゼントを贈ることもしているのだそうだ。これを始めた当初は対象の子どもたちの規模が 1 万 5000 人程度だったものが、現在は 10 万人にまで拡大してきているということだ。このように様々な支援活動を行っている Bread of Life は Mennonite Central Committee という、質素節約をモットーとするドイツのメノナイト・キリスト教団体によって支援されてきた。現在は、支援全体の 80 パーセントをクリスチャンから、残りの 20 パーセントはその他の組織によって支えられているのだそうだ。

最後に、ダンゴ・ムラシュビッチ氏の紛争中の話を聞くこともできた。彼は、紛争中、セルビア軍として紛争に駆り出されても、決して銃を持つことはしなかったそうだ。なぜなら、彼には銃は絶対に持たないという「信念」があった。幸い、紛争には駆り出されはしたが、前線の人たちに食料を運ぶ役目だったので、銃を持つ必要がなかった。しかし、せめて敵から身を守る為にピストルを携帯するように言われたが、それも拒否したという。紛争が終結してから 10 年以上経った現在、彼には子供がいて、その子供たちに紛争のことを伝えることもあるそうだ。そのときは、相手のこと決して憎まないように、と教えているという。

< ユースセンター（ハンバリネ） >

この建物は交流の場である。ほとんどの人が避難したので帰還した時、文化交流のために使える場所がなかったためつくられた。アズラ・ノブキニッチ氏という女性のディレクターからこのユースセンターについて話を伺った。最初は裏にある学校の 1 部屋を使っていたが、難民も同じ建物を使っていたため文化目的に使えない時もあったそうである。現在、使用している建物は、最初使える状態ではなく、ドイツ・ミュンヘンの団体の協力や寄付などの募金によって部屋やトイレをつく

った。しかしドアは壊れやすく、夜に泥棒が入ってしまわないよう金属性に改装した。そのためには多くのお金を使うことを余儀なくされた。今でも電気はなく、断水になることもある。2年かけて2003年に現在の建物が完成したが、最初は十分なスペースがなかった。掃除、経済、再建などをしてくれるドイツ、イタリアなどのボランティアの人や、近隣の地域の人たちもボランティアでコンクリートが打たれただけの建物の整備をしている。近くに学校・スポーツ・交流の場があり、センターでは学校の勉強の補習をしている。また子ども達だけではなく大人やお年寄りなど手助けが必要な人の支援もしている。ボスニア人地域のため、このユースセンター利用者もみんなボスニア人なので、教育もボスニア語で行っているが、他のエスニックの子ども達を呼びスポーツなどで交流をはかっている。子ども達にはセンターで楽しんで欲しいが、それと同時に責任のある子になるように指導しているそうだ。そのため親にも協力してもらっている。父親や母親のどちらかしかない子どもが多いが、戦争で殺害されたため多くは父親のいない家庭である。そのため母親だけでは十分な教育が出来なく、プリエドールには仕事がないため、ドイツ、イタリア、オーストリア、ボスニアの他の地域で働いている。



アズラさんと通訳のイゴールさん

<犠牲者墓地>



犠牲者墓地でイスメットさんの話を伺う

この場所ではイスメット・ムラノッチ氏に案内してもらい、話を伺った。イスメットさんはハンバリネの犠牲者墓地の責任者であり帰還推進委員会、ムスリムの宗教団体委員会の関係者でもある。彼は戦争中に、4カ月間、飲まず食わずで森の中に隠れ、ボスニア、クロアチアへと移動し、その後、国連に名乗り出て脱出してドイツに避難したそうだ。ハンバリネでは3日間集中的に、放火などで多くの人々が殺された。生き残った人でも収容所に入れられた人が多く、家畜扱いされ、抵抗すると殺される状況であった。オマルシュカ

では隠れていなければ殺されるため、途中で亡くなる人もいた。イスメットさんは1999年の7月6日にハンバリネに帰ってきたが、その1年前にハンバリネに近い街のヘデレートに帰ってきていた。家が壊されていたため、帰ってきてもキャンプのテントと地下で暮らしていたそうだ。

ハンバリネには1万2千人が住んでいて、プリエドールでは1992年から1993年までの間に1400人が殺され、ハンバリネでは370人が殺された。370人のうち150人の遺体が見つかったが、220人の遺体は未だ見つかっていない。遺体を見つけるための加害者側からの情報は皆無であり、手探り状態で森や林の中を捜していくしかない。4月20日の記念式で



犠牲者墓地でのユースセンターの少年

はプリエドール全体で新たに 300 人の遺体が見つかった。この墓地にはハーグで DNA 鑑定をしてから遺骨が送られてくる。メモリアルパーク(犠牲者墓地)はお金がないため綺麗に出来ないが、将来的には墓碑をつくりたいそうだ。1999 年に帰還が始まったが、何の身元の確認も出来ない人が大勢いる。全てが大人の男性ではなく、3 歳の子供や、女性もいた。このようなことは二度と起こってはいけなと仰っていた。

<ブリーフィング>



ユースセンター内でアズラさんに話を伺う

ユースセンターで市議会議員のアズラ・パサリック氏に話を伺った。プリエドールはスレブレニツァに続く虐殺が起きた場所である。2 万 4000 人がボスニア人の帰還国内難民で、2000 人がクロアチアからの難民のセルビア人、1 万 7000 人が国内避難民である。市長や多数派はセルビア人だが市議会議長はボスニア人で、平等にしなければならないと考えられ、全ての民族が共存出来る市を目指している。また、最初に LDA が始め大学の教授からインテリなどメンバー構成は様々な NGO などでフォーラム(和平委員会)をつくって取り組んでいる。プリエド

ールではムスリムが迫害されたが、被害者の方から相手を許すことを始めて、和解しようとしている。しかし、数年後どうなるかは不明だそうだ。だが EU 加盟のためにも歩み寄りを始めている。

<ユースセンターでの活動(ハンバリネ)>

8 月 26 日にハンバリネのユースセンターを訪れた。子供達が外で待っていてくれてアズラさんから話を聞いている間は、飲み物やお菓子を配ってくれた。その後、何人かの子ども達と一緒に墓地に行った。墓地で私たちがイスメットさんから話を伺っている間に一緒に来た女の子達が泣いていたのが印象的だった。アズラさんの家で昼食をごちそうになった後、ユースセンターに戻ると女の子達がダンスと歌を披露してくれた。また、このユースセンターや他のユースセンターから来ていた男の子達と一緒に文教ボランティアズの男子と中村先生も参加してサッカーの試合を行った。その後、今度は私たちが阿波踊りと歌を披露し、日本から持ってきた支援物資を渡した。



ユースセンターの子どもたちのダンス

夕食もユースセンターでバーベキューをご馳走になった。と言っても、費用はすべて私たちが子どもの分まで負担して、一緒に夕食をしながら交流するという活動だ。私たちのために作ってくれたソーセージやお肉などとてもおいしかった。外では子ども達と遊んだり、ダンスを教わったりと一緒に楽しい時間を過ごすことができた。

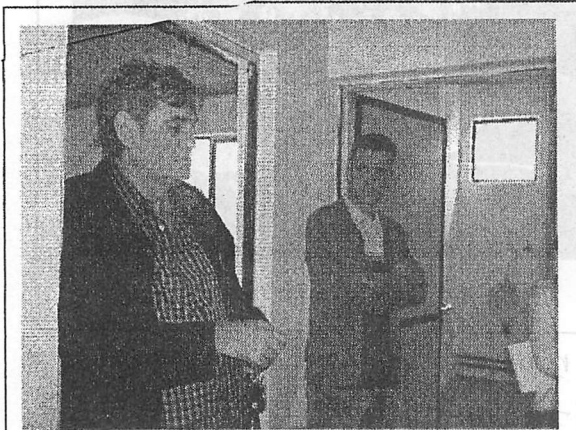
＜オマルシュカの強制収容所＞

この日は午前中、鉱山があるオマルシュカという地域にある鉄鉱山の精錬所を訪れた。この施設ではボスニア紛争中にムスリム人の一時通過的な強制収容所として総計 5000 人ほどが収容され、多いときには一度に 3000 人が収容された。施設全体では 1000 人ものムスリム人が虐殺されたという。この日私たちはその収容所の中まで入って、しかも収容所での拷問体験者の話まで伺うことができた。話をしてくれたのはラザック・フカノビッチ氏とミルサッド氏という男性 2 人である。

この収容所にある白くて小さな建物は、「ホワイトハウス」と呼ばれる。10 畳ほどの部屋が 5 つあり、外から見ると小さくてぽつんとしている建物だ。当時その中に 200 人ものムスリム人が収容されたという。この建物の別な場所では 35 人の女性が収容されていた。収容所でムスリム人たちは重労働させられ、拷問・レイプ・殺人が行われた。死体はホワイトハウスのすぐ周辺に置かれ、ある程度の数になるとトラックでまとめて山へ運ばれた。収容された男性は、例えば父と息子二人で連れて来られ互いに殺し合いをしろと命令され、はむかえばどちらも殺す、などということを言われたりした。現在、見つかっている遺体はごく一部で多くは不明である。今は「ホワイトハウス」と呼ばれてはいるが、実は血みどろの地獄の館だった。



ホワイトハウスの外観



ラザックさん（左）とミルサッドさん（右）

ホワイトハウスのすぐ近くにあるガレージには 160 人が収容された。夏で暑いうえに窓が小さかったため収容された人々は肉体的・精神的にかなりの苦しみを味わったという。

ミルサッドさんは当時難民キャンプを転々としていて、17 歳のときにホワイトハウスに収容され、16 日間を過ごした。ホワイトハウスの中には 15～18 歳の若い人たちがたくさんいたという。ミルサッドさん自身、兄弟や他の家族全員殺されてしまった。

ラザックさんは当時 47 歳。収容所では殴られて左手の指の関節がなくなってしまったり、数箇所を骨折した経験をもつ。16 歳の息子も一緒に連れてこられたが、監視員にはそのことを隠し続けた。なぜなら、親子のどちらか一方を自らの手で殺すことを命ずる非人道的なことが行われていたからである。彼は、「このような証言をすることを快く思わない人はたくさんいる」と言っていた。被害にあったことを家族に知られたくなかったりする人や、加害者のことである。実際に彼自身、車に爆弾をしかけられたことがあったそうだ。この収容所を記念館にして残そうという計画も、セルビア人共和国政府が反対している。今でも危険を感じながら生活しているが、彼は「真実を伝えていく」ことに使命を覚え、一たん戦争後に外国機関の助けでノルウェーに移住していたが、現在はプリエドールにもどり、ジャーナリストとして働いている。

「真実を言えば証言になる。何があったかを伝えることは重要だ。しかし当初はオマルシュカの

ことを考えることすらできなかった。」と彼らは語った。当時現場で何が起っていたのかを知る者は経験者の他はいない。彼らは勇気を出して真実を伝え、それこそがこのような戦争を繰り返さないための手段だと思って証言し続けるのである。彼らに「セルビア人を憎んでいるか。」と尋ねると、「彼らを裁くのは神であり、私たちではない。憎んでも何の解決にもならない。」と答えてくれた。

収容所を管轄していた者は現在オランダのハーグ国際刑事裁判所で法廷にかけられているが、いまだに判決は出ていない。ハーグで告発された者のなかで、罪を認め謝罪した者もいたが、ほとんどの人が何も語らないまま罪が軽くなった。命令ではあるものの拷問などを行った者は、普通に職を持ち働いているという。

<ユースセンター（ルビア）>

ルビアはムスリム人、セルビア人、クロアチア人の3つの民族が混在している地域である。このユースセンターはサネラさんという20代の女性がコーディネートしている。彼女たちは子どもに対して英語教育や平和教育を行っている。今の建物を今年9月に離れる予定でいて、それ以降はドイツの支援によって建てられた通称「キンダーガーデン」という建物に移る。

訪れるとまず、子どもたちがかわいらしい人形劇やかっこいいダンスを披露して私たちを迎えてくれた。そして今度は外に出て、子どもたちがイタリアの人々から教わったという遊びを教えてください、輪になって一緒に遊んだ。年齢の差はあっても、皆同じように楽しむことができて、大いに盛り上がった。

その後私たちは歌と阿波踊りを披露し、日本で準備した遊び道具などの支援物資を手渡した。物資を手にした子どもたちはとても嬉しそうで、そんな彼らを見ていた私たちも胸が熱くなった。この活動にとってもやりがいを感じる瞬間だった。最後には日本から持ってきたうちわに筆ペンで子どもたちひとりひとりの名前を漢字やひらがな・カタカナで書いてプレゼントした。皆とても気に入ってくれたようだった。

サネラは「ルビアの町を活性化させるために、子どもたちが集まるユースセンターを充実させたい。また、それ以外にも医療などの福祉支援も充実させたい。」と言っていた。



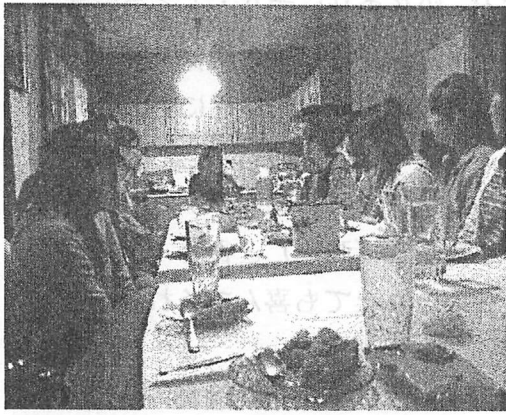
子ども達の名前を書いたうちわと一緒に

<リフィカさんのお宅訪問>

リフィカ・アリスコビッチ氏の夫は、彼女が24歳のとき収容所へ連れて行かれたまま行方不明となっている。そのとき娘さんは2歳だった。いとも殺されてしまったので、もし夫の遺体が見つかってDNA鑑定ができるのはたったひとりの娘さんだけなのである。

家は紛争でかなりの損傷を負ったが、外国からの支援でかなり修復された。しかしそれだけでは足りないので、自分自身働いて生活をまかなっている。現在はウィドー（未亡人）たちで組織するグループで農園を経営している。他に、毛糸を編んで靴下を作り、それを売ることもしている。

今回ごちそうになったもののほとんどは自作の野菜を調理してくれたものだった。私たちのあいだで特に評判が良かったのがレモネードで、良い香りがして甘くてとてもおいしく、すぐになくな



自らの経験を語るリフィカさん（中央）

ってしまった。彼女は戦争中ドイツへ避難し、その保育園でご飯を作っていたという。

セルビア兵がプリエドールにやってきたときのことを伺うと、彼女は「身に着けているボロボロのジーンズ以外には持って逃げたものはなかった。しかし、私には娘と生きるのだという夢があった。」と語ってくれた。現在彼女は38歳。今では墓地へ行くとそこで四葉のクローバーを集めてはとっておき、行方不明の夫の帰りを待っている。

＜ホームステイ＞

プリエドールでの3日間、私たちは現地の家庭にホームステイをした。それぞれグループに分かれて、4つの家庭にお世話になった。各家庭によって多少の差はあったが、1部屋に2人という具合に分かれて3日間過ごした。このように自分の家を受け入れ先家庭になることは、彼らにとって大事な収入源のひとつでもある。

私たちのあるグループが滞在した家の構造は、キッチン、リビングルーム、ユニットバス、その他3部屋（寝室含む）だった。そのうちの2部屋を私たちは使わせてもらったが、ダブルベッドや、ソファベッドなどがあり、とても快適に3日間を過ごすことができた。しかし、バスルームには浴槽はあるが、決してお湯をはることはなく、更にはシャワーカーテンもついていなかったの、バスタブに正座をしながらシャワーを浴びるだけの毎日だった。また、こちらのお風呂やトイレはクロアチアと同様にタンク式なので、ホストファミリー2人プラス私たち4人全員が一晩のうちにシャワーを浴びると、お湯がなくなってしまう。そのために私たち4人は、夜2人、朝2人ずつというように交代で入ることにした。日本とはまた違った形式にみな戸惑い、悪戦苦闘しつつも新しい経験をする事ができた。

基本的にステイ先では朝食だけ用意してもらうことになっていて、それ以外は外で活動があったので、家族と触れ合える時間は朝食の時と家に帰った夜のみとなった。しかし、その短い時間の中でもボスニアの文化を垣間見ることができた。

朝食は全てホストマザーの手作りで、日本のものとは少し違うミートパイやパンケーキ、そしてオムレツを薄くしたようなものだった。どれも日本人の私たちの口に合い、とてもおいしく、毎日の朝食が楽しみのひとつでもあった。そして、毎朝早く起きて、私たちのためにおいしい朝食を作ってくれたマザーのマリッツァさんにはとても感謝している。

また、朝食の時間はマザーと会話をする貴重な時間でもあり、言葉が通じないにもかかわらず、ジェスチャーや辞書などを使って家族の話をしたり、ボスニア語を教えてもらったりした。マリツ



お世話になったホストマザーのマリッツァと

ツァとホストファザーのウルシュには2人の息子さんがいるのだが、紛争のせいで2人とその家族は現在クロアチアに住んでいるのだそうだ。しかし、マリッツァとウルシュはビザの関係でパスポートを持っておらず、彼らがボスニアに会いに来てくれない限りは自分の息子にも、孫にも会うことができてとても寂しい、と涙ながらにマリッツァは語った。

最終日にはお世話になった感謝の気持ちを込めて、それぞれのグループで思い思いのプレゼントを贈った。私たちは、うちわに漢字でマリッツァ（茉莉津亜）とウルシュ（潤酒）と書き、ボスニア語と日本語で「Hvala/ありがとう」と書いてプレゼントした。2人ともとても喜んでくれ、またいつか必ず会おうと約束してのお別れとなった。

今回のホームステイは3日間というとても短いものであったが、ボスニアの文化に触れ、新しい家族ができたことは、私たちにとってかけがえのない宝であり、一生の思い出である。

Srebrenica（スレブレニツァ）

<スレブレニツァ>

私たちは、8月28日から8月30日までの3日間スレブレニツァで活動をした。

スレブレニツァはボスニア・ヘルツェゴビナ東部にある小さな山間の町である。町の名前スレブレニツァは銀鉱山を意味する。人口4万人の7割以上を占めたムスリム人の多くが難民となった。現在の住民は1万人ほどとされるが、セルビア人が7割と逆転した。現在も多くのムスリム人難民が「セルビア人がこわい、仕事もないから」という理由で帰れないでいる。



スレブレニツァに点在する破壊された家々

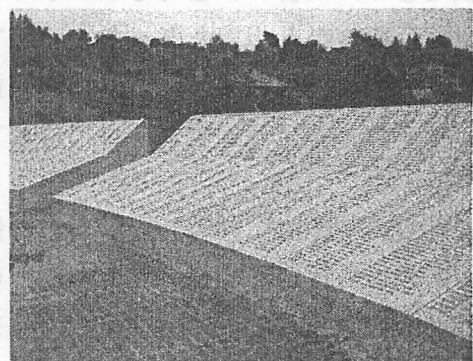
<スレブレニツァ大虐殺>

ボスニア紛争末期の95年7月11日、国連安保理が設けた「安全地域」のスレブレニツァをセルビア人勢力が総攻撃し、約1週間で少なくとも8000人以上のムスリム人の男性と少年が殺害された。第二次大戦後のヨーロッパで最悪の虐殺となった。旧ユーゴ国際法廷から集団殺害(ジェノサイド)の罪で起訴された同勢力の元指導者カラジッチ、元軍司令官ムラジッチ両被告は現在も逃亡中である。

<メモリアルパーク>

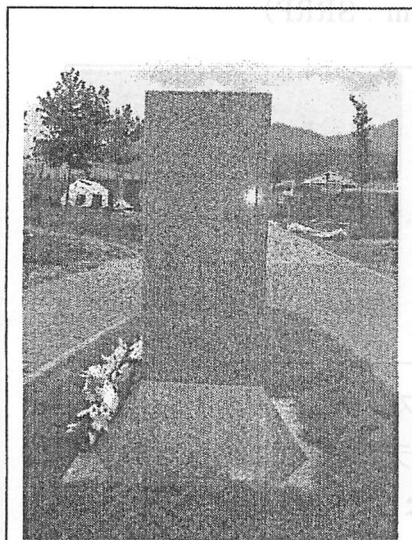
スレブレニツァ郊外のポトチャリ。電池工場跡の広い敷地に、緑と白の墓標が整然と並ぶ。95年7月、国連防護軍の基地のすぐ近くのこの場所で虐殺が行われた。

墓地の慰霊碑には犠牲者ら8370人の名が刻まれているが、身元が確認されて埋葬されたのは昨年1800人ほどだ



犠牲者の名前が刻まれた慰霊碑

ったが、現在は 2500 人ほどになっている。スレブレニツァ近郊では今年も集団埋葬地が次々と発見された。8 月まで収容作業が続いた最大規模の埋葬地では 1153 体が見つかった。埋葬地は 60 カ所以上が確認されたが、まだ 180 カ所ほどあるとも言われている。



スレブレニツァの平和を刻む碑

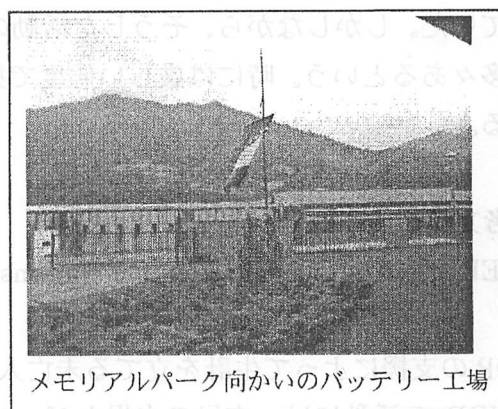
メモリアルパーク内の記念碑には、

“We pray to Almighty God, May grievance become hope! May revenge become justice! May mother’s tears become prayers That Srebrenica Never happens again To no one and nowhere.”

(全能の神に祈る 悲しみは希望に 憎しみは正義を望む心に 母の涙は祈りに変わることを。スレブレニツァの地獄は世界のどこにも、誰にも繰り返されてはならない。生田祐子助教授・訳) と刻まれており、これは「ノー・モア・ヒロシマ」と通じる叫びだ。

<バッテリー工場>

バッテリー工場は、メモリアルパークから通りをはさんだ向かい側にある。現在この工場は閉鎖されており、私たちはメモリアルパーク内からしかこの工場を見る事ができなかった。ここでは、紛争中多くの人が収容され、殺害された歴史を持つ。工場内の部屋には、金網が張られており床には不気味なシミがいくつか残っているという。



メモリアルパーク向かいのバッテリー工場

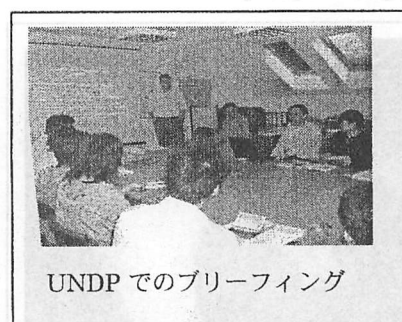
<参考文献>

- ・「Wikipedia」 <http://en.wikipedia.org/wiki/Srebrenica>
- ・『朝日新聞』 2006 年 9 月 28 日 朝刊

<国連開発計画（UNDP）視察>

UNDP 訪問

スレブレニツァの町の中心地には、どっしりとした構えの建物がある。それはスレブレニツァ市役所で、その建物の最上階屋根裏部屋に当たるところに国連開発計画（UNDP）の事務所がある。入り口から中に入ると再びガラス張りの扉があり、警備の人が私たちの身分を確認し終わると、「ピー」という機械音とともに扉が開いた。紛争地における国連機関を訪ねたのは今回が初めてであったため、最初からその重々しさに背筋がピンとなった。UNDP のスレブレニツァ地区復興計画の責任者であるアレックス・プリエト



UNDP でのブリーフィング

氏と経済専門家のギー・ディオン氏からパワーポイントを使っのブリーフィングを受けた。話の内容はスレブレニツァの復興を支援する UNDP の活動内容や、復興を構築するための土台の

重要性などであった。分かりやすく伝えてくれたが、時にスレブレニツァの復興状況を伝える際の曇った表情には現状の厳しさが映されているような感じを受けた。

スレブレニツァ地域復興計画 (Srebrenica Regional Recovery Program : SRRP)

スレブレニツァ地域復興計画(SRRP)とは、地域の人々や、設備に再び活力を与えるために努力する開発の枠組みである。この計画の最終的な目標は、多数の宗教のコミュニティと地方行政との連携を強化し、社会の経済復興を促進させる事である。そうした復興のために、UNDP はビジネス従事者に資金援助をし、それによって得た利益を市の事業推進費として活用する事によって地域政府との関係を築いている。現在、スレブレニツァで暮らす 6500 人が何らかの経済活動に従事しており、また、1 万 7500 人がその恩恵を得ている。この数字はスレブレニツァの人口半数に満たない。紛争前のスレブレニツァの民族構成はほとんどがイスラム系住民であったが、現在は、ムスリム人 30 パーセント、セルビア人 70 パーセントの構成となっている。UNDP の方の話によると、ムスリム人の帰還難民が今後増大し、経済活動が活発になる事が期待されるそうだ。そのためにも、ムスリム人とセルビア人がタイアップして自分たちで起業する機会の必要性を強調されていた。しかしながら、そうした活動の基盤ともいえる現地調査が正確に行われていない等問題は多々あるという。時には厳しい態度で接する事もあり、信頼関係の構築には時間がかかりそうである。



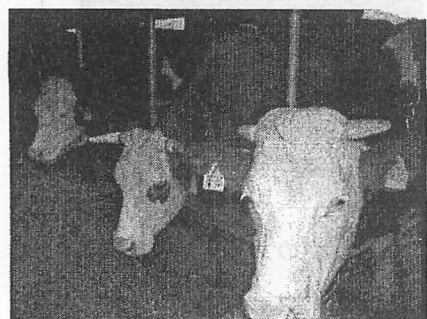
未だに銃弾の痕が残る家々

<参考文献>

「SREBRENICA TODAY」: United Nations Development Programme in Bosnia & Herzegovina(P.5)

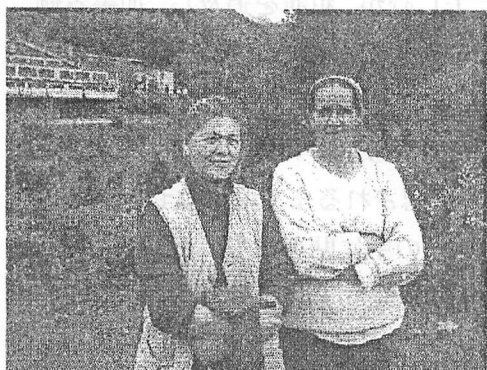
UNDP の支援によって生計を立てる未亡人家庭の訪問

UNDP の活動には、市民の立場とジェンダーの視点をあらゆるものに組み込まれており、その一環ともいえるのが、女性の自立支援である。UNDP は 2002 年から、女性に対して牛や羊を提供し、それらから生み出される牛肉やミルク、チーズや羊毛などによる利益によって、生計を立てるプロジェクトを推進している。スレブレニツァにおける女性の割合はおよそ 60 パーセントだ。そのうち未亡人を含む女性のみ家庭は 18 パーセントに及ぶ。しかしこれをムスリム家庭に限ると、未亡人家庭は大半を占める。このため女性に対する支援は、今後もますます重要性を帯びてくるにちがいない。



UNDP より提供された牛

私たちは、SRRP の範囲であるブラトナツで UNDP の支援により生計を立てる農家を訪問した。1 つは食用牛と乳牛合わせて約 30 頭を育てる家庭であった。ヨーロッパの技術に見合う方法で飼育し、やがて隣国のマケドニアやコソボに送られるとのことであった。牧舎には窓ガラスがなく、自然に空気循環がなされており、清潔なイメージを持った。牧舎の隣の小屋には、800 リットルのタンクがあり、ここで加工した乳製品を出荷して生計を立てている。



UNDP の支援によって生計を立てる女性

次に、羊を飼育して生計を立てている未亡人農家の集落を訪ねた。羊は土地の大きさによってその数が決められ、受け取るのには、それなりの資格が必要だ。私たちが訪ねた女性たちもみな幼い頃から羊の世話を経験している方ばかりであった。このように、自分たちの手で生活を維持しているプロジェクトの実効性は高いように思われた。しかしながら、資金不足のため牛を放牧できなかったり、UNDP が提供した羊をすぐに売りさばいてしまったりと問題はないとはいえないのが現状だ。そのため、定期的に UNDP の職員が訪れ調査を行っている。

ボスニア・サンスキーモスト遺体安置所 身元確認センター

＜ボスニア・サンスキーモスト遺体安置所身元確認センター＞

8月28日、プリエドールからスレブレニツァに移動する途中、私たちはサンスキーモスト(Sanskimost)にある身元確認センター(Center for Identification)を訪れ、所長のシバッチ氏からお話を伺った。センターに入るとすぐに骨だけとなった遺体が並べられているのを目にする。ここでは、ITCY(旧ユーゴスラヴィア戦争犯罪国際法廷)の協力を経て、ボスニア紛争で殺害され身元が分からなくなった遺体をDNA鑑定し、身元の確認がなされている。殺害された遺体は、発見を遅らせ、身元の確認を困難にさせるために、セルビア人はムスリム人を山中の土の中に埋め、各地に点在させた。



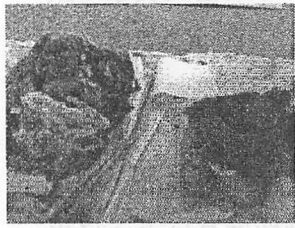
センターの管理者シバッチさんによる解説
(後ろの壁の黒い点の数々は行方不明者の顔写真)

発見するためにはヘリコプターで空から山を見下ろし、新しい草が生えている所を掘り出し、遺体を捜し出す。場所によっては1人のところもあり、今までに合計613カ所を探し、3561人が発見された。



センター内に横たわる身元不明の遺体
(およそ800体)

DNA鑑定は、血液照合や尾髄骨、足の骨、骨の形から身長を測定するなどの方法がとられている。現在このセンターには875体の遺体が集められており、そのうち229体は身元確認が済んだ。遺体の確認が終わると、加害者側がいつどのように殺したかを調べている。骨の上にはぼろぼろになった衣服や靴など所持品が置かれているものもあり、それらも身元確認の材料となっている。遺体の身元確認ができて



遺体とともに置かれた遺品



銃で撃たれた痕

も家族はその理解に苦しむが、犯罪を追及し、加害者側の罪を裁くことはとても大切なことである。この地域では、セルビア人 10 人を含む 5,800 人が未だ行方不明であり、今も発掘作業が進められている。また、身元確認に時間の制限はなく、確認されるまで遺体はセンターに置かれ続ける。センターの中に貼られていた「Where is my father?」と書かれたポスターに胸が痛んだ。

Sarajevo (サラエボ)

<基礎データ>

人口：297,416 人

面積：141.5 km²

民族構成・宗教：ムスリム人（イスラム教徒）/セルビア人（セルビア正教徒）/クロアチア人（カトリック教徒）

言語：ボスニア語/セルビア語/クロアチア語

気候：地中海性気候、温暖湿潤気候、西岸海洋性気候に属する地域だが、山岳地帯が多いため内陸性気候の特徴も併せもつ地域が多い。

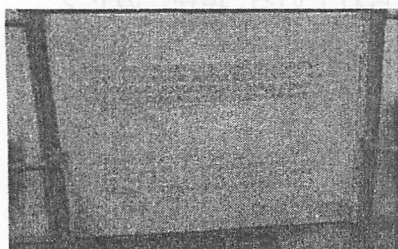
<はじめに>

サラエボはボスニア・ヘルツェゴビナの首都であり、標高約 500m の高地に位置する。四方を山に囲まれているため、ボスニア紛争中はセルビア軍により町を包囲され、壊滅的な被害を受けた。戦後約 10 年が経つ現在では、銃痕の残る建物が紛争中のおぞましい被害を物語る一方、道路や建物の修復は随分と進み、丘の上からは美しい街並みが一望できる。町は旧市街と新市街に分かれており、市民で賑わう青空市場や点在する各国の大使館により徐々に栄えてきているが、紛争中は市の真ん中を流れるミリャッカ川（Miljacka）の通り沿いをスナイパー通りと呼び、その名の通り人はもちろん、犬やネコなど動くもの全てがセルビア人兵士によって標的とされた。



ミリャッカ川（Miljacka）

橋を渡りきった右の道路でオーストリア皇太子夫妻が暗殺された（サラエボ事件）



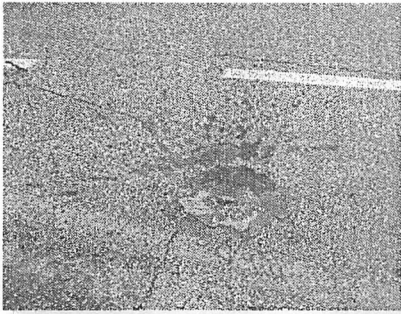
サラエボ事件が記録されたプレート

<サラエボ事件>

サラエボの名を世界に記憶させる最初のきっかけとなったのが、1914 年 6 月 28 日オーストリアのフランツ・フェルディナント皇太子夫妻がサラエボ訪問中、セルビア人青年ガブリロ・プリンツィプに射殺されたサラエボ事件である。この事件が引き金となり、後に第一次世界大戦が勃発した。皇太子夫妻が銃殺された現場に

は大きな石碑が立つわけでもなく、現場のすぐそばの壁にひっそりと記録としてプレートが残されているだけだった。

<紛争の傷跡>



道路に残された砲弾の痕

新市街に位置する青空市場には、紛争当時、市民の不意を突く大きな砲弾が降ってきた。これにより多くの市民が犠牲となり、現在は彼らの冥福を祈る記念碑が建てられ、壁には犠牲となった人々の名前が刻まれている。また、サラエボの象徴とも言えるトルコ建築の名残を残す図書館の前の道路には、紛争の恐ろしさを人々が忘れて二度と同じ失敗を繰り返さないよう、紛争中に落ちてきた砲弾の痕に赤いペンキを流しこんだものが今でも道路に残されている。

<オリンピック記念公園>

1984年2月、サラエボで冬季オリンピックが開催された。その時に開会式に使われた大きな競技場の隣には広大な墓地が広がっている。この土地はかつてスポーツグラウンドであったが、紛争による犠牲者が増え続けたため通常の墓地だけでは埋葬しきれなくなり、墓地に変えられたのである。膨大な数の墓標がたてられており、どれも1992年から1993年の間に亡くなった人のものばかりであった。この墓標の数の多さからも、ボスニア紛争の悲惨さが伺える。

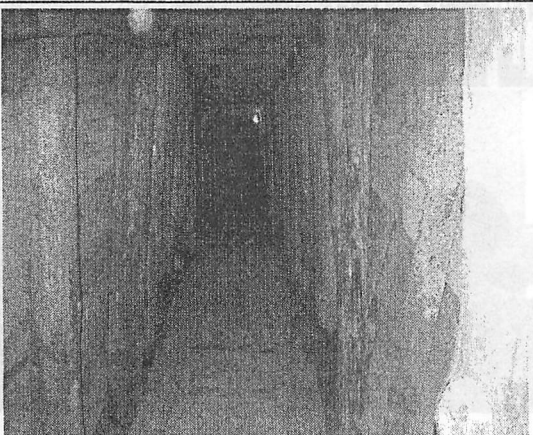


かつてはスポーツグラウンドだったが現在は墓地

墓標の形は決して統一されてはなく、家族などの意向による様々な形の墓標がたっており、中にはハート型の墓標もあった。日本とは違い土葬であるため、動物などに荒らされた跡が多数発見された。また、競技場脇に建つスケートリンクなども紛争中の砲撃によって一部破壊された。

<空港下トンネル>

セルビア軍の包囲網から抜け出すため、1993年7月にボスニア軍によって極秘に掘られたトンネル。当時国連の管理下にあったサラエボ空港の下に掘られた。幅約1m、高さ約1.6m、全長約800mの非常に狭いトンネルであるため、体を屈めて通らなければならない。セルビア軍に包囲さ



セルビア包囲網から抜け出すため掘られたトンネル

れたサラエボと、包囲網の外のボスニア軍とをつなぐ唯一の道で、主に食料や医薬品、武器などの輸送に使われた。内部は木材で補強されており、トロッキ用の線路も設置されている。このトンネルの存在は公には知られていなかったが、出入り口の所をセルビア軍に砲撃されることも度々あった。このトンネルは一般市民も通ることができ、兵士の他、毎日約3000人の人々が行き来していたため混雑が絶えなかった。現在このトンネルは閉鎖されているが、

「トンネル博物館」として部分的に（25m ほど）公開されている。他にも当時の写真や武器、軍服なども展示されており、トンネルを中心に当時の状況を物語るビデオも上映されている。

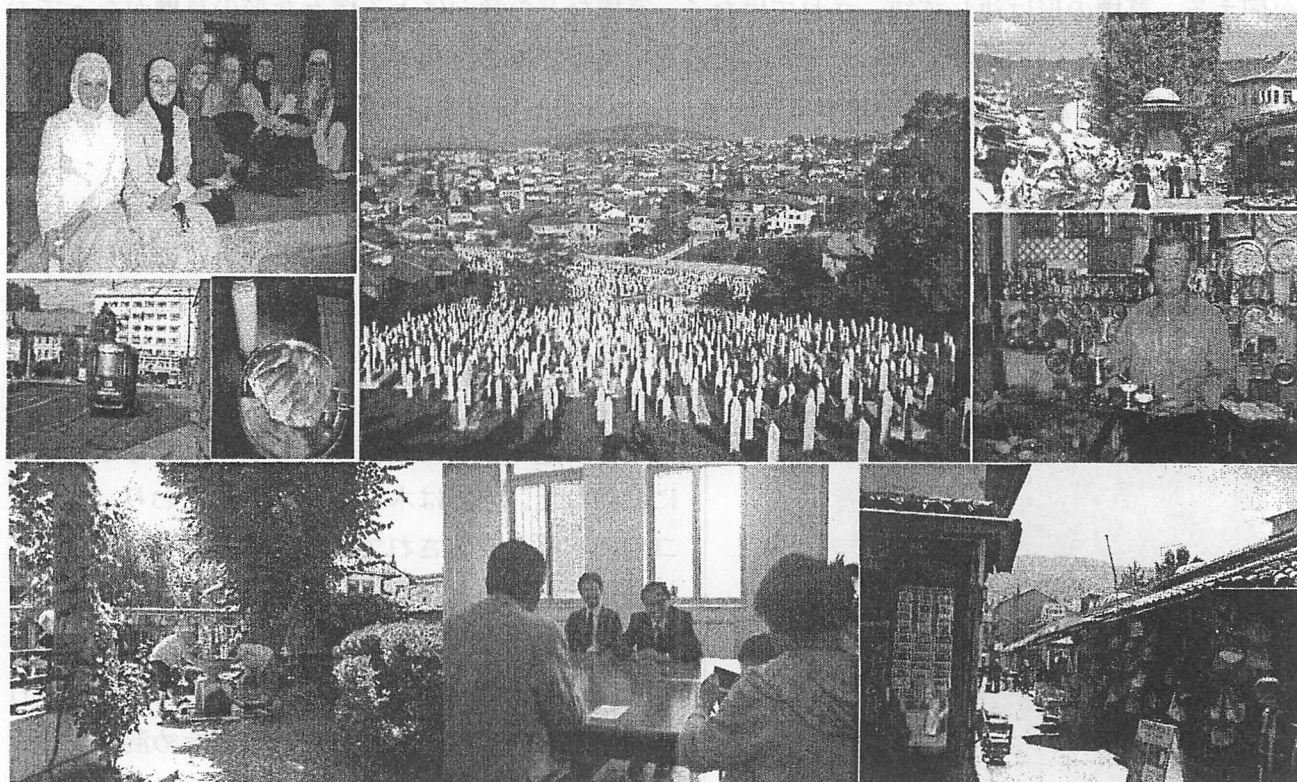
＜在ボスニア・ヘルツェゴビナ日本国大使館＞

サラエボ中心地のビルの2階にある日本大使館で、壘二夫大使の話を聞かせていただいた。現在のボスニア・ヘルツェゴビナの在留邦人は20人ほどで、日本企業の投資もない。このことから日本とボスニア・ヘルツェゴビナとの関係がまだまだ薄いものであることが伺える。日本からの支援に対しても、当初ボスニア・ヘルツェゴビナの人々は少なからず疑心を抱いていたという。しかしそれに関わらず続けて自分達を支援してくれることから、ボスニア・ヘルツェゴビナの人々はやがて日本の真心を感じてくれるようになった。

徐々にではあるものの戦後復興は進んでおり、4、5年後には支援目的の人よりも観光目的の来訪者が増えそうとのこと。また、ボスニア・ヘルツェゴビナ出身のイビチャ・オシム氏のサッカー日本代表監督就任が、日本とボスニア・ヘルツェゴビナの何よりの架け橋になりそうである。実際に大使は自分がオシム氏が代表監督を務める日本から来たと言うと、町の人々は大喜びで迎えてくれるそうである。このように戦後復興と同時に、日本とボスニア・ヘルツェゴビナの関係も徐々により良いものになってきている。



現在のボスニア・ヘルツェゴビナの情勢などを伺った



クロアチア難民キャンプ、ボスニア・ヘルツェゴビナ会計報告

＜ボランティア支援募金＞

総額		¥453,689+€75
内訳	文教大学湘南キャンパス内	¥37,147
	茅ヶ崎駅前街頭募金	¥161,162
	湘南台フリーマーケット	¥31,758
	団体募金	¥141,500
	前年度活動費繰越金	¥82,094
	預金利息	€75 ¥28

- * 湘南キャンパス内では、6月5日と7日に募金の呼びかけをしました。
- * また、今年からキャンパス内の3箇所（LL助手室、ジュリアン・バンフォード研究室、イングリッシュラウンジ）に約2カ月間募金箱を設置しました。
- * 茅ヶ崎駅では6日間通行人に呼びかけをしました。その際、募金活動の趣旨を理解してもらうために、チラシを配布し、昨年の活動の写真や場所を示す地図を準備して活動を行いました。
- * 国際ソロプチミスト茅ヶ崎・布工房くまじ・神奈川県立岡津高校から団体募金をいただきました。

＜活動費＞

総額		¥453,689+€75
内訳	円	¥103,129
	ユーロ €2,300 €75 (合計：€2,375)	¥350,560

換金日時とレート	換金前	換金後
8月16日 (€1=¥152.42)	¥350,560	€2,300

国内支出		¥76,643
内訳	活動準備費	¥22,679
	国内輸送費	¥26,670
	事後報告準備費	¥27,294
	残額	¥26,486

現地支出		€2,331
内訳	ユースセンター支援 [ハンバリン]	€450
	[ルビア]	€700
	通訳・ドライバー宿泊費	€164
	通訳・ドライバー食費	€137
	通訳代	€350
	ドライバー代	€30
	バス代（ボスニア）	€500
	残額	€44

- * 国内支出のうち、活動準備費は募金グッズを作る際の事務用品に充てました。
- * また、国内輸送費は、各地から届く支援物資の着払い代金や、集まった支援物資を成田国際空港へ送る費用に充てました。
- * 事後報告準備費は、写真展に出展する写真の現像代や看板作成費に充てました。
- * 今年も昨年に引き続き、ボスニアのプリエドールにある NGO の「LDA」が支援する二つのユースセンターに寄付をしました。
- * 残額は次回の活動に繰り越します。

<総支出>

活動費	国内支出	現地支出	総支出	残額
¥453,689	¥76,643	€2,331 (¥350,560)	¥427,203	¥26,486 +€44

<来年への繰越金>

活動費 残額	ユーロ 残額
¥26,486	€44

- * 残額（円とユーロ）は来年の活動費に繰り越します。また、ユーロは日本円に換金せずそのまま来年に繰り越す予定です。

支援物資収集報告

今年も現地の子どもたちに支援物資を届けるために、多くの方から支援をいただいた。メンバーの母校や恩師に連絡し、各々の学校で支援物資を収集してもらった。また、広報や茅ヶ崎駅前のビラ配りで私たちの活動を知った茅ヶ崎市民の方たちが、自宅にある物品市内の茅ヶ崎市民活動サポートセンターに届けてくださった。支援物資はすべて箱詰めし、クロアチア、ボスニア・ヘルツェゴビナの訪問先に届けた。支援物資⑧、⑨のキルトは、茅ヶ崎県立鶴峰高校の生徒たちが、手縫いで作ってくれたものだ。

〈支援箱①〉

・筆箱（大）	10 個	・筆箱（小）	14 個	・ノート	50 冊
・鉛筆	691 本	・ファイル	12 冊	・色ペン	118+12 箱
・レポート用紙	8 冊	・チョーク	7 本	・クレヨン	80 本
・消しゴム	4 個				

〈支援箱②〉

・筆箱（大）	11 個	・筆箱（小）	14 個	・ノート	50 冊
・鉛筆	692 本	・ファイル	12 冊	・色ペン	116+12 箱
・レポート用紙	7 冊	・チョーク	8 本	・クレヨン	64 本
・消しゴム	10 個	・赤ペン	3 本		

〈支援箱③〉

・トランプ	5 セット	・はさみ	3 本	・ペン	1 本
・定規	5 本	・黒ペン	109 本	・手紙セット	35 セット
・色ペン	65 本	・アルバム	4 冊	・ペンセット	1 セット
・鉛筆	97 本	・マーカー	50 本	・ノート	3 本
・計算機	1 台	・消しゴム	58 個	・三角定規	85 本
・クレヨンセット	22 セット	・分度器	51 枚	・定規セット	15 セット
・シャープペン	10 本	・ステープラー	5 個	・鉛筆キャップ	122 個
・ホッチキス針	2 箱	・マーカーセット	2 セット	・コンパス	6 本

〈支援箱④〉

・トランプ	5 セット	・はさみ	3 本	・ペン	1 本
・定規	85 本	・黒ペン	110 本	・手紙セット	34 セット
・色ペン	66 本	・アルバム	3 冊	・ペンセット	1 セット
・鉛筆	94 本	・マーカー	59 本	・ノート	3 冊
・計算機	1 台	・消しゴム	58 個	・三角定規	85 本
・クレヨンセット	20 セット	・分度器	52 枚	・定規セット	5 セット
・シャープペン	12 本	・ステープラー	5 個	・鉛筆キャップ	123 個
・ホッチキス針	1 箱	・マーカーセット	1 セット	・コンパス	5 本

・ のり	1 本	・ 下敷き	5 枚	・ 絵の具	1 箱
・ 三角定規セット	15 セット				

〈支援箱⑤〉

・ サッカーボール	8 個	・ テニスボール	4 個	・ ボール	2 個
・ 空気入れ	1 個	・ 縄跳び	1 本	・ バトミントンラケット	1 本
・ シャトル	2 本				

〈支援箱⑥〉

・ サッカーボール	5 個	・ ソフトボール	2 個	・ バレーボール	1 個
・ 空気入れ	1 個	・ 縄跳び	2 本	・ バトミントンラケット	1 本
・ シャトル	2 本	・ バスケットボール	1 個	・ グローブ	2 個
・ カスタネット	2 個	・ ボール	5 個		

〈支援箱⑦〉

・ サッカーボール	5 個	・ ソフトボール	2 個	・ バレーボール	1 個
・ 空気入れ	1 個	・ 縄跳び	2 個	・ バトミントンラケット	1 本
・ シャトル	2 本	・ バスケットボール	1 個	・ グローブ	2 個
・ カスタネット	2 個	・ ボール	5 個		

〈支援箱⑧〉

・ キルト	13 枚
-------	------

〈支援箱⑨〉

・ キルト	12 枚
-------	------

上記の物資を、学生たちで手分けし現地に持って行った。重量制限が年々厳しくなり、支援物資は参加者全員の個人の荷物を減らすことで、すべて重量内に組み込むことによって輸送することができた。これらは、プリエドールにあるハンバリネのユースセンター、ルビアのユースセンターそしてクロアチアの難民キャンプの3カ所に届けた。現地のそれぞれの需要にあわせて支援物資を届けるために、メンバー全員で相談しながら調整した。

＜支援物資を届けて＞

学生として、現地の方々にできることは非常に微力なものだということを痛感させられた。しかし私たちが届けた支援物資に飛びつき、笑ってそれらを手に取ってくれる子ども達の笑顔を見ることによって、今までの苦勞が吹き飛んだ気がした。私たちにできることは本当に小さいことだが、そのことによって少しの時間だけでも、紛争という悲劇のトラウマから彼らを引き離し、笑わせてあげられたということを、私たちは誇りにしたい。多くの方々のご協力を得て、子供たちの笑顔に囲まれた。多くの方々のご支援してくださったことを、心から感謝したい。

広報活動報告

クロアチア、ボスニア・ヘルツェゴビナへの支援物資や募金を集めるにあたり、(株)タウンニュース社茅ヶ崎編集室と茅ヶ崎市民活動サポートセンターに協力をお願いした。タウンニュース社には、タウンニュース茅ヶ崎版に支援物資の収集や募金活動についての記事を掲載してもらった。茅ヶ崎市民活動サポートセンターには物資収集箱を置かせてもらった。毎年物資収集に協力して下さっている茅ヶ崎市立松林中学校や県立鶴峰高校には、今回も物資収集に協力してもらった。以下のようなメディア(記事)を通じてこの活動を知ってもらうことができ、多くの人や団体から支援物資が届いた。私たちの活動はこれら協力して下さったひとりひとりの支援に対し本当に感謝している。

帰国後は、報告写真展「国連 60 周年と私たちの見た世界」を開催した。写真展では、私達が活動したクロアチア、ボスニア・ヘルツェゴビナ、コソボ、フィリピン、ウガンダの写真の他に、国際連合広報局から国連 60 周年の歩みを伝える写真パネルを借りて展示した。写真展は学園祭中だったこともあり、たくさんの方が見に来て下さり、今回の活動を広く、大勢の人に知っていただくことができた。

**文教大学ボランティアズ
紛争地へ届ける
支援物資を募集**

文教大学ボランティアズは、毎年夏休みを利用して、海外の紛争地へ支援物資を届ける活動を行っています。今年度は8月21日から9月1日の12日間、クロアチア・ヘルツェゴビナ、ボスニア・ヘルツェゴビナ、コソボ、フィリピン、ウガンダの紛争地へ支援物資を届ける活動を行います。今年度は8月21日から9月1日の12日間、クロアチア・ヘルツェゴビナ、ボスニア・ヘルツェゴビナ、コソボ、フィリピン、ウガンダの紛争地へ支援物資を届ける活動を行います。今年度は8月21日から9月1日の12日間、クロアチア・ヘルツェゴビナ、ボスニア・ヘルツェゴビナ、コソボ、フィリピン、ウガンダの紛争地へ支援物資を届ける活動を行います。

タウンニュース茅ヶ崎版
6月9日(金)

タウンニュース茅ヶ崎版
7月28日(金)

サッカーボール・縄とびを 難民の子どもたちに

文教大学の学生グループは、文教大学ボランティアズは、毎年夏休みを利用して、海外の紛争地へ支援物資を届ける活動を行っています。今年度は8月21日から9月1日の12日間、クロアチア・ヘルツェゴビナ、ボスニア・ヘルツェゴビナ、コソボ、フィリピン、ウガンダの紛争地へ支援物資を届ける活動を行います。今年度は8月21日から9月1日の12日間、クロアチア・ヘルツェゴビナ、ボスニア・ヘルツェゴビナ、コソボ、フィリピン、ウガンダの紛争地へ支援物資を届ける活動を行います。



学内写真展

「国連 60 周年と私たちの見た世界」の様子



一枚一枚の写真をじっくりと見る学生たち



中庭では音楽会の演奏

タウンニュース茅ヶ崎版
10月13日(金)

【後方支援として】

国際コミュニケーション学科3年 小原香澄

後方支援と現地に赴き、活動してきたボランティアズとの違いは、現地に足を運んだか、運ばなかったかの差に過ぎないと思っている。

国内準備では、皆と共に物資の収集や募金活動に参加した。私が主に担当した仕事は旅行業務関係だった。大学の授業で「旅行業務」という授業を受講しており、授業で学んだことが役に立たないかと思い希望した。私自身、授業で学んだことをどこかで生かせないかと思っていたので、後方支援を通じてそれを実践できたことに満足している。学生の私が旅行業務に携われる可能な範囲はそれほど広くはなかった。しかし、超過料金を払わずに支援物資を現地に運ぶ方法を考えたり、旅行会社の方と連絡をとったりすることで、微々たることではあるが、将来への糧として自信へと繋がっていると感じた。まして、ボランティアを目的とし、支援物資と共に海を渡る団体の旅行業に携われる機会はあまりないと思う。今回の経験は私にとって、とても貴重なものだった。

私は、もっと多くの学生が文教ボランティアズに参加してほしいと思った。「ボランティア」と言っても、募金活動や支援物資、現地での活動だけではないので、国際学部の学生に関わらず、情報学部の学生にも国内準備の段階で自分の持っているスキルを生かして現地に行きボランティア活動をする学生のサポートが出来るのではないかと感じた。現地に行き、実際に見聞きし、現地の人のために何かをするというのもボランティアであるが、ボランティアズの活動をサポートするために国内で活動をするのもボランティアの一部ではないだろうか。

ボスニア・ヘルツェゴビナ、クロアチアに赴いた学生は現地の人々に阿波踊りや歌を披露してきた。私は彼らが歌う曲の伴奏をテープに録音して、テープだけが現地に行った。どんな形であれ、私は現地での活動に少しだけ関われたと感じている。

国際関係学科3年 徳留裕巳

現地に行かない後方支援としての参加であったが、茅ヶ崎駅前での募金活動、小・中学校での支援物資集めなど物資収集活動、現地での交流のための阿波踊りや歌の練習など、現地で活動する皆と同じ活動をしてきた。

湘南台駅商店街で行われたフリーマーケットにも参加した。皆から不要なものを集め、売上金を支援金に当てた。お客さんたちは、支援金のための出店と知るとお釣りを募金してくれたり、応援してくれたりした。茅ヶ崎駅前での募金活動をしたときにも感じたが、本当に協力してくれる人はたくさんいる。

私は現地には行っていない。しかし、この活動は、私にとってとても有意義なものであった。自分の詰めた物資をボスニアの子どもたちが笑顔で手に取っている写真を見たとき、現地に行った学生からののがきが届いたときはうれしかった。実際に現地には行っていないけれど、皆の話を聞いたり、写真を見たりしていると、一緒に準備や事前学習をしていただければ、自分も行きた気になったりした。また、この活動に参加しなければ、阿波踊りは一生踊らなかつたろうし、私たちがアクションを起こすことによって多くの人たちが協力してくれるということも思わなかつたであろう。

後方支援として現地の活動した皆と一番近くにいた私にとって、今回のクロアチア・ボスニア訪問がとても実りあるものとなったこと、そして写真やビデオで皆が見せる笑顔は大変うれしかった。

アメリカ・ニューヨーク活動報告

2006年2月28日～2006年3月7日

現地参加者

国際学部国際関係学科	3年	田渕	大輔
国際学部国際コミュニケーション学科	3年	小原	香澄
国際学部国際コミュニケーション学科	3年	加藤	律子
国際学部国際コミュニケーション学科	3年	小林	志保
国際学部国際コミュニケーション学科	3年	杉田	ちさと
国際学部国際コミュニケーション学科	3年	濱	藍
国際学部国際コミュニケーション学科	3年	宮下	喜子
国際学部国際コミュニケーション学科	3年	柳原	聡子
国際学部国際コミュニケーション学科	3年	山田	友紀乃
国際学部国際コミュニケーション学科	3年	吉川	彩

アドバイザー

国際ボランティア委員会委員長（国際学部教授・現地指導）	中村 恭一
国際ボランティア委員会委員（国際学部助教授・現地指導）	生田 祐子

＜2006 年第 1 回 NY 国連研修・ボランティア活動スケジュール＞

2 月 28 日（火曜日） 14：30 成田空港第 1 ターミナル集合

16：55 UA800 便で JFK(NY)へ

＝日付変更線＝

15：18 JFK 空港着 ホテルへ移動

マンハッタン散策（セントパトリック教会、ロックフェラーセンター、GE 展望台など）と夕食

3 月 1 日（水曜日） [午前]

・ グランウンド・ゼロ視察

・ Norman Thomas High School 訪問、日本文化紹介と日本語を教える交流会

[午後]

・ コロンビア大学訪問：日本人大学院生との懇談。授業見学。

・ ミュージカル鑑賞

3 月 2 日（木曜日） [午前]

・ 国連職員・渡部真由美氏（OCHA）と面会

・ 国連本部内の見学、各国外交官たちのデリゲーツ・ダイニングで昼食

[午後]

・ 国連職員（植木氏、小松原氏、大仲氏）によるブリーフィング

3 月 3 日（金曜日） [午後]

・ 国連職員（田瀬氏、Mr. Frances、益子氏、米川氏）によるブリーフィング

・ 国連職員との会食

3 月 4 日（土曜日） [午前]

・ NPO 団体 NY de Volunteer 代表の日野紀子氏に会う

・ Grand Central Neighborhood Social Services にてスープキッチンのおリエンテーションとオフィスの見学

・ A グループは Grand Central Neighborhood Social Services、B グループは Church of the Nativity に分かれる

[午後]

・ A グループ（食事の盛り付け）B グループ（食事の配膳・掃除）などそれぞれホームレスの人へのボランティア活動

・ 夕刻：ミュージカル鑑賞

3 月 5 日（日曜日） [午前]

・ Times Square Church にてゴスペル鑑賞とメトロポリタン美術館見学、自由行動

[午後]

・ エリス島の移民博物館見学

3 月 6 日（月曜日） [午前] ニューヨークで解散

World Trade Center の跡地を訪れて

9.11—それはテロ事件として史上最大最悪の被害と衝撃を国際社会にもたらした。

<9.11/世界貿易センタービル崩壊>

2001年9月11日、ボストンからロサンゼルスに向かう航空機2機がイスラム過激派によってハイジャックされ、ニューヨークの中心とも言える世界貿易センタービルのツインタワーに激突し、およそ3000人の犠牲者を出した。高層ビルの崩壊によって、煙や破片による犠牲者も多かった。

この事件後、世界貿易センタービルの跡地はグラウンド・ゼロ（爆心地）と呼ばれ、多くの遺族が花や写真、遺品などを手向けに足を運んでいる。



かつてここには世界貿易センタービルが建っていた

<グラウンド・ゼロ視察>

ここが9.11の起きた場所なのか—NY研修に参加したボランティアズにとって、今回が初めてのNY訪問だったため、グラウンド・ゼロに到着した時はこの地で大惨事が起きたことなど想像がつかなかった。事件から5年が経ち、かつてWTCが聳え立っていた場所はフェンスで囲われ、新しいビル建設の準備が進んでいた。ボランティアズの1人は皆とは違う心境でグラウンド・ゼロを眺めていた。彼女の父親の友人がビルの中にいて命を落としたからである。彼女は父親から託された預かり物を遺族専用の献花台に手向けた。その献花台は広大な敷地内にひっそりと遺族や知人、友人の訪れを待っていたという。



遺族専用の献花台
数々の遺品が手向けられ、今も尚、多くの遺族が訪れている

<Trinity Church>

グラウンド・ゼロの向かいにある教会に立つ。教会の内部には世界各地から寄せられた平和を願うポスターや手紙、千羽鶴などがところ狭しと飾られていた。また、救援活動時に不幸にも命を落とした人々の死を悼む手紙やバッジなどもあった。

突然の大惨事にどれだけの人が悲しみ、どれだけの人が世界平和を強く願っていることだろう。



教会の内部
アメリカ国旗や平和を願うポスターなどが飾られている

<フリーダム・タワー>

世界貿易センタービルの跡地には、「フリーダム・タワー」と呼ばれる541メートルの高さに及ぶ超高層ビルが計画され、事件が起きる前と同様に地下の商業施設、地下鉄やバスターミナルなどの公共機関、慰霊の場などもつくられるという。

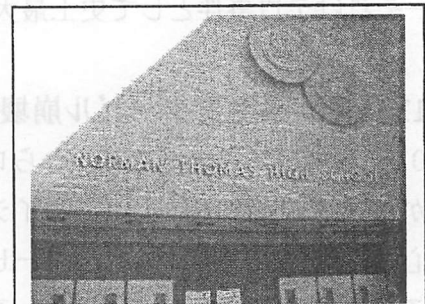
Norman Thomas High School

<Norman Thomas High School について>

アメリカの高校生との交流をはかるため、ミッドタウンに位置する Norman Thomas High School を訪れた。高校の玄関で、空港さながらの厳重なセキュリティーチェックを受けた。9.11 の影響もあるだろうが、銃乱射事件や銃を凶器とした事件が頻発するアメリカ社会での治安維持対策のひとつなのだ。

この高校に通う生徒の人種層は白人 2 パーセント・黒人 26 パーセント・ヒスパニック 67 パーセントとなっている。この数字からもわかるように、私たちと交流した生徒のほとんどがヒスパニックで、英語を第 2 言語として使っている生徒が多かった。彼らの中には 2 世もいて、移民をほとんど受け入れない日本に住む私たちに驚きを与えた。

私たちと交流することとなったクラスはビジネスクラスの生徒であった。彼らはホテル経営について学んでおり、マネージャー・経理担当・飲食担当・娯楽担当・パンフレット作成担当・HP 作成担当といった具合に、それぞれが実際の部署の仕事に沿って 1 つのホテルを擬似運営している。そして驚くべきことにマネージャーのポストについている生徒が他の生徒の成績をつけていた。この取り組みは、この高校の特性と 1 つであると言える。日本では専門学校でこのような授業があるかもしれないが、一般の高校ではあまり考えられない実践的な授業であると思う。



校舎の外観
校舎内に入るには、厳しいセキュリティーチェックを受けなければならない

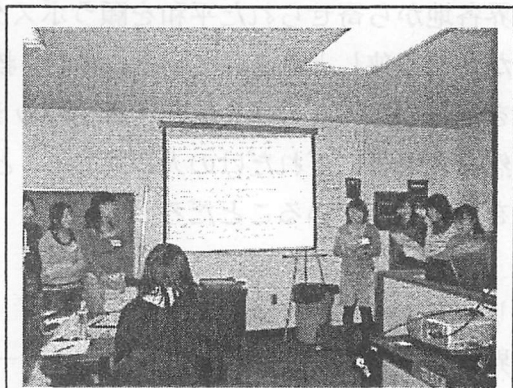
<高校生との交流会>



書道を紹介した後、高校生たちにも挑戦してもらった

5つのグループに分かれて交流会が始まった。私たちは何について紹介するかを事前に準備していった。中でも人気があったのは書道。実際に硯、墨汁、半紙を持っていき、アメリカの高校生たちに体験してもらった。その他の日本紹介もやはりもの珍しいのか、私達の説明を熱心に聞き、容赦ない質問を私たちに浴びせた。彼らが質問をたくさんしてくれたおかげで有意義な時を過ごすことができたが、同時に、たくさんの質問をされて、曖昧な答え方をしてしまったこともあった。将来世界を舞台にした活動を目指す者として、自分が日本人であるというナショナルアイデンティティの意識を高めていく必要があるとも感じた。

軽食を取りながらの休憩を挟み、交流会の最後に私たちは SMAP の「世界に一つだけの花」を歌い、高校生たちもラップや歌を披露してくれ、心の通い合う交流会となった。



平和を願う歌を合唱

コロンビア大学

グループメンバーの友人がコロンビア大学大学院で勉強しているという繋がり、その学生から留学生活の話聞いた。NY 研修に参加した学生の多くが留学に興味を示していたため、貴重な機会だった。留学する上での必要最低限身につけておきたいスキル、英語の勉強法、授業に対する姿勢、日本から来ている他の留学生との接し方のコツ、日本人として求められること、などの話を聞いた。日本ではなく外国で学ぶ時にこそ、日本人としての意見を持つことが重要であることを知った。

その後、コロンビア大学の聴講制度を利用して「アジア文化」と「日本語」の授業に参加することが出来た。



コロンビア大学の様子

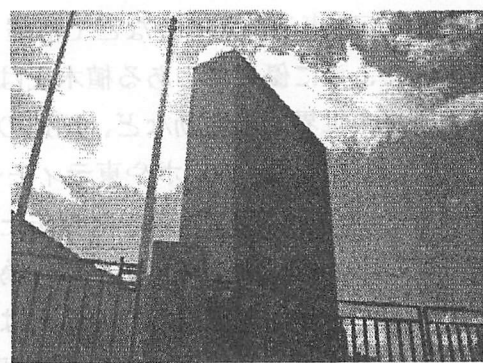
NY 国連本部視察

3月2日、3日は国連本部で見学と研修を行った。この2日間は雪が舞い、肌に突き刺さるような風が吹くとても寒い日だった。そのため国連本部を彩る、周りに並んだ加盟国の国旗は、掲げられておらず見る事ができなかった。

入り口の前には平和を象徴するモニュメントがいくつかあった。地球を表すもの、銃の先が曲げられた武器反対を意味するもの。それらモニュメントの先には不似合いな小さなプレハブ小屋があった。そこでは国連本部に入るすべての人のセキュリティーチェックをする。9・11以降設置されたという。NYの街はあの事件以降、どこもかしこもセキュリティーチェックが厳しくなった。

私たちはここで初めて渡部真由美氏にお会いした。渡部氏は現在NY国連本部で仕事をされており、中村恭一教授とはコソボ国連平和維持活動の頃からの協力関係である。数年前から文教ボランティアズの活動を支援し、湘南キャンパスでも何度か講演をしてくださるなど、文教ボランティアズ最大の国際協力者である。今回の私たちの国連視察や国連で働く方のブリーフィングなどもコーディネートして下さった。

午前中は特別に手配していただいた日本人ガイドの方による国連内の見学。写真やパネルを見ながら国連の歴史や活動を学び、各国の国宝級の贈り物を見て歩いた。国連総会の時に撞かれる「平和の鐘」という日本が贈呈したもの、シャガールが描いたステンドグラス、秘密の部屋と呼ばれるハマーショルド元事務総長が好んだ瞑想の部屋なども見る事ができた。また安保理会議場や国連総会議場内へ入場し、説明を受けた。テレビや教科書で見る場所そのものであり、感動を覚えた。偶然にも安保理会議場ではガイド候補者たちの研修や、国連総会議場ではインターナショナルスク



NY 国連本部

ールの生徒による学生国連が行われていた。まさに世界の動きの一つを実際に体感できたように思えた。



国連総会議場にて

この見学の後、特別に Delegates Dining Room(国連外交官用食堂)で昼食を食べることができた。ビュッフェ形式になっており、多種の前菜からメイン料理、デザートまで揃っていた。高級感があり、とても美味しかった。またこの場所には様々な部署や国籍の人が集まり、多くの話題が飛び交うところでもある。国家間では争いが絶えないが、外交官や職員たちは食堂や廊下では挨拶を交すなど、友好的だという。

<国連職員によるブリーフィング>

現役の国連職員の7名の方々によるブリーフィングを受けた。講演会とは違い、スピーカーの方との距離は近く、よい緊張感と気軽に質問ができる和やかな雰囲気のもと、2日間にわたり特別講義を受けることができた。

植木康弘氏・・・DPI（広報局）

ナミビア・東ティモールなどで活躍され、最近ではイラクやスマトラ沖地震被災地で活動された。紳士的で、声に優しさのある植木氏は「国連は歴史の転換点に今いる」という言葉から始まり、国連の歴史や世界での活動など、国連の全体的概要を説明された。

90年代国連は、コソボや東ティモールでの大量虐殺を機に人道的な介入を試みて、存在を大きくしたという。イラク戦争をなぜ防止できなかったのか、という話の中で、イラク国内へ介入していく難しさの他に国連職員が不法行為を行った事実や、日本とドイツが中心となり安保理改革を行っているが、常任理事国の枠の拡大は今現在では期待できないともいう。また「常任理事国の拒否権の改革はありえるのか」という質問に対しては、「戦争を避けるために拒否権は必要である。拒否権がなければ不利になる国も発生し、脱退していくことで国連が機能しなくなる」という、拒否権の重要性を述べられた。

植木氏は最後に、国連に対する期待は大きいですが、持ち込まれる問題はそう簡単に解決できるものでない。批判はあるが、国連も解決するために努力をしている、と難問と向き合い葛藤を乗り越え、誇りを持って仕事をしている人々によって国連という組織が支えられていることを教えてくれた。

小松原茂樹氏・・・UNDP（国連開発計画）

Human Development ということで、現地の人々や国連の中のどのチームとも関わる部署。166カ国に事務所を構え、専門家や政府と連携し活動する。小松原氏のいるNY支部では、それらのサポートや監視の役割をしている。

小松原氏は穏やかな雰囲気の方で、話を噛み砕いてわかりやすく説明して下さった。

アフリカの地域ではHIV/AIDS感染率は40パーセントで生産活動できるのは世代3人に2人と

いう国もある。親が HIV/AIDS で死亡すると、子どもが子どもを育てなければならず、教育を受ける時間もお金もない。日本は HIV/AIDS 感染率 0.1 パーセントであり、教育を受けるのが当たり前と思っている私たちにとって想像しがたい現実であった。HIV/AIDS 感染率減少も含まれている、2000 年に作られた Millennium Development Goals（ミレニアム開発目標）は加盟国全部が合意し、2015 年までに達成できるよう努力する。

各国が自分たちで解決するための手伝いをする機関であるため、貧困を確実に解消できるように貧困層の人々が教育、就職、経済活動できるよう ownership を尊重しながら活動している。

大仲千華氏・・・PKO（平和維持活動局）

PKO という名前はよく耳にするが、実際どこでどのような活動をしているのだろうか、という疑問を大仲氏が説明してくれた。大仲氏は小柄な女性だが、話の中からフィールドで働く女性の力強さと忍耐力、精神力の高さを感じさせるものがあった。

貧困の地域は紛争をし、その紛争によってより貧困になる、という悪循環になっていることや「ブルーヘルメット」と呼ばれる平和維持隊員の他に、危険な地雷撤去などの作業にあたる多くの人たちが、命を落とすこともある。

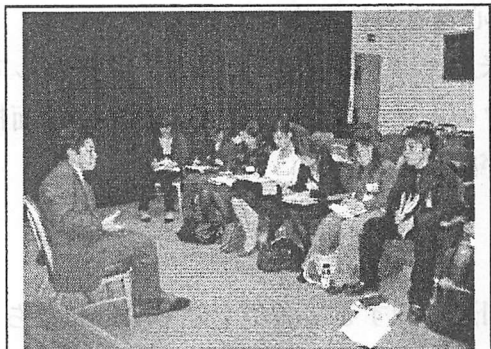
大仲氏は国連のプロジェクトに対し、批判的にみることも大切だという。それは、現場と本部との間に違いがあるからだ。途上国が求めているのは一体何か、現実をみることの大切さを教えてくれた。

田瀬和夫氏・・・OCHA（国連人道問題調整事務所）

田瀬氏はまず「みんなで丸くなって話をしよう」と堅苦しさを取り払い、緊張をほぐしてくれた。わかりやすく、リズムがあり彼の話には耳と心が傾く。

田瀬氏は緒方貞子氏の補佐官として人間の安全保障委員会事務局に勤務されていた経験がある。人間の安全保障とは、人々の生にとってかけがえのない自由を守り、広げていくことであると説明された。

紛争後の地域では人道支援や開発支援をしても、3 年間の間に 50 パーセントの確立で紛争に逆戻りしてしまうらしい。そこでもっと「人間の立場」になり一体そこでは何が求められているのか、ニーズは何か知った上で、国連が動く必要がある。小松原氏同様、ownership の重要性を述べられた。最後に Sympathy（同情）と Empathy（相手の身になって考える）との違いを強調された。



田瀬氏によるブリーフィング

Mr. Frances・・・通訳

Frances さんによるブリーフィングは英語で行われた。彼は国連の公式会議における英語とフランス語の双方向同時通訳のリーダー格である。国連公用語に日本語、ドイツ語が含まれていない原因として、第二次世界大戦の結果と関係していることや、アラビア語が後に公用語になった理由が、石油産出国としての発言力の強さから来るものだとすることを講義してくださった。

私たちはなかなか聞き取れない部分があり、少し難しい講義ではあったが、ジョークの混ざった会話を

伝えるときの難しさや、通訳のときの話の調子を変えたりすることなど、私たちの質問に気さくに答えてくださる方であった。

益子崇氏・・・DDA（軍縮局）



益子氏を囲んで（前列真ん中）

益子氏も中村教授とはボスニア時代からの知り合いだそう
だ。スライドを見ながらの説明であり、わかりやすかった。彼
は小型武器回収プロジェクトの担当で、違法取引による各国
の銃等の小型武器の多さに関する話には驚かされた。回収され
た武器は、1つずつどんなものかという種類や形を記録し、そ
れから 1200℃の熱で溶かすなどして破棄する。武器を溶かし
て出来る金属で、国連本部前にも飾られているようなモニュメ
ントを作るという作業を行うという。

米川吉伸氏・・・DESA（経済社会局）

中村教授の古い友人でもある米川氏は、国連と開発に関して話をしてくださった。
経済的な貧しさだけを貧困というのではなく、教育面や人々の健康面の欠如に対しても「貧困」と
いえる。それらの問題についての会議を行い、研究調査し、業務活動や復興支援を行うのが国連の
役割であるという。また、米川氏は国連で求められる人材を3つ挙げた。

- ① 人種などが違っていても人を人としてみることができる人
- ② 専門知識を持った人
- ③ 心身ともに健康である人

米川氏は、20 年以上も NY に滞在しているが、日本文化を大切にし、剣道の柳生流をニューヨ
ークの人々に教えてもいる。穏やかな面持ちと落ち着いた雰囲気の中には、揺るぎない精神面の強
さが感じられた。

国連に関する知識が十分でない私たちにとって、今回の国
連本部訪問は大きな収穫になった。組織として動く難しさや
世界から専門性を追求される緊張感、また自分たちの視点か
らではなく、常に助けを求めている人の視点に立って考える
自分への挑戦など、国連職員の方々のお話から知ることがで
きた。TV や教科書の中で知っている国連の存在が私たちのな
かで大きく変わり始める。貴重な経験を無にすることなくゼ
ミや授業などで消化できるよう、努力を続けていきたい。先
輩の輝いている姿を目にし、私たちは5年後、10年後の自分
の姿を思い浮かべ、今、前に進み始めた。



国連職員の方と夕食会

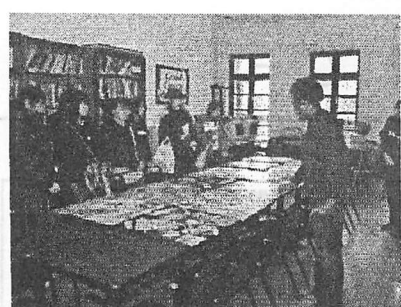
ボランティア体験—NY de Volunteer—

文教大学の卒業生、日野紀子氏が2002年5月に立ち上げた非営利団体『NY de Volunteer Inc.』が取り組むスープキッチンに参加した。研修に参加したボランティアズの多くが初めてのボランティア活動だったため、終始緊張の面持ちで日野さんからの説明を聞いていた。



日野氏から説明を受ける文教ボランティアズ

＜スープ・キッチンに参加して＞



ホームレスの就職支援のための部屋

ボランティア活動場所に行く前に、ホームレス支援団体の事務所を訪れた。そこは24時間開いているだけではなく、寝る場所・衣類・医療・教育・就労支援を受けられる環境作りがなされていた。

その後2つのグループに分かれて、スープキッチンを実施している場所に移動した。そこには住む場所のない人、食事に困っている人などなど、豊かな大都会ニューヨークの富とは縁のない人たちだ。女性も多い。私たちは食事の準備・配給・片づ

けなどの仕事を各々割り当てられ、他の10人のボランティアと共に2時間に渡る作業を行った。

私たちと共にこのボランティア活動に参加したのは、地元の高校生や、隣の州からボランティアをしに来た人もいた。彼らの多くが幾度となく、このようなボランティア活動に参加している。提供する1人当たりの食事の量は予想以上に多く、サンドウィッチにして持ち帰る人もいた。そして、食堂を去るときには1斤のパンが手渡された。意外にも彼らの多くが受け取ることを拒んだ。パンは長期保存が出来ないというのも拒んだ理由の1つだが、スープキッチンに至るところで行っているため、食料調達には困らないからという理由もあるらしい。



現地スタッフと共に給仕をするボランティアズ

＜ニューヨークでのホームレスの現状＞

ニューヨークはホームレス政策に多額の資金を充てている。これは、彼らの生活を保障することで、犯罪件数が減っているというのが理由である。近年日本では、ホームレスは犯罪の被害者として度々ニュースで取り上げられるが、ニューヨークでは、市民を脅かす存在とされている。そのため、過大な支援はホームレスの自立を妨げるとわかっていながらも、ニューヨークの治安を維持するためにも必要な活動としてスープキッチンは位置づけられているのが現実である。

この活動に参加するまで、私たちの多くがホームレスに対して抱いていた印象は「怖い・汚い・臭い」であった。しかし、実際彼らと接してみると、彼らの多くが紳士的に接してくれ、怖さなど微塵も感じなかった。また、体臭もさほど気にならず、身なりも小綺麗だった。ホームレスの人種

も様々であるが、白人は少なかったように見受けられる。また、経済的理由でホームレスになった人は日本と比べて少なく、薬物依存症でホームレスになった人、ベトナム戦争による精神的なダメージによって社会に適用出来なくなりホームレスになった人の割合の方が多い。女性や子どものホームレスのほとんどが麻薬中毒者とも言われる。これと併せて、支援団体もあらゆるホームレスに見合った支援活動が出来るように、対象者を絞って支援活動をする団体もある。

私たちはこの活動を通じ、ホームレスに対する固定観念を払拭することが出来た。また、日本とは異なるホームレスの属性やアメリカ社会でのホームレスの処遇を知ることが出来た。これを機会に、今後日本でもホームレス支援活動に参加したいと思っている。

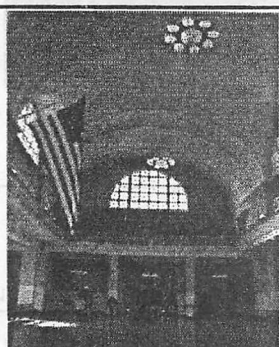
多民族国家・アメリカの原点 —エリス島移民博物館を訪れて—

アメリカという国を知る一つの糧となるエリス島移民博物館。
1892年から閉鎖される1954年までのおよそ60年間、移民局として機能し、およそ1200万人もの移民を受け入れた。現在では、エリス島移民博物館として当時の様子を分かりやすく展示している。

私達はJFK空港に降り立った時にアメリカの多民族社会をまざまざと見せつけられた。まさに「人種のサラダボウル」である。黒人・白人・ヒスパニック系・アジア系などの人種の違いや肌の色の違いだけではなく、彼らが話す英語までもが多様である。そんな彼らの原点とも言える移民博物館を訪れた。今日では、移民よりも難民がアメリカに移住するケースが多いが、当時エリス島を訪れた人々は皆、新天地での、少しでも自由な生活を夢見て自国を離れ、アメリカを目指した。



移民が持ち込んだ荷物の一部が展示されている



エリス島が移民局として機能していた頃、移住者達はここで審査を待った

移民博物館を入った少し奥のところに、自分の先祖が移民の中にいないかを検索するための装置があった。エリス島を訪れるアメリカ国民の多くが、自分の先祖が移民の中に存在しないかを調べるという。しかしアメリカ史における移民受け入れの歴史は同時に移民排斥運動の歴史でもあり、数々の衝突、摩擦が存在した。特に、日系人に対する迫害は移民の歴史の中で重大な人種差別として扱われている。

アメリカの祝日の中には移民からもたらされたものもあり、アメリカ文化の一部として親しまれているものがあることを忘れてはならない。

エリス島に向かう途中で、リバティー島に位置する自由の女神をフェリーの上から眺めた。自由の女神はアメリカ独立100年祭を記念してフランスから贈られた。1892年よりエリス島に移民局を移して以来、ニューヨーク経由でアメリカ入国を目指す移民たちをそれは迎えてきた。



フェリーから見た自由の女神

コソボ活動報告

2006年9月1日～2006年9月5日

現地参加者

大学院国際協力学研究科
国際学部国際関係学科

1年 瀬頭 輝実 (男子)

3年 田淵 大輔 (男子)

アドバイザー

国際学部国際ボランティア委員会委員長（国際学部教授・現地指導） 中村 恭一

＜活動スケジュール＞

9月1日

(午前)

- ・ 8時にサラエボのホテル出発

(午後)

- ・ 12時45分モンテネグロの首都ポトグリツアに到着
- ・ コソボ第2の都市“ペア”に到着、ホテル『ゴールド』に宿泊

9月2日

(午前)

- ・ 水力発電所視察
- ・ デチャニのセルビア正教会訪問

(午後)

- ・ プレストピクのセルビア人村視察
- ・ アルバニア系住民のチュスクムラ村視察

9月3日

(午前)

- ・ コソボ第3の都市プリズレンに向けて出発
- ・ プリズレンの町を見学

(午後)

- ・ ラチャック村視察

9月4日

(午前)

- ・ セルビア人教会訪問

(午後)

- ・ ベシアナちゃん宅訪問
- ・ アデミヤ・シャーリー記念地視察
- ・ ノンダブルカ小学校訪問

9月5日

(午前)

- ・ 現地解散

コソボ自治州 (Self-Government in Kosovo)



〈基礎データ〉

面積：10,887 平方キロメートル（岐阜県と同じ）

人口：約 190 万人（2002 年推定）

中心都市：プリシュティナ

民族(2002 年推定)：アルバニア系 88%・セルビア系 6%

スラブ系ムスリム 3%・ロマ系 2%・トルコ系 1%・

言語：アルバニア語、セルビア語等

宗教：イスラム教、セルビア正教等

政体：国連による暫定統治

GDP (2005 年)：25 億ユーロ（推定）

1 人当たり GDP：1,526 ユーロ（推定）

出典：Crisis in Kosovo；<http://www.imcnews.com/kosovo/kosovoindex.html>

〈コソボの歴史〉

コソボは 12 世紀末には中世セルビア王国・セルビア正教会の中心であった（それ故、今日でもセルビア人はコソボを聖地と見なしている）。しかし、14 世紀末にオスマン・トルコに占領されて以来、多くのセルビア人が北方に移住し、一方、イスラム教に改宗したアルバニア系住民が大量に流入し、人口比は次第に逆転していった。

20 世紀初めにセルビアがトルコからコソボを奪回し、第二次世界大戦後のユーゴ社会主義連邦共和国（旧ユーゴ）では、セルビア共和国の自治州となったが、大幅な人口増を背景として 1980 年代、コソボに共和国の地位を求めるアルバニア系住民の暴動が繰り返され、少数派のセルビア系住民が抑圧を受けるようになったこともあり、1989 年ユーゴ・セルビア当局（ミロシェビッチ政権）がコソボの自治権の縮小を開始し、1990 年にアルバニア系住民が住民投票を経て「コソボ共和国」として独立を宣言した直後にコソボ州議会を解散すると共に、自治権を剥奪する等の弾圧を強めた。

その後、ルゴバ・コソボ民主同盟代表等が平和的手段によりコソボの独立運動を展開したが、事態の進展はなく、1998 年 2 月にアルバニア系のコソボ解放軍（KLA）とセルビア治安部隊との間に武力衝突が発生して以来紛争が激化し、ユーゴ連邦軍も介入。国際社会の和平案をユーゴ政府が受け入れず、コソボにおける人道的惨事が発生する可能性が高まったとして、1999 年 3 月、北大西洋条約機構（NATO）がユーゴ空爆を開始した。空爆開始後、セルビア治安部隊による KLA 掃討活動が強化され、多数のアルバニア系住民がマケドニア等近隣地域に難民として流出した。

1999 年 5 月に G8 外相間で合意された和平案を基に和平交渉が行われた結果、同年 6 月、国連安保理決議 1244 が採択され、武力紛争は終結した。その直後、多数のセルビア系と非アルバニア系住民がコソボからセルビアに避難民として流出した。

現在、コソボにおいては、安保理決議 1244 に基づき、民主的な多民族社会に基づく実質的自治を構築するために、民政部門を担当する国連コソボ暫定行政ミッション（UNMIK）と、軍事部門

を担当する国際安全保障部隊（KFOR）の下で和平履行が進められている。また、2005 年 10 月、国連安保理においてコソボの将来の地位を確定する政治プロセスの開始が決定され、翌月より国連特使による仲介活動が開始された。

参考：「外務省ホームページ」；<http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/serbia/kosovo/josei.html>

＜水力発電所訪問＞

コソボ滞在 2 日目の 9 月 2 日に、滞在しているペアというコソボ第 2 の都市から少し車で行ったところにある、コソボ出身のアルバニア系の方で、アメリカで事業に成功し、その後祖国の為という事で巨額の資金を投じて造られた水力発電所を見学する。この水力発電所では、コソボ全体（約 200 万人）の 2 パーセントの人々（約 4 万人）の電力をまかなっている。一度、ここで造られた電力をコソボの中央電力施設へ送られ、それから各家庭、施設へと送られる。



水力発電所外側

そして、ここからさらに山の頂上に向かって車を走らせること 20 分あまりすると小さな（この水力発電所に水を供給している）ダムを目にすることができた。普段日本で見るような荘厳なイメージは無く、小さなダムであり、場所によってはまだ工事途中の場所もあった。

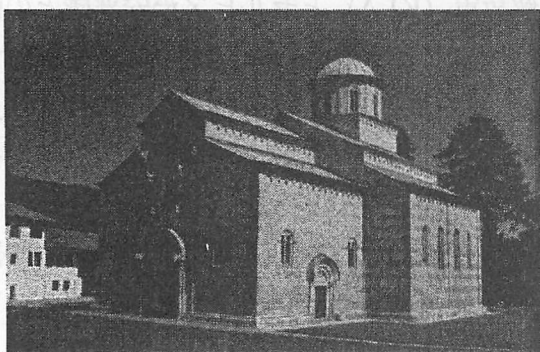
しかし、水を見ると、とても綺麗な色をしていて透明感のある水であり、貯め続けると 2 時間で満水するという。

また、このダムから眺める景色もまた格別なもので、周りの山々を一望でき、下の水力発電所や今通ってきた道などが米粒ほどの小ささではあるが、眼下に見下ろすことができる。その日は晴れていたこともあって、心地よい風と共に、山の向こうまでくっきりと綺麗な景色を眺めることができた。

＜デチャニのセルビア正教会（ネマネッチ教会）＞

水力発電所から程近いところにあるデチャニという世界遺産にも登録されているセルビア正教会を訪れた。

このデチャニはセルビア正教の発祥地であり、カトリック教徒にとってはバチカン、イスラム教徒にとってはメッカがあるように、セルビア正教徒にとってもこのデチャニはとても神聖で大事な場所である。そのため、セルビア側がコソボをセルビア領土内から離したくないという最大原因である。しかし、アルバニア系住民にとっては、このようなセルビア正教会は敵対する民族の教会ということもあり、コソボ紛争後にアルバニア系住民による破壊活動が起こるという恐れもあってコソボ内にある各教会には国際平和維持部隊 KFOR の兵士が警備している。そして、デチャニの教会もその一つである。



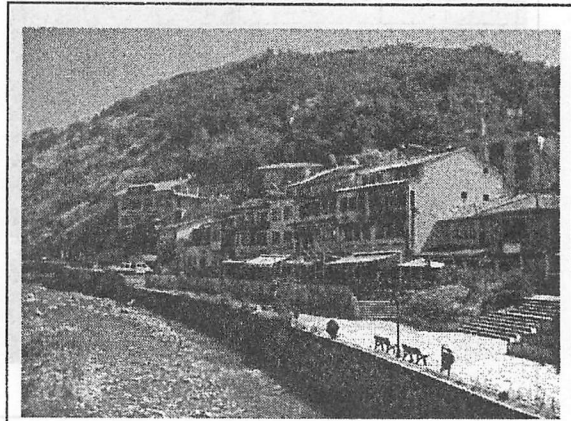
デチャニのセルビア正教会

＜プリズレン視察＞

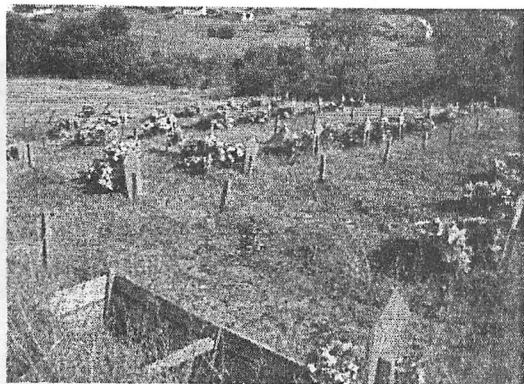
コソボ滞在3日目の9月3日、今まで滞在していたペーヤから次の滞り場所でありコソボ自治州の首都であるプリズチナへ移動する途中迂回して、プリズレンというコソボ第3の町を訪れた。ここでは、オスマン・トルコ文化の雰囲気を残す町で、コソボ住民の生活を肌で感じることができた。

この町の雰囲気はペーヤと同じく、とても賑やかで活気のある町であり、町の人たちもとても楽しく日々生活をしている感じられ、とても数年前まで紛争が起こっていたとは思いつかなかった。しかし、コソボ紛争終了と同時にアルバニア系住民によるセルビア正教会やセルビア人民家への焼き討ちが頻発、写真の奥にも見えるように焼失した建物の残骸を目にした。

この町でよく目にするのは、コソボ紛争時に活躍し、戦死したアルバニア系兵士の像である。自分が目にした中でも3～4体は見た。まさに英雄である。



プリズレンの町



ラチャック村の共同墓地

＜ラチャック村訪問＞

プリズレンの次に、コソボ中央部にあるスティエミエ市ラチャック村を訪れる。ここは、世界の注目を集めるセルビア人によるアルバニア系への虐殺が起きた現場である。99年1月15日、雪が降る中、丘に陣を構えそれまで村を包囲していたセルビア兵士が雪崩の様に村に攻め込み、あっという間に45名の村人が襲撃にあい、撃たれて倒れた後も蜂の巣の様に銃弾を浴びせられて殺されたというむごい事件の現場である。

直後はセルビア政府による隠蔽があったが、最終的には、国連による検死が行われ、遺体が家族に戻され、集団墓地に葬られている。

＜ベシアナちゃんのお宅訪問＞

プリズチナを訪れて2日目の9月4日、車で約1時間のスケンデライ市にあるひとつの家を訪れた。そこは、コソボ紛争中、夜中にセルビア人による焼き討ちにあい、大火傷を負ってしまったベシアナという少女の家だ。中村先生が代表を務めた「ベシアナちゃんを救う会」による日本でのチャリティー活動により、今までに4回の手術を日本で受け、顔と頭のやけどの跡はほぼ治療されて、元気に小学校に通っている。（※向かって左から2番目の立っている少女）



ベシアナちゃんのお宅にて



校長室にて

番背が高い男性)

<アルバニア系住民地区の小学校訪問>

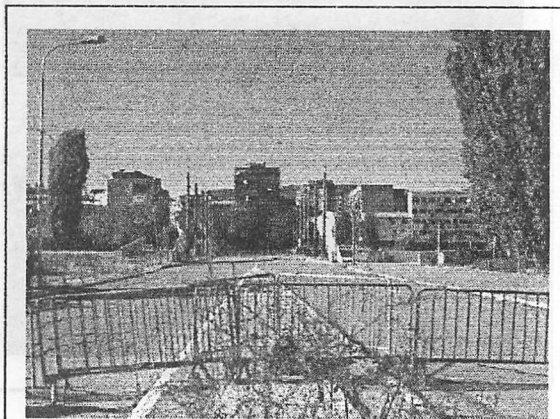
ベシアナちゃん訪問の後、ミトロビツァ市にあるアルバニア系小学校の、ラティフハイリジジ校長先生を訪ねた。ラティフさんのノンドブルカ小学校は川を挟んで北にあったが、今はセルビア人地区になっているため、南の小学校で時間制の間借り授業をしている。校長は紛争後、セルビア人との民族融和がもっとも大事であると同じアルバニア系の親や教師などに訴え続けている人格者として知られる。(※写真中央の1

当初は、賛同する人はあまりいなかったが、熱心な熱い想いや訴えのおかげで徐々に支持する教員や親が現れ、今では、多くの教師の協力を得て学校を盛り上げていて、昨年は NGO 団体 ADRA Japan の招きで日本にも訪れている。

<ミトロビツァの橋“民族の架け橋”視察>

最後の訪問場所は、アルバニア系住民とセルビア人が住んでいる地区の間にあるイパール川にかかる橋を見学した。今は、この町の北側にセルビア人、南側にアルバニア系住民が住み、分断されて生活をしている。以前の橋は紛争で崩壊したが、フランス政府が 2003 年、新しく平和を象徴するデザインの橋を建設した。

しかし、私たちが訪れる数週間前にセルビア人地区で、再び争いの火種となりそうな爆破事件があり、通行は制限されてしまっていた。まさに、民族共存の程度は橋の自由な通行が可能かどうかで分かる。



橋（中央奥に見え、左側にフランス軍が監視）

また、この爆破事件は、アルバニア系住民による犯行だと言われているのだが、あるアルバニア系住民に聞くと、この爆破はアルバニア系住民による犯行だと思わせ、また再び争いを起こさせようと目論むセルビア人によるものだという。両者の溝はまだ深く、お互いがこのような状況では一向に民族和解は遠いものだと感じた。

<セルビア人地区にて>

現在においてもコソボはセルビア人地区と、アルバニア系住民の地区に分けられている。その現状を知るべく私たちは、まずコソボのセルビア人たちが住むペア郊外の“ブレストビク村”に向かった。タクシーに目的地を告げると、彼は今までセルビア人たちが彼らアルバニア系の住民にしてきた仕打ちを話してくれた。ある時、車を運転していると、突然警官に車を止めるように言われ、話を聞いてみるとどうやら自分は信号無視をしたと言う。そんなはずはないと話をしても、セルビア人警官は耳を傾けず、賄賂を要求するような話へと進めていく。彼のようなタクシーの運転で生

計をたてる人たちにとっては、非常に辛い話である。ただ彼がアルバニア系だというだけで、警官にびくびくしながら生活をしなければならなかった。

ブレストビク村に着くと、セルビア人たちが集まって、私たちを歓迎してくれた。平均年齢は40歳ほどで、村の現状について話してくれた。彼らは最近避難していたセルビアから戻ってきたばかり。



ブレストビク村にて(左から二番目は案内をしてくれたアルバニア系のアリ氏)

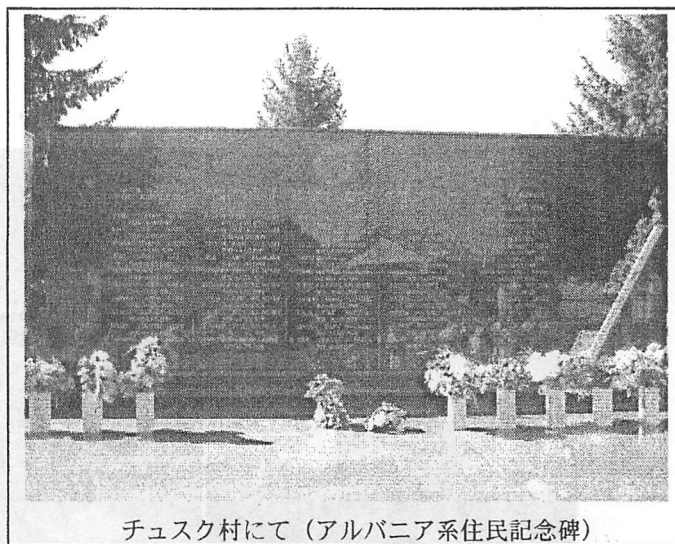
特に貧困で苦しむこともなく、また何か生命を脅かすような事件も今のところはないという。必要となればアルバニア系住民が住む所にまで出かけ、買い物も出来る。そして彼らに今1番必要なものはトラクターや水。農業を営む彼らにとって、この問題は大きい。今も、この村では断水状態が続く。

話を聞いてみて気づくことがある。彼らは加害者ではなく、たまたま加害者側の人間たちであったということだ。彼らはこの地に昔から住んでいて、この地で農作物を作って生活していた。コソボが独立してしまうと、彼らセルビア人たちは、住むところを失うのではないかと

恐れる。そうすると彼らは、セルビア人用の小学校に通う子どもたちと一緒に、昔から住んでいるこの地を離れないといけな。だから独立に反対する。彼らもまた、コソボ紛争の被害者だった。

<アルバニア系地区>

セルビア人地区で知った事実への思いが冷める間もないうちに、今度はアルバニア系住民の意見を聞くために“チュスク村”に向かった。この村ではほかのアルバニア系住民の村と同じように、セルビア人治安警察等により虐殺の犠牲者が多く出た。村の中にはそのときの被害者たちの名前を綴った記念碑と墓標が立ち並んでいる。そしてそこには被害者の数と同じ数の花が添えられていた。私たちを出迎えてくれた村の代表であるハキ・ガシさんと村の子どもや青年たちが現状を話してくれた。この村は1999年の5月14日にセルビア人による虐殺



チュスク村にて(アルバニア系住民記念碑)

が行われた。記念碑には同じ苗字の名前が並んでおり、そのことによりセルビア人たちが家に押し入って、家族を皆殺しにしたことがわかる。「セルビア人が今でも憎いですか」という私たちの質問に、しばし彼は口を閉ざした。しかし彼は記念碑を見上げてそのことを否定した。「独立、その一言に限る。私たちは彼らを憎むつもりもない、何もしない。彼らがしたようなことは、私たちはしない、なにもしないよ。だけど、独立だけはしなくては」。

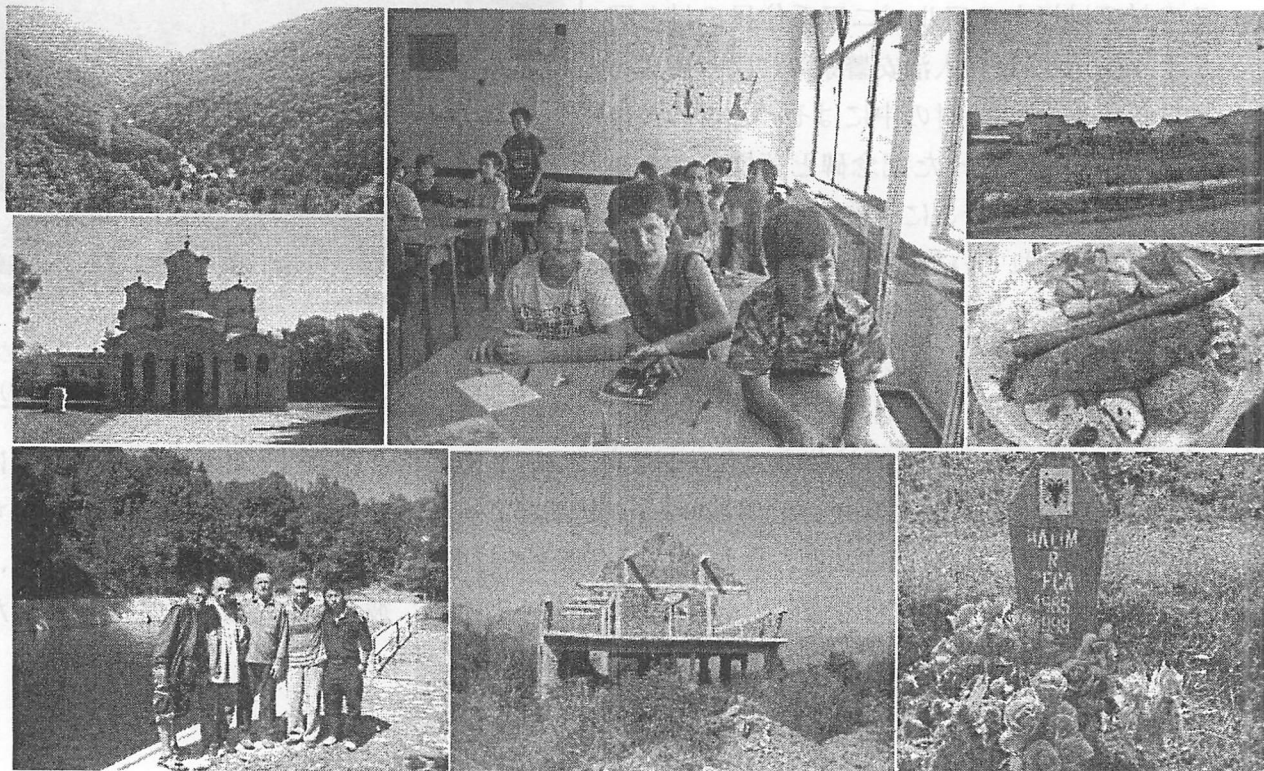
＜アデミ・ヤシャーリー記念館＞

アデミ・ヤシャーリは現在、アルバニア系住民の英雄とされていて、この場所にコソボ中から小学生たちが遠足などで訪れる。彼はコソボの独立を目指し、家族で武器を持って立ち上がったコソボ解放軍（KLA）誕生時のリーダーだ。彼のおかげでコソボは独立に近づいたという意見が多いが、そのために彼と幼児を含む一族 40 人以上がセルビア軍により殺害された。1 週間の包囲に因る兵糧攻めの後の攻撃だった。

その当時の家がそのまま記念館になっている。家の壁にはなまなましい銃弾や、大砲のあとが残る。またスプレーで地元住民が落書きを残している。通訳のファトン・プレトゥニ氏に意味を聞いてみると、アデミ・ヤシャーリーへの賛美と、セルビア人の悪口、そしてコソボの独立について書いてあるという。アルバニア系住民の彼は言う。

「私の青春はあなた達とは違い、セルビア人たちから逃れるためにいつも家の地下室にいた。毎日食べるものもなく、水が飲めない日もあった。おびえて暮らした青春時代、だからどうしてセルビア人を許せるのか。どうして彼らと一緒に住むことができるのか。もちろん別に彼らが嫌いわけではない、普通のセルビア人たちが何かをしたわけではないからね。でも、どうしても好きにはなれないんだ。」

＜コソボの歴史＞



フィリピン活動報告

2006 年 8 月 1 日～2006 年 8 月 12 日

現地参加者

国際学部国際コミュニケーション学科	3 年	濱	藍
国際学部国際コミュニケーション学科	3 年	山川	友希
国際学部国際コミュニケーション学科	2 年	小野寺	由貴

アドバイザー

国際ボランティア委員会委員・ボランティア論担当（国際学部助教授） 生田祐子

ウガンダ活動報告

2006 年 8 月 15 日～2006 年 8 月 29 日

現地参加者

国際コミュニケーション学科	2 年	濱田	美奈子
---------------	-----	----	-----

アドバイザー

国際ボランティア委員会委員・ボランティア論担当（国際学部助教授） 生田祐子

＜フィリピン活動スケジュール＞

8月1日(火)

(午前)

- ・成田空港、関西空港、出発
- ・マニラ空港到着

(午後)

- ・マニラからパリパランへ移動
- ・パリパラン到着

8月2日(水)

(午前)

- ・オリエンテーション

(午後)

- ・コミュニティ訪問
- ・ウェルカムパーティー

8月3日(木)

(午前)

- ・FHI が支援する里子の家庭訪問

(午後)

- ・ワーク①
- (バスケットコートフェンス作り)

8月4日(金)

(午前)

- ・小学校訪問 (折り紙講習、紙芝居劇)

(午後)

- ・バランガイ地区の集会所訪問
- ・映画会

8月5日(土)

(午前)

- ・青年子どもスポーツ大会
- (ゲーム・ダンス)

(午後)

- ・ヘアカット・ヘアアレンジ
- ・ホームステイ

8月6日(日)

(午前)

- ・日曜礼拝に参加

(午後)

- ・ブリハン地区の教会記念イベント参加

8月7日(月)

(午前)

- ・高校訪問
- (折り紙講習・桃太郎の紙芝居・歌)

(午後)

- ・ワーク②
- (バスケットコートフェンス作り続き)

8月8日(火)

- ・コレヒドール島観光

- ・マニラ観光

8月9日(水)

(午前)

- ・ムニンズパル(郡)役場訪問

(午後)

- ・ワーク③
- (バスケットコートフェンス作り続き
- FHI が支援する里子の家補修)

8月10日(木)

(午前)

- ・FHI フィリピン マニラオフィス訪問
- ・橋の下に住む人々の家を訪問
- 食事を配る
- ・ワークキャンプ参加者の里子を訪問

8月11日(金)

(午前)

- ・お世話になった人々に日本食をふるまう
- (カレー・ポテトサラダ・ドーナツ・
- フルーツポンチ)

(午後)

- ・バスケットコートフェンス完成式
- ・フェアウェルパーティー

8月12日(土)

(午前)

- ・パリパラン出発
- ・マニラでショッピング

(午後)

- ・マニラ空港出発
- ・日本に到着

＜ウガンダ活動スケジュール＞

8月15日（火）

羽田空港⇒関西空港、全員集合

23:15 関西空港発⇒5:00 ドバイ空港着

8月16日（水）

8:25 ドバイ空港発⇒14:45 エンテベ空港着

- ・カンパラへ移動
- ・カンパラ市内のホテルに宿泊

8月17日（木）

【午前】

- ・キョーガへ移動

【午後】

- ・キョーガオフィスでオリエンテーション
- ・キョーガ小学校訪問

8月18日（金）

【午前】

- ・ブンタバ小学校訪問
- ・ミソンバ小学校訪問
- ・ナマスンビ小学校訪問
- ・チャンピシオフィス訪問

【午後】

自由時間

8月19日（土）

【午前／午後】

ワーク(学校建設)

＊穴掘り＊

8月20日（日）

【午前】

礼拝出席（キョーガ）

【午後】

自由時間

8月21日（月）

【午前／午後】

ワーク(学校建設)

＊穴掘り&土台造り＊

8月22日（火）

【午前／午後】

ワーク(学校建設)

＊土台造り＊

8月23日（水）

【午前／午後】

ワーク(学校建設)

＊土台造り＊ 完成！

8月24日（木）

【午前／午後】

ワーク(学校建設)

＊床造り＊

- ・キョーガコミュニティ家庭訪問

8月25日（金）

【午前】

ワーク(学校建設)

＊床造り＊ 完成！！

【午後】

- ・ブンタバ or ミソンバ家庭訪問
- ・フェアウェルパーティ

8月26日（土）

【午前】

- ・キョーガ⇒カンパラへ

【午後】

- ・観光 ジンジャー(ナイルの源流)
- ・カンパラ市内のホテルに宿泊

8月27日(日)

【午前】

- ・礼拝出席(カンパラ)

【午後】

- ・ショッピング
- ・コンサート見学(孤児が中心となって全国ツアーをしている団体の舞台)

8月28日(月)

【午前】

- ・カンパラオフィスで最後のミーティング

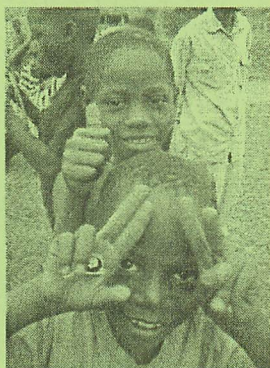
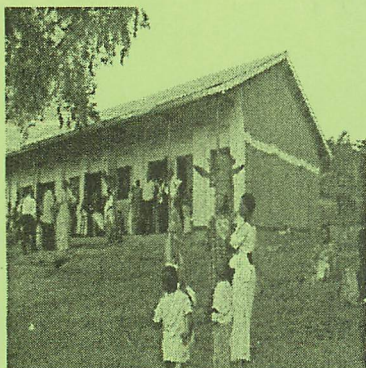
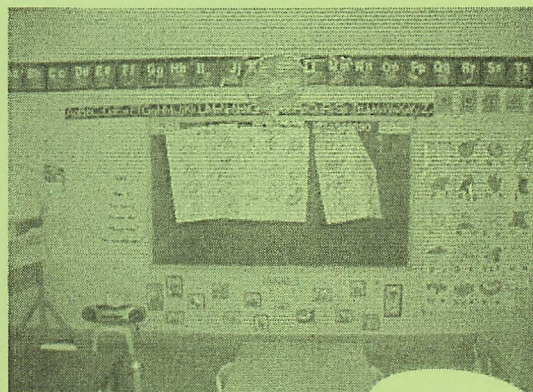
【午後】

- ・観光 動物園(カンパラ)

16:15 エンテベ空港発⇒00:45 ドバイ空港着

8月29日(火)

2:50 ドバイ空港発⇒17:20 関西空港着、解散



日本国際飢餓対策機構

沿革

日本国際飢餓対策機構（Japan International Food for the Hungry 略して JIFH）の働きは、1981年ひとりの日本人がインドシナ難民救援から帰国したのを契機に始まった。以来、国際飢餓対策機構（FHI）とパートナーとなり、国連諸機関、民間諸団体などと協力して、アジア・アフリカ・中南米の開発途上にある国々で、「世界の飢えた人々に食糧と愛を」を標語に飢餓対策にあたっている。

活動理念

日本国際飢餓対策機構は、人間の尊さを重んじ地球家族に奉仕する非営利の NGO（民間援助団体）です。

【JIFH の目指すもの】

- * 人々が、生活の基本的必要に満たされ、自立することに協力する。
- * 自分の可能性を信じ、希望を持って生活し、隣人を愛する人になる。
- * 「分かち合い、助け合う」共生社会を実現する。

活動

- 緊急援助、自立開発援助、啓発・教育、世界里親会、海外人材派遣

飢える世界と私たち

1 分間に約 17 人（うち子ども 12 人）、1 日に 2 万 5000 人、1 年間に 1000 万人が飢えて死んでいる。

日本国際飢餓対策機構ホームページ <http://jifh.fhi.net/>

Philippines (フィリピン)

<基礎データ>

面積 299,404k m²(日本の 8 割の広さ)。7,109 の島がある。

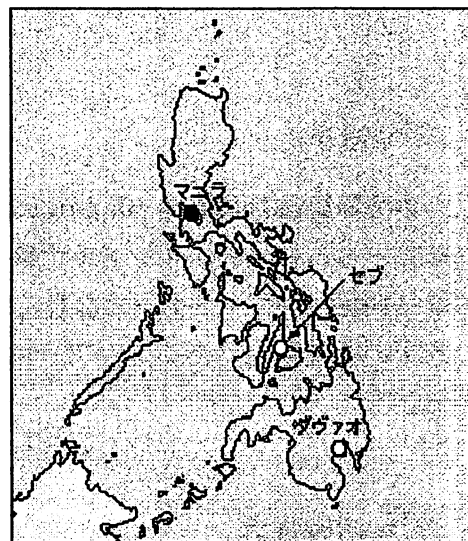
人口 8,300 万人

首都 メトロ・マニラ

人種 マレイ系、中国系、スペイン系、及びこれらとの混血、
更に少数民族等が存在。

言語 フィリピン語、タガログ語、英語

宗教 カトリック、キリスト教、イスラム教



<フィリピンの歴史>

スペイン人来航直前の頃は、中国や東南アジアとの交易で栄えイスラム教が広まったが、各領主は統一した国家を作るまでには至らなかった。1521 年、セブ島でマゼランが殺害され、1565 年にはスペインのミゲル・ロペス・デ・レガスピがセブ島を征服したのを皮切りに、徐々に植民地の範囲を広げ、1571 年にはマニラ市を含む諸島の大部分がスペインの領土となった。支配者であるスペインに対する反抗は幾度となく繰り返されたが、独立運動が本格的になるのは 19 世紀末、フィリピン独立の父ホセ・リサールの活躍によるところが大きい。1898 年米西戦争勃発により、アメリカ合衆国はエミリオ・アギナルドらの独立運動を利用するため支援。6 月 12 日、独立宣言がなされる。しかし、アメリカは、スペインに勝利した後、フィリピンを植民地とする。第 2 次世界大戦中に日本が占領、1943 年にラウレルを大統領として独立（第二共和国）。1945 年の日本敗戦に伴い米領に復帰。1946 年、独立（第 3 共和国）。

<フィリピンの現状>

政治体制・内政

政体 立憲共和制

元首 グロリア・マカパガル・アロヨ大統領

内政 2001 年 1 月の政権交代によりエストラダ前大統領の後継として副大統領より昇格したアロヨ大統領が 2004 年 5 月の大統領選で当選。2006 年 2 月には、クーデター計画が発覚し、大統領は非常事態宣言を発出して、事態の収束をはかった。

参考：外務省ホームページ；<http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/philippines/data.html>

ウィキペディアフリー百科事典；<http://ja.wikipedia.org/wiki/>

フィリピン政府観光省；<http://www.premium-philippines.com/travelinfo/history.html>

＜パリパラン＞

【はじめに】

パリパランはマニラの南に位置するカビテ州に存在するコミュニティであり、車で2時間程かかる。パリパランはⅠ、Ⅱ、Ⅲに分かれており、そして、私たちが訪れたのはパリパランⅢである。

【滞在先】

ワークキャンプ中、コミュニティ内にある3棟の2階建てのコンクリートの施設を借り、グループに分かれ滞在した。その建物の中には浴室と水道があり、浴室にはバケツ、おけがあり、それがフィリピンでのシャワー。私たちの滞在中3回ほど断水した。飲み水や、歯磨きに使用する水は、常にコミュニティの人が施設に運んでくれた。

＜活動内容＞

【バスケットボールコート建設】

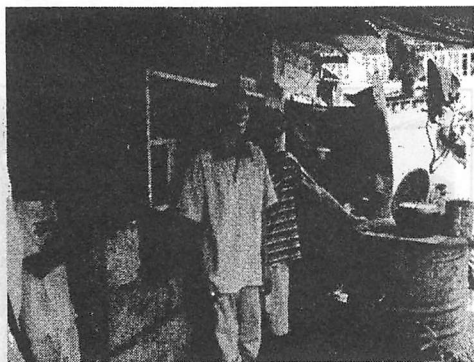
私たちのワークキャンプのメインとなる活動として、バスケットコートフェンス作りを行った。作業内容は、セメント作り、土台作り、そしてフェンスの色付けなどである。厳しい暑さの中での重労働だった。

そして、約10日間でバスケットコートほぼ完成。現地の人たちと一緒に作業し、お互い親しくなっていた。



バスケットフェンスの土台作り

【コミュニティ訪問】



コミュニティ訪問で訪れたある家庭

私たちは、多数の家を訪問した。

家の中は身動きのできない位狭く暗かった。この家族はマニラに住んでいたが、政府により移住させられ、父親は定職に就いていない。歩いていて、この地区の中でさえも貧しさの差があることを知った。

フィリピンはホームページで見ると南国リゾートのようだが、貧しい人は本当に貧しい。コミュニティのほとんどの家は、狭く汚く古く危険で、今にも壊れそうであった。また、においがきつく衛生的に悪い環境の中で生活していることを実感した。それぞれの家族に問題、歴史

があり、衝撃的であった。そして、訪問先のそれぞれの家では、最後にその家族の願いを聞いて、みんなで家族の願いを祈った。

【ホームステイ】

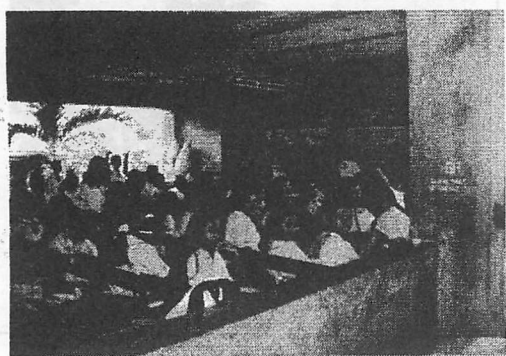
FHI から里子として支援されている子どもの家に私たちはそれぞれ分かれて滞在した。しかし、私たちが滞在していた施設とは異なり、狭く、簡易な作りで、大家族が住んでいるが、大家族が住めるような十分なスペースはない。もちろん私たちを泊められるようなスペースもない。それなのに、ホストファミリーは私たちを歓迎し、私たちのスペースを提供してくれた。

このホームステイは本当に貴重な体験で、一層交流を深めることもできた。貧しさの中にも家族の強い絆があった。



お世話になったホストファミリー

【学校訪問】



バリバラにある高校を訪問

私たちは、コミュニティの高校と小学校訪問をした。メンバーで考えた結果、桃太郎の劇、折り紙、日本の歌を教えることに決まり、毎晩学校訪問のために夜遅くまで準備や練習をした。そして、翌日学校を訪問すると、何百人もの生徒が集まり、私たちの発表に目を輝かせていた。

また、教育施設の不足を実際に肌で感じ、教室には押し込まれたように多くの生徒がいて、机のない生徒もいた。

【ヘアカット・アレンジ】

子どもたちのヘアカットと日本から持参した髪飾りを用いてアレンジを行い、子どもたちと交流を深める良い機会となった。私たちがやることに興味津々で、たくさん子どもたちが集まった。

そして、ヘアカットやアレンジをしてもらった子どもたちの笑顔は私たちをも笑顔にした。

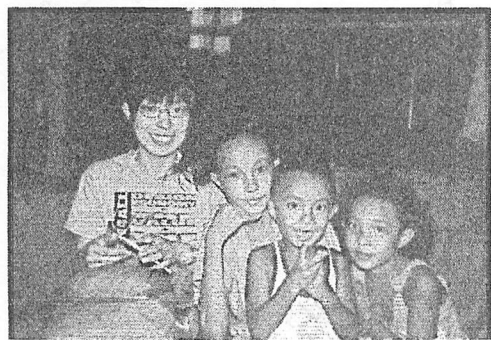


子どもたちのヘアーアレンジ

＜ワークキャンプに参加して＞

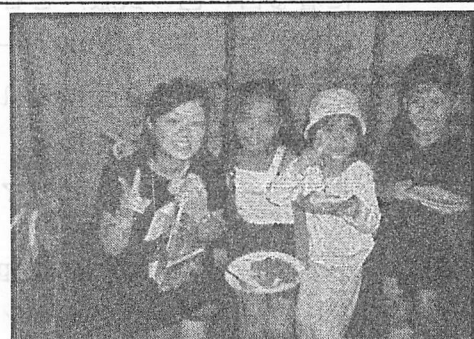
国際学部 2年 小野寺 由貴

現地の人々と私たちは違う社会の人間だという感覚が私の中のどこかにあったが、この地へ来て、私たちもパリパランの人々も皆同じ、同じ国際社会、世界にいる人間なのだという気持ちになった。今回は初海外、そしてキリスト教文化に触れるのも初めてで少し戸惑いもあったが、キリスト教を知り、ひとつの宗教として理解し自分の中で認められるようになった。毎日本当に貴重な話、体験ばかりだった。



国際学部 3年 山川友希

私はフィリピンに行くまで、貧困や飢餓の現状を見たことがなかった。しかし今回フィリピンに行き、自分の目で確かめることができた。私が一番印象に残ったことは、「子どもたちの笑顔」だった。なぜ子どもたちはいつも笑顔なのか。貧しくて満足のいく生活を送ることができないはずなのに、なぜ笑顔なのか。それは貧しくても家族や友達といえることが幸せなのではないか。たくさんの人に囲まれて生きていくことが本当の幸せだと私は思う。

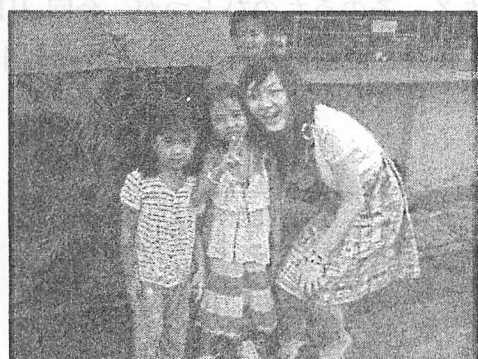


国際学部 3年 濱 藍

今回、私の見た世界は今まで全く想像もつかないものであった。生まれた場所は、みな自分の願いではない。私が日本に生まれたことも、彼らがフィリピンに生まれたことも決して自分の願いではない。だからこそ、私は世界の1人の人間としてちゃんと世界に目を向けていたい。

私が今こうして生きている間、フィリピンでも同じ時が流れ、そして、彼らは今でも同じあの暮らしをしている。私はその彼らの生きている姿を鮮明に思い浮かべながら、今を生きている。

Salamat po!!



Uganda (ウガンダ)

<基礎データ>

面積 24.1 万 k m² (ほぼ本州大)

うち陸地面積 19.7 万 k m²

人口 2,590 万人 (2004 年)

首都 カンパラ

住民 バンツー系民族、ナイロティック系民族 (大きく分けて 2 つの民族)
⇒34 の部族と 28 の違った言語又は方言を使う民族に分かれている

言語 スワヒリ語、英語、ルガンダ語、ウガンダ語など

宗教 キリスト教 (イギリス国教会 / カトリック教会)

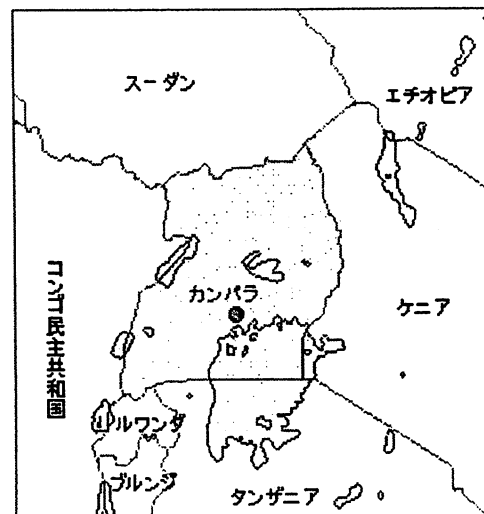
80 パーセント、イスラム教 10 パーセント、

ヒンズー教、アニミズム崇拝者、その他伝統宗教 10 パーセント

服装 男性…普段はスラックス。正式の行事の時などにはカンズー (丈が長くてスラックスの上に着る白い色の衣服) を着用。

女性…ひざ下までのスカート。町ではズボンをはく女性が見かけられるようになったが、地方ではまだまだ受け入れられていない。

食べ物 主食は地域によって様々。南地方…バナナ、マトーケ (バナナ的一种、甘くない) が主に主食。キャッサバ、サツマイモ、豆、米などの穀物や野菜に添えられる。



参考: 「外務省ホームページ」; <http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/serbia/kosovo/josei.html>

JIFH ウガンダワークキャンプ資料

<ウガンダワークキャンプ主な活動内容>

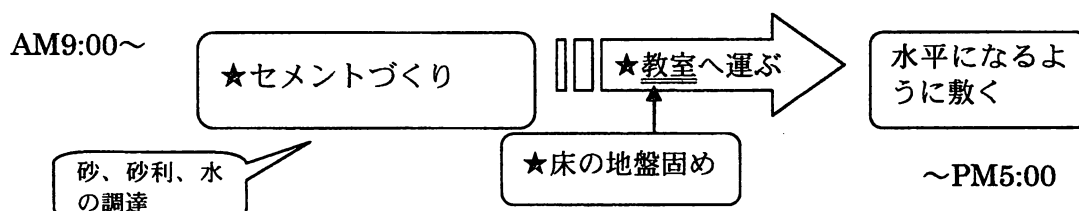
【キョーガ学校の建設】

【ムコノ地区の学校・家庭訪問】

<KYOGA(キョーガ)学校の建設>

⇒首都カンパラから約 33km 離れた地域。FHI 支援開始: 2003 年 / 撤退予定 2013 年

キョーガ学校には、教会、運動場、そして 3 つの校舎がある。そのうちのひとつが、今回 JIFH ワークキャンプチームが建設に携わった校舎である。すでに校舎の壁は造られており、我々の作業の中心になったものは教室の床造りであった。



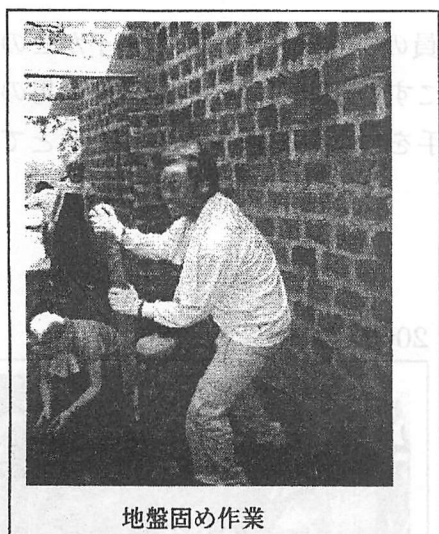
【★まだ固まっていないコンクリート（フレッシュコンクリート）を作る】

雇われた現地大工が指揮をとり、朝一番にその日の分のコンクリートを作る。もっと正確に言えば、コンクリートに必要なものの準備から始めなければならない。すでに砂利は山積みになっていたが、おそらく事前に1つひとつ岩を砕いたのだと思われる。そして水の調達はトラックの荷台にドラム缶と水汲み用のジェリカン、そして人を積んで川まで汲みに行く。この時もジェリカンに汲んではドラム缶に移しての作業がずっと続くので容易ではない。準備が整ったところで、やっとフレッシュコンクリート作りに入る。セメントと砂を混ぜ合わせ、その上に砂利を敷き詰め、水をかけてまた混ぜ合わせる。こうして出来たフレッシュコンクリートを教室の中まで運び、床に敷いていくのである。



水汲みに行く用意をする子どもたち

【★地盤を固める】



地盤固め作業

フレッシュコンクリート作りと平行して床の地盤固めの作業も行う。しっかり固めておかないと地盤沈下を起こしコンクリートが割れてしまう可能性があるからだ。まず乾いた土の地面に水を含ませる。そして、やわらかくなったところで上から踏みつける。とにかくこれ以上地面は沈まないという状態になるまで、足で踏んだり、レンガで叩きつけたりと、様々な方法で取り組んでいく。だがやはり棟梁がその場で作った道具に勝るものは無かった。

【★教室の中に運ぶ】

この作業がなかなかの盛り上がりであった。フレッシュコンクリートを皿状の器に入れて運ぶのだが、それを一人ひとりが教室まで運ぶのは大変である。そこで人間ラインをつくり、次々と渡していくという単純流れ作業を行った。そもそもこれが出来たのは、元気で働き者の小さな大工さんたちのおかげであった。ワークキャンプチームが建設を開始した日がキョーガ小学校終業式の日であったため、その日から子どもたちが手伝いに来てくれた。大人の間に子どもたちが入ってくれることで広がった間隔が徐々に縮まって、フレッシュコンクリートの流れていくスピードが上がった。それとともに、お互いの言語での声の掛け合いが増え、笑顔で満たされていった。

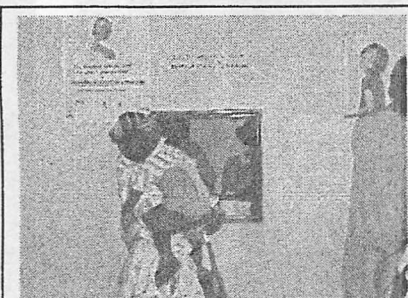


子どもたちと一緒に人間ライン

〈MUCONO(ムコノ)地区の学校・家庭訪問〉

【★BUNTABA(ブンタバ)小学校訪問】

⇒首都カンパラから約 30km 離れた地域。FHI 支援開始：1998 年／撤退予定 2008 年



保健センターで薬をもらう現地の親子



小学校で再会した里親と里子

ブンタバはムコノ 4 地区の中で支援期間が一番長いこともあり、ブンタバ小学校はとても良い環境がつけられている。その一例として、教員が毎朝の長距離通勤をしないでも済むように 1998 年から教員のための宿舎が建設された。通勤距離が長いと勤務希望者がなかなか集まってこないためだ。そしてさらには学校敷地内に保健センターも設立された。訪れたときは常勤のナースが 2 名おり、患者に薬を渡していた。

それ以外に、健康診断やカウンセリングもやっている。診察料は無料だが、薬代は有料である。医者は訪問で来る程度であるが、コミュニティに保健センターがあるのとないのでは住民の安心感が全く違うのであろう。子どもたちは元気いっぱいであった。

また、JIFH 世界里親会員の女性参加者とその里子がこの小学校で再会する場面を目にすることが出来た。里子の男の子が照れながら里親女性と手をつないで散歩をする姿はとても素敵な光景であった。

【★NAMASUMBI(ナマスンビ)小学校訪問】

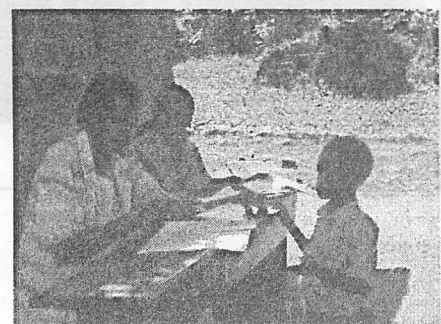
⇒首都カンパラから約 42km 離れた地域。FHI 支援開始：2000 年／撤退予定 2012 年

2002 年時、昨年の JIFH ウガンダ・ワークキャンプで訪れたときよりもまたパワーアップしていると、リピーターの参加者が感激していた。以前のナマスンビ小学校では、大きな木の下での青空教室をしていた。今ではきれいな校舎が建てられて、生徒数もどんどん増え続けている。

4 年前に訪れたワークキャンプ参加者が前に教えた遊び歌を歌い出す。すると子どもたちは大声で一緒に歌い出したのだ。再び訪れたいという気持ちとはこのようなところから芽生えるのだろう。



一緒に歌を歌う子どもたち



先生にテストを見せる生徒

【★MISOMBWA(ミソンバ)小学校訪問】

⇒首都カンパラから約 32km 離れた地域。FHI 支援開始：2004 年 12 月／撤退予定 2015 年

近年支援し始めたばかりであるミソンバ小学校は、生徒数がまだ少ない。校舎も増築中であるが、教員についても力を入れている。生徒が定着できる学校にするために、良い教師を学校に招きたいとのことであった。

どこの小学校も歌と踊りで私たちを歓迎してくれる。その時に必ず用いられるのがジャンベ（アフリカ民族楽器）であるのだが、ミソンバ小学校ではその代わりにジェリカンを使用していた。まだ楽器を手に入れられる段階までっていないのである。しかしジェリカンであっても演奏者の男の子の腕は見事。何もなくても身体一つで場を明るく出来ることのすばらしさを、楽しそうに歌いながら踊っている子どもたちから直に教わった。

〈★ミソンバコミュニティ家庭訪問〉

ミソンバの家庭からは次から次へと様々な現状を目の当たりにした。FHI がミソンバより前から支援を始めているキョーガと比較をしてみたい。

【キョーガ】

キョーガ学校建設中、私たち JIFH チームは小学校近くにある JIFH の駐在スタッフの家で寝泊まりしていた。道路沿いであったということもあり、現地の人の話し声（歌い声も時折混じり）や車の通る音も聞こえ、夜でも賑やかであった。個人経営の小さなお店はいくつかあるようであった。さらにほとんど停電しているが、電気も通っている。比較的貧しい民家でも、屋根付きのレンガ家がほとんどである。



キョーガにある民家の様子

【ミソンバ】

キョーガと1km ほどしか離れていないのだが、ミソンバへと入っていくにつれて静けさが増す。キョーガと違い一軒一軒の間隔がととても広い。ここでも屋根付きのレンガ家がほとんどであったが、中には緑が覆い茂っていて気がつかず通り過ぎてしまうような家や、これが住む所なのかと疑ってしまうような家が点々とあり、電気は一切通っておらず、夜になると真っ暗で静まりかえる。

ある時、エイズに蝕まれている一人の女性に会った。木の下の木陰で3人の子どものと一緒に私たちをもてなしてくれた。一人の子どもは里子支援を受けており学校に通っている。夫も病気で寝込んでいて（おそらくエイズである）収入源がないため、近所の人からの好意で食料等を分けてもらって生活しているのだという。

このような事情を抱えた人々が、賑やかな場所を避けて静かな場所でひっそりと暮らしている現実を肌で感じた。

また、イスラム教徒の家庭も訪問した。一夫多妻制であるため、子どもが10人いることは不思議ではない。この家庭では60歳過ぎの男性に2、3歳の子どものがいた。一緒に住んでいる女性は3番目の妻であるという。大きくなった子どもたちは都市に出稼ぎに行き家計を助ける。子どもをたくさん持てば、その分収入源が増えるという考えである。しかしその結果、何人もの相手と性行為を行うために性病がいきなり蔓延してしまう現状をまねいている。

お世話になった人々

[順不同・敬称略・お会いした時点の肩書き]

クロアチア

三好 功一

在クロアチア日本国大使館参事官

斉藤 厚

在クロアチア日本大使館専門調査員

谷本 明美

在クロアチア日本国大使館 Program Coordinator,

Grant Assistance of Grassroots Human Security Projects

松元 洋

NPO「日本救援行動センター」(JARC)専務理事・マケドニア在住

元 UNHCR (国連難民高等弁務官事務所) 官房長

KATICA SOTINAC

クロアチア難民センタースタッフ

ANDREJ MANOVIC

クロアチア語通訳／ザグレブ大学学生

ボスニア・ヘルツェゴビナ

ープリエドールー

Dragana Radanovic

NGO 団体 Local Development Agency(LDA) スタッフ

Igor Sovilg

セルビア語 (ボスニア語) 通訳／LDA スタッフ

Danko Malesevic

NGO 団体 Bread of Life 代表

Nate Kauffman

NGO 団体 Bread of Life スタッフ

Azra Novkinic

Hambarine Youth Centre 代表

Ismet Mulalic

ハンバリネ犠牲者墓地建設実行委員会責任者

難民帰還推進委員会委員長

Azura Pasalic

Bosnia and Herzegovina Republic of Spska,

President of Assembly, Municipality of Prijedor

(プリエドール市議会議長)

Rezak Hukanovic

プリエドール放送局代表／元オマルシュカ収容所体験者

Mirsad Duratovic

プリエドール在住／元オマルシュカ収容所体験

Nijaz Sljivar

サンスキーモスト遺体身元確認センター所長

Refika Aliskovic

Association of the Widows of Rizvanovici

Sanela Avdic

Coordinator, Ljubija Youth Center

ースレブレニツァー

Alexandre Prieto

Programme Manager, Srebrenica Regional Recovery Programme

UNDP Bosnia (国連開発計画)

Guy Dionne

Programme and Evaluation Specialist,

UNDP Bosnia (国連開発計画)

ーサラエボー

壘 二夫	在ボスニア・ヘルツェゴビナ日本国大使館 臨時代理大使
室谷 龍太郎	在ボスニア・ヘルツェゴビナ日本国大使館専門調査員
泉谷 晃	JICA 援助調整専門調査官／ ボスニア・ヘルツェゴビナ政府対外貿易経済省アドバイザー

クロアチア、ボスニア・ヘルツェゴビナ 日本国内協力者

ー支援物資・募金・広報・その他協力者ー

牧野 由明	外務省欧州局中・東欧課
茅ヶ崎市民活動サポートセンター	
ジャスコ茅ヶ崎店	
国際ソロプチミスト茅ヶ崎	
布工房くまじ	
茅ヶ崎市民募金者、物資提供者一同	
(株)タウンニュース社 茅ヶ崎編集室	
伊丹 芳子	音楽家 (ピアノ伴奏録音)

千葉県我孫子市立根戸小学校
千葉県柏市立富勢小学校
千葉県立柏高等学校
千葉県柏市立第六小学校
千葉県立成田国際高等学校
神奈川県立岡津高等学校
神奈川県立鶴峰高等学校
横浜市立釜利谷中学校
茅ヶ崎市立松林中学校
稲城市立稲城第一中学校

小林 勝法	文教大学国際学部教授 (阿波踊り指導)
藤平 恭子	文教ボランティアズホームページ作成協力 文教大学 情報システム学科 3年宮川ゼミ

文教大学湘南キャンパス教職員・学生

アメリカ、ニューヨーク

渡部 真由美	国連人道問題調整部 (OCHA) 人間の安全保障ユニット
田瀬 和夫	国連人道問題調整部 (OCHA) 課長
植木 康弘	国連広報局 (DPI)
小松原 茂樹	国連開発計画 (UNDP)
大仲 千華	国連平和維持活動局 (DPKO)

Frances Cousins

益子 崇

米川 佳伸

Swati Dave

日野 紀子

Kenyatta Skyless

Kathe Raaberg

Steven M. Satin

James Caracciolo

小泉 進次郎

国連総会・会議管理局 (DGACM)

国連軍縮局 (DDA)

国連経済社会局 (DESA)

国連広報局 (DPI)

NPO 団体 NY de Volunteer Inc. 代表／文教大学卒業生

NPO 団体 : Grand Central Neighborhood Social Services

NPO 団体 : Street Project

Norman Thomas High School 校長／ニューヨーク市教育局

Norman Thomas High School 教員

コロンビア大学政治学専攻大学院生

コソボ

Dr. Neshad Asllani

Ali Asllani

Faton Preteni

Latif Hajrizi

Zeqir Ademi

Director, Kosova Center for Human Rights

Child Human Rights Experts

元 UNMIK 職員、通訳

ノンダブルカ小学校校長

コソボ UNDP 職員

フィリピン・ウガンダ

神田 英輔

ーフィリピンー

奥村 いずみ

太田 留美子

Chill T. Fortunado

Rose Marie Bernabe

日本国際飢餓対策機構 開発・教育部総主事

日本国際飢餓対策機構スタッフ (東京)

日本国際飢餓対策機構スタッフ (沖縄)

国際飢餓対策機構フィリピン チームコーディネーター

国際飢餓対策機構フィリピン パリパラン世界里親会スタッフ

ーウガンダー

清家 弘久

西川 真一

朝夷 佳光

青山 亜紀子

高橋 ゆかり

日本国際飢餓対策機構スタッフ

日本国際飢餓対策機構スタッフ

日本国際飢餓対策機構ウガンダ駐在スタッフ

日本国際飢餓対策機構エチオピア駐在スタッフ

日本国際飢餓対策機構エチオピア駐在スタッフ

編集後記

国際関係学科 3 年 田淵大輔 編集代表

「ボランティアやってるんだ、すごくがんばっているね、応援するよ。でも、君みたいな学生がいつて何か変わるの？」

そんな質問を、私は何度か投げかけられました。文教ボランティアズの代表になっても、私自身が大きく変わったわけでもなく、あこがれていた今までの先輩達のように、自分がなれたとも到底思えなかったのです。

コソボで子供をかかえながら、手を失った老婆が道ばたに座り、物乞いをしていました。私はとっさに自分の財布の中を見ましたが、そこにある金額では、彼女らを現状から立ち直らせることは到底無理でした。ボランティア活動で、自分の無力さを一番感じた時です。車は騒音と共に無情に通り過ぎながらも、困っている私の表情をみて、笑ってくれた彼女の顔が、今でも鮮明に思い出せます。

現地で他の学生達と一緒に、日本で練習した歌や阿波踊りを披露しました。その話を聞いた方たちの中には、それで現地の人たちの生活が何か改善されたのかと疑問に思う方がいるかもしれません。確かにその通りかもしれませんが、私たちの訪問によって彼ら全員が喜んでくれたことは事実です。私たち学生が現地に赴き、日本で一生懸命練習をした歌や踊りをみて、難民や紛争被害者という立場であるにもかかわらず、私たちと一緒に笑ってくれました。それで人々の生活が何か一変するというわけではないでしょう。しかし、現地の人たちを少しだけでも笑わし、共に生活をし、日本という国を彼らに印象づけられたということだけでも、うれしく思います。

昨年の今頃の自分には想像もできなかったことですが、お湯もでない難民キャンプで生活し、この報告書を出すにいたっては、夜遅くまで原稿と奮闘したことは、大学生活の中でとても充実した時間でした。ご支援くださった皆様にここから感謝を申し上げます。ありがとうございました。

国際コミュニケーション学科 3 年 加藤 律子 編集副代表

「ボランティアをする」ということは何だかおかしい言い方だなと思うときがあります。それは「自分が素晴らしいことをしている」という様に言っているようではないのです。そしてこのような活動を友人に話すと、決まって「素晴らしいね。」という反応が返ってくることが多いです。

私たちは今年海外のさまざまな国で“ボランティア活動”を行ってきました。日本では知りえない紛争の悲惨さ、貧困の深刻さに触れ、活動した学生ひとりひとりが現地の人のために何か少しでも自分が力になれたらという思いで現地での活動したことでしょう。

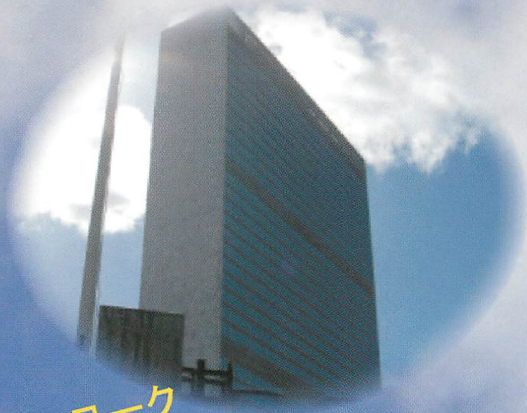
そういった気持ちを私は日本にいる今でも持ち続けられたらと思います。道端で困っているお年寄りがいたら手を差し伸べられる、電車の中でも多くの人が座れるようにさっと席をつめる。それらはボランティアとは呼ばれないかもしれませんが、そういった相手に対する配慮、思いやりを少しでも多くの人が持ち続けることが、住みよい社会さらには平和な世界へとなっていくのではないかと思います。

この報告書には現地で活動した様子が写真と共に載せてあります。多くの人にこのような活動を理解していただき、この報告書を読んでご自分も参加してみようと思っていただけたら嬉しいです。

最後にこれら活動は多くの方々の協力の上に成り立っており、さまざまな場面でサポートしてくださった方々に本当に感謝しています。

製作 文教ボランティアズ
発行日 2006 年 12 月 4 日
発行 文教大学国際ボランティア委員会
神奈川県茅ヶ崎市行谷 1100
電話 0467-53-2111
e-mail ikuta@shonan.bunkyo.ac.jp
協力 文教大学国際学部
文教大学湘南総合研究所
表紙デザイン 国際学部 3 年 江連佑太郎
表紙作成協力 広報学科 3 年 松村沙弥加

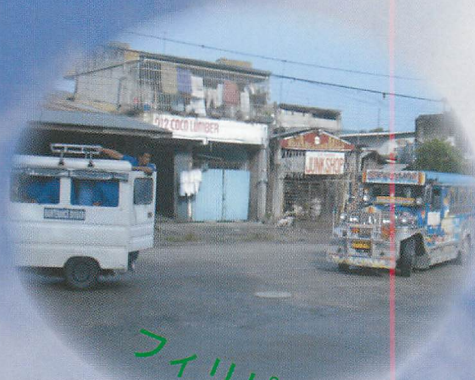
印刷 株式会社 三光堂印刷
神奈川県藤沢市本町 1-3-33



ニューヨーク



コソボ



フィリピン



ウガンダ



クロアチア



ボスニア・ヘルツェゴビナ

文教ボランティアズ 2006